幼馴染との付き合い方

トマトクン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼馴染との付き合い方

【Ｎコード】
Ｎ６２９９Ｓ

【作者名】
トマトクン

【あらすじ】
幼馴染で学年でも人気者の遠藤綾。しかし彼女には別の顔があって、僕以外は誰も知らない秘密を持っていた。そしてその秘密とは、人に露見しては絶対にいけないものであるから大変で――。まったり＋ほのぼの風味の学園ラブコメディー。

1―1　春と直

「春、春」

それは優しくも低音な直の声。
さらには、揺り起こすような軽い振動。

何度かあった光景だと思いつつも、ゆるゆるとしたまどろみに浸る。
けど、その状況がとにかくおかしい。

「あっ」

僕は、ようやく今の状況に気がつく。
こんなところで、うたた寝をしている場合ではない。

「直」

「ん」

「ごめん」

「春、いい」

直は、心の底から謝る必要なんかないという表情。

ただ、直の場合は無表情。

だから、普通の人に見分けはつきにくい。
僕と後一人、幼馴染だけが判断できる。

「それよりも、春」

「ん？」

「気分は？」

「え？」

「気分」

「ああ、問題ないよ」

こんなときでも、こっちの心配をしてくれるのが直。

「うん、大丈夫だな」

頭の一番深いところを意識して、僕はもう一度つぶやく。

「大丈夫だ」

すると直は、僕の手を握ってくる。

「よかった」

しかし僕は、とにかく両手をのばし、さらに意識を覚醒させる。

もちろん、照れくささもある。

目前には、いつもよりとりすました表情の直。
あいかわらず可愛いよりも美人に分類される顔立ち。

いつもと変わらない、世の中の曖昧な事象をすべて見通していそうな瞳。それは目元ぱっちりではなく、一重の奥ゆかしいかんじの瞳。

黒目の中の僕が透けて見えている。

「春、それで」

「うん？」

「どうしたの？」

「あ、そうだね。なんて説明すればいいんだろう」

「なんか起こったの？」

「ああ。でも、言葉にすれば全然たいしたことないよ」

直が首を傾げる。
そのまっすぐな黒髪が糸を引くように流れていく。

「今さ、ちょっと眠ってたんだ。ただ、それだけ。……ほら、一瞬だけ意識を持ってかれることってない？」

「あるかな」

「うん、あるよ。きっとさ。こう、なんでもない瞬間に持っていかれるようなかんじでさ。自分でもああ、持っていかれたなってかんじのやつ。そんな会心のうたた寝に誘われたんだ。これ、直もあるでしょ」

「ん。あるかも」

「でもさ、そのときに直の声が、頭上から降ってきたんだよ。なんかのフラッシュをたかれたみたいだった。こう光が一点に収束するような感覚でさ」

僕はそう言うが、直はいつものように無表情。

「どう思う？」

「わかんない」

やはり直の表情は変わらない。
そして、あいかわらずの口調。

でも直は、口数が少ないことで、息詰まることがない。
そんな不思議な雰囲気を備えていた。

「でもね、春」

「ん？」

「ここで寝てはいけない」

「あ、そうだよね」

それもそのはず。
今、僕達は屋上の一角にある給水タンクに身を隠している。
この大玉みたいな給水タンクのタラップを登ると、人二人分くらいのスペースがあってそこにいる。
もっとも、人二人分といってもぎりぎりのスペース。
直と僕は、互いに身を寄せ合って隠れていた。

「ところでさ直、なんでこんなところに給水タンクがあるんだと思う？」

「春、それは真理」

「どういう意味？」

「水は高いところから低いところ」

「そっか」

僕は納得してうなずく。
直はまるで姉みたいだが、年子の妹である。
僕の生まれが四月、直が三月。

同じ学年という珍しい兄妹。
その割には、僕が直に付き従っている。
なぜなら、直は賢かったが、僕はそうでもないから。

直に心の偏差値というのがあれば、間違いなくその値は高い。相手を思いやる気持ちと、誰かを幸せにする能力。この二つは格段に

抜けている。

つまり何が言いたいのかと言うと、僕の自慢の妹だということだ。

1－1　春と直（後書き）

ご感想、ご指摘、評価、レビュー、お気に入り登録など、随時受け付けております。
作者の大きな励みとなりますので、ぜひ気軽にお願いします。

1―2　幼馴染

話題は給水タンクから、直の屋上の平和を守る話にシフトしていたが取り止めになった。
屋上へと続く階段の音がかすかに聞こえてきて、いつものように悟る。

「もう少しで綾がきそうだ」

「ん」

「静かにするか」

ところで、僕たちがなぜこんなところにいるのか。
それは幼馴染、綾の要請である。

遠藤綾は、世間で通ずるところのお嬢様で、クラスでも人気が高い。
男子がクラスで好きな人を話すときも、決まって綾の名前が出てくる。

また綾のファンクラブもある。
なので綾はよく告白されるのだが、その場所を屋上に指定していて、僕達に見守ってくれるよう指示していた。

しかし、こうしていつも如才なくお嬢様として君臨している綾だけど、その実態はだいぶ異なる。
彼女は猫かぶりなのである。
僕に対しての態度は、もっと活発でわがまま。じゃじゃ馬であれこれ命令し、好き勝手し放題で怒りっぽい。

もちろん、それをクラスでは、出していない。
だから誰も知らないし、知ることもない。

しかも知らないで言えば、僕と綾は重大な秘密を共有している。
そしてそれは、もはや禁じられた遊戯に近い。

「春」

直の呼ぶ声で、僕は現実に引き戻された。

「なに？」

「私、いつも思うんだけどね」

「うん」

「始まらないストーリーって無性に切なくなるんだ。どうしてわからないんだけど、そんな気持ちになってしまうの」

それは口数の少ない直にしては、珍しく長いセリフ。
しかし、僕には意味がわからない。

「そうなの」

「そうだよ」

「僕にはわからないな」

「ううん。そんなことない」

「どういうこと？」

僕がそう聞くと、直は僕を見つめてきた。
切れ長の視線がいっそう細められて、内心すべてを見透かされるような気持ちになる。
もっとも、僕に何の含みもないのだから、見透かされるも何もない。

「そのうちわかるよ」

「教えてくれないの？」

「自分でわかって」

「そっか」

「ん」

「でも、わかるようになるのかな」

結局、僕は納得できないでいた。
僕たちは双子に間違われるくらい外見が似ている。
なのに、感じるところはまったく違っている。

「あ、もうくるね」

「ほんとだ」

直がそう言ったと同時に、屋上に繋がるドアが開く。
入ってきたのはもちろん綾。

それと名前は知らない同級生の男子。
いや、門松くんだ。

二人は、晴れている日には富士山が一望できる屋上のスポットまでやってきて、お互いに対峙した。
そう、これから行われるのは儀式だ。
定番の型となりつつある、いつも儀式が始まるのだ。

1－3　告白

「あ、綾さん」

「はい」

「あの、綾さん！」

緊張している門松くんは、何度も幼馴染の名前を繰り返す。
このやり取りで二、三分くらい費やすこととなる。
が、やがて整理ができたのか、彼は少しずつ落ち着いていく。

「俺」

「うん」

「綾さんが好きです」

門松くんは、気持ち良いぐらいのさわやかな笑顔で言い切った。

「ありがとう」

「はい」

「ありがとう。門松くん」

「俺、綾さんとお付き合いできたらと思うぐらいに大好きです」

「ほんとにありがとう」

けれどその言葉とは裏腹に、ほんの少しだけ表情を曇らす綾。
その変化に気がついたのか、門松くんがこう言う。

「あ、いいんです」

「門松くん？」

「いいんですよ。綾さん」

変わらずに笑顔でいる門松くんが、胸の前で手を振っている。
それは綾に気遣わせたくないという想いが透けて見えてしまう。

「俺、そこまで望んでいませんから」

「ごめんなさい」

「いえ。綾さんに自分の想いを伝えられて幸せでした」

すべてを言い終えたらしい門松くんが、踵を返しはじめた。

「綾さん。さよなら」

「門松くん」

「そして、ありがとう」

こうして告白をした男子が去っていき、綾は一人残される。
そんな中、僕は思う。

ほんとに、もう何人目だろうか。
この定番となった告白の儀式。綾が告白される光景を、給水タンクの小さなスペースで見つめているこの儀式。

山の稜線をなぞっているかのような綾の視線。
その印象的な瞳はどこを見ているのだろうか。
僕にはちっともわからない。

「……」

風と共にたそがれている綾は、完全無欠の美少女で、足りないのは飛ぶための翼だというくらいだ。
今はそんな神秘的な感じすら受ける。
とにかく、僕達は綾のところへ行く。

「はぁ」

綾がため息をついている。
憂いを含んだ表情でも、絵になる幼馴染。

「綾、見ていたから」

「ありがとう、春」

「いいよ、べつに」

やけに素直な幼馴染を前にして、僕はぶっきらぼうに返事をする。

「直もありがとう」

「ん」

「私はその人のためにも、好意が受け入れなかった場面を忘れるわけにはいかないから」

「そうだね」

「だから、直に覚えてもらってるの」

「綾はいつも同じことを言う」

直が綾を抱きしめて、綾がそれを受け入れる。
だけど僕は、その光景をどこか外れた視点で見ていた。

「綾」

「なに？」

「僕がさ、ここにいていいの？」

「え」

「なんだかここにいるのが相応しくない気がしてさ」

僕がこう言うと、綾は頬を膨らませた。

「春」

柳眉を逆立てた綾の表情に、僕は押し黙ってしまう。

「たしかに春はいなくてもいいかもね」

幼馴染の顔が奇妙にゆがんだ。

「そっか」

内心で何も感じないと言えば嘘になるが、その通り。

完璧にお嬢様をこなしている幼馴染が僕に頼るのは、そうそうない。

このような場面に居合わせているのは、直のおまけみたいのもの。

実際、僕が必要なのは、あの秘密の遊戯のときくらいだ。

「でも、春はばかすぎ」

「？」

「春はなにもわかっていない」

「どういうこと？」

「ふん」

明らかに機嫌の悪くなった綾に視線を合わせようとしたけど、露骨に目をそらされる。

しかし、その子供っぽいしぐさに、いつもの綾が戻ってきたと思う。

だが、原因は僕である。

どうすればいいのかと悩んでいたのだが、その綾はというと、屋上の手すりに身を乗り出し大声で叫んでいた。

「春のばかっ」

「春のばか」

直までやまびこの真似をする。

「春のばかっ」

「春のばか」

そしてこれがいつまでも続くのだった。

1－4　直と綾の関係

車の激しい往来を迎えて、落ちたイチョウの葉が舞い上がる。
ここは都心から離れた小さな市街だけど、綺麗なイチョウ並木がある通り。澄んだ青空とのコントラストは、とてもきれいで絶景だ。

特に直みたいなスケッチや写真好きの風流人は、ここをよく好んでいる。
この場所は空との距離が限りなく近く感じるという。

前を歩く二人はスカートのプリーツをなびかせている。
若干、肩を怒らせて歩いているのは怒りっぽい幼馴染。

二人は何事かを話している。
だが、ここまでは聞こえない。

とりあえず直と綾は、僕に反省を促すために、ほんの少しだけ距離を置いているらしい。これは、二人が結託するときによくやること。
だけど、今は距離が限りなく遠く感じる。

反省といっても、何が原因か。
僕にはわからない。

さっきは思ったことをそのまま言ってしまった。
それがいけないのだろうか。

もっとも、綾に告白する男子を屋上の給水タンクの一角で見ている場面で、僕が役に立ったことなんてあったのだろうか。

もちろん、答えはなし。
そして綾も、そう思っている。

ならば、なぜか。
やはりわからない。
ただ、こういう問題が起こったときの対処法として、同じ荘の住人の美咲さんはこう言っていた。

「なにはともあれ、男はまず謝ること」

そして彼女はこう続ける。

「そうすれば女は許さざるを得なくなるからさ」

僕はこの教訓を思い出し、交差点で信号待ちをしている二人に追いついて、綾に声をかけた。

「綾」

「なによ」

綾はまだ、その不機嫌さを隠さない。
ここまで怒んなくてもいいのでは、と思うが致し方がない。

原因はこっちにある。
とにかく謝ること。

「ごめん」

「……」

「僕が悪かった」

「春」

「正直に言えば、ほんとは何がわからないんだ。でも綾が不機嫌なのは、僕のせいだから」

僕は誠心誠意を込めて言いきる。
すると綾は、苦笑しはじめた。

「そんな言い方ずるい」

「でも、その通りだよ」

「ほんと、春はばかなんだから」

「また、そうやってさ」

僕はおもわず声を上げていた。

「うん。ごめん春」

「いや、こっちこそごめん」

「うん」

「……」

「……」

こうして二人して黙ってしまう。
お互いに顔を伏せ気味にして、次の言葉を待っている。

幼馴染で付き合いも長い。
なのに、最近こういう場面が多すぎる。

「べつにさ」

「ん？」

「私そこまで怒っていたわけじゃないからね」

照れ隠しなのか、その言葉を発した途端、綾はずいぶん先へと行ってしまう。
ばたばたと、あまりお嬢様らしくない走り方で横断歩道を渡り、そのタイミングで音楽が急ピッチに鳴りだす。
そして程なくして信号が赤に変わった。

「春のばーか」

車の往来を挟みつつも、機嫌良さそうに叫ぶ幼馴染。
両手で鞄を持ち、スカートの前を隠すという全力で女の子らしい姿にもかかわらず、べぇと舌を出している。

「直、見てよアレ」

「ん」

「ひどいしぐさだよね」

「うん。でも、春はよく謝った」

「そうかな」

とは言いつつも、僕は直の変わらないように見えて変化のある表情にも満足。

ついでにと思い、直に一つ質問を投げかけた。

「直」

「なに？」

「直は綾に肩入れしてるよね」

「うん」

直が鷹揚に頷く。

「どうして？」

「私、はじまらないストーリを好ましく思っていないから」

「それ、屋上でも聞いたよ」

「うん、言った」

「ということは自分でわかるようにならないといけないってこと？」

「ん」

「ヒントは？」

「ヒント？」

「うん」

「綾には自覚がある」

「自覚？」

「そう。そして春には自覚がないんだ」

「……」

まるで禅門答。

しかし、わからないものはわからない。

ただ事実として、うちの妹は幼馴染に肩入れをしている。

思えば、いつからそうなったのだろう。記憶を探ってみるが、昔からそうだったというわけではない。

たとえば、四年前。

綾の姉の翠さんに、よく街外れの高台へ連れてってもらった頃。

あの頃、僕達は小学生だったけど、直と綾の関係は今ほど親しくはなかった。
活発な綾、おとなしめの直。
そんな感じで、案の定、直は綾を怖がり、今よりも兄らしかった僕は綾にいろいろと文句を言っていた。

そして二年前。
お互いに家庭環境が変わり、家がお隣同士でなくなった頃。

この頃も二人は、そこまで親しかったわけではない。
むしろその頃は、日常の日々に忙殺されて、交流自体が少なくなっていた。

こう考えてみれば、一年前ぐらいのような気がする。
兄思いの妹が、より幼馴染を優先して肩入れするようになったのは。

1―5　直の趣味

綾とは、月極駐車場と都立公園の入口があるいつもの交差点で別れる。

「じゃあね、春、直」

手を振って去っていた綾は、次の曲がり角のところですぐに見えなくなる。そして彼女は、そこから大通りに出てバスに乗る。

公立の中学生なのにバス通学をする綾。
彼女は二年前からずっとこうしている。

彼女の母親が再婚して、家の中で迷子になるような大きい豪邸に住みはじめてからは、この通学が習慣になっている。
話によると、車での送り迎えを断わっているとも聞く。

「春、買い物」

「あ、そうだった」

綾と別れた後、家の方角へ向かおうとする僕に直は言った。
なので、僕達は都立公園の入口へと向かう。

都立公園でショートカットして、スーパーに行くのがいつも通っていく道。ここの都立公園の、自然林を嗜むハイキングコースを利用する。

後、この都立公園は運動施設も数多くあり、今もテニスボールの行き交う音が響いている。

「ところで直」

「ん？」

「今日は何買うの？」

「しらたきとか」

「しらたき？」

「白菜とか」

「白菜」

「それと、ホウレンソウ」

「あ、ホウレンソウか」

それで、今日の夕飯が鍋だと確信した。

ちなみに我が家では鍋が多く、同じ荘の知り合いも二人だけで住む兄妹に気を使ってくれるのかよく鍋を食べにやってくる。

一人は飯のタネ、もう二人は話のタネを持ってきて。

「ということは、美咲さん達がくるんだね」

「ん。やってくる」

「じゃあ狭い部屋だから、少しちらかっているものを片付けないといけないな。みんな気にしないと思うけどさ」
「うん」
「あ、それと今日は、僕に料理を任せて」
そう言うと直は、無表情ながらも恨めしそうな顔をした。
「春」
「そんな顔してもダメだよ」
「挑戦したい」
「それは僕が食べるときだけ」
「……」
やっぱりがっかりしている。
ほんとに、そんな直を見るのはしのびない。
でも、ダメなものはダメだ。
「どうしても？」
「もっと上手になってから」
「うん」
そう、なんでも完璧な妹で家事も上手なんだけど、料理だけはあまり上手くないという不思議な属性がある。

たとえば、お米を研ぐときに洗剤を使ったり、隠し味に致命的な調味料を入れるというわけではないんだけど、直の手にかかればなんとなく味気ない料理ができてしまう。
もちろん原因は不明。

「じゃあ私、いつもみたいに片付けする」

「うん、お願い」

「春が散らかしたのにな」

「ごめん」

こうして今日の夕飯が決まった。
おかげで、俄然買い物にやる気が出てくる。

僕達は都立公園のハイキングゾーンを抜け、道路に出る。放置自転車が置いてある空き地の角を曲がると、最寄のスーパーはすぐそこ。

「あ」

「直？」

「あの、春」

「どうしたの？」

「ネコ」

「ほんとだ」

空き地の方に目を向ける。
すると、たしかに小さなネコがいた。
直が駆け寄っていくと、やけに人懐っこいしぐさで鳴いてくる。

「みゃー」

直が泣き真似をして、気を引こうとする。

「ほら、直行くよ」

「春。ちょっと待って」

「ん？　なんか珍しいことでもあった」

「うん」

「どこ？」

「このまだら」

見ればこのネコは、グレーと黒が混ざったような変わったまだらをしている。
形も珍しく、特徴が多い。

「ちょっと書かせて」

「しょうがないなあ」

「ありがとう」

珍しい何かを見ると、すぐにスケッチをしたくなる直の習慣。
ブレザー徽章付近の小さなポケットから、手持ちサイズのスケッチを取り出し、さらさらとデッサンを開始する。

こうしてデッサンをしているあいだ、手持ちぶさたになってしまう僕。だから直の素早く書かれるネコの絵のずっと見ているが、やはり上手。

とにかく直は、ありのままに描くのが上手い。
写実的、とでもいうのだろうか。
物体の割合とか配分が、とにかく正しい。

「できた」

直がつぶやくと同時に、タイミング良くネコが去っていく。

「どう？」

と、僕に絵の出来を見せてくる。
どうやら、自分でも会心の出来らしい。

無表情ながらも少々誇らしげな感じの直。
僕は、そのままの感想を述べる。

「上手いね」

「ん」

「上手すぎる」

「ありがとう」

やっぱり直には、どんな事柄でも見透かしそうな視線とともに、どんなものでも正確にとらえてしまう瞳がある。

1－6　都築　絵里

スーパーで真っ先に行われていたのはタイムバーゲン。入った瞬間にカランコロンと鐘の音がなり、主婦がお目当ての品物を目指してかけていく。

でも僕達は、それを横目で見やる。
そして、目的の品を忠実にカゴへ放り込んでいく。

「それにしても凄い人だね」

「ん。たしかに」

「ここまで迫力のあるタイムバーゲンなんて初めてみたよ」

「そうだね」

というのも、ここのスーパーは基本的にタイムバーゲンはやっていない。
普段の安さで勝負している店だったからだ。

「春」

「なに？　直」

「お肉」

「え？」

「がとっても安い」

「ほんとだ」

直が指差す先を見て、僕は口をあんぐり開ける。
あの値段は通常の二分の一。つまり半額。

「よし、行ってくる」

「大丈夫？」

「大丈夫。任しといて直。ここで肉をゲットしなかったら男じゃない。だから期待してくれ。家に帰ったら、お腹いっぱい肉の入った鍋を食べよう」

「し、死亡フラグ？」

何やら、あまり良くない物騒な単語。
そんなのが聞こえてきたけど気にしない。

僕は死地に赴くような気持ちで、商品取りの激戦区となっている紛争地帯に向かう。
ところが――、

「す、凄い重圧だ」

人、人、人であふれている精肉売り場の一角。

とても足を踏み込める状態ではなく、僕はただ立ち尽くすしかない。

しかしそんな中、一人の少女が物凄い正確な動きでやすやすとここを突破しているのを見つけた。

そしてその少女は、知り合いの絵里ちゃん。

一つの下の後輩で、一緒にバレーをしている間柄である。

彼女は人懐っこくって、動物に例えるとそれこそネコみたいなキャラクターだ。

「おーい、絵里ちゃん」

「あ、先輩～」

サイドにくくった髪を揺らしながら、絵里ちゃんがかけよってきた。

「久しぶり」

「はい、久しぶりです」

「十日ぶりくらい？」

「そうですね」

「元気だった？」

「はい、元気ですよ。ていうか、私から元気を取ったら何も残らないじゃないですか。あ、ところで先輩は、来週にあるバレーの集ま

りに来ますか？」

きらきらとした瞳。
その瞳で、こっちを見つめてくる。

「ああ、いくよ」

「あ、良かったぁ」

胸の前に手を合わせて喜ぶ絵里ちゃん。
その動作のせいで、カゴを取り落としそうになる。

「ところでさ、絵里ちゃん」

「はい？　どうしました？」

「君、すごいね」

「えっと、なにがですか？」

「あそこに割って入っていけて」

僕は激戦となっている紛争地帯を指差す。

「はっ、そういえば！　はずかしいです」

「って、そんな身をよじらせてまで、はずかしいがらなくてもいいってば。僕は純粋に凄いと思っているんだから」

そう言うと、絵里ちゃんは頬をほころばせてくれた。

「先輩。じつは、タイムバーゲンは私の主戦場なんですよ」

「動きを見てればわかるよ」

「身長が低い私にとって有利ですし、バレーボールで培ったサイドステップの動きが行きますので。はずかしながら、実生活に活用しています」

「ということはさ」

「はい？」

「僕でもここで戦えるかな」

「はい、大丈夫です。じゃあ戦いましょう。では行きましょう」

そう言い切る絵里ちゃんは、素早い動作で僕の手を引く。僕はその力に引っ張られたまんま、彼女についていく。

そして、もう一度この場で戦うことを決心した。

「掛け声が大事ですよ」

「てやぁぁぁぁぁー」

「広い視野を持って」

「はい」

「ここでステップ」

「はい、師匠」

こうして絵里ちゃんの先導により、僕は肉をゲットすると言う形で戦いに終止符。

この戦いには一種の達成感みたいのがあって、癖になりそうだった。

「やりましたね、先輩」

「やったよ、絵里ちゃん。てか、絵里ちゃん。さらに肉買うの？」

「そんなぁー見ないでください」

いやいやをする絵里ちゃん。

「たしか都築家は大家族だよね。何人家族だっけ？」

「七人ですよ。弟が三人、妹が二人、後、父がいます。だから大事なごあいさつにくるときは、みんなの注目の的ですね」

「注目の的って……いや、その前に大事なごあいさつって何さ」

「いやですね、大事なごあいさつは大事なごあいさつです。もちろん私も、直先輩にごあいさつしますよ」

そう言い切る絵里ちゃんの瞳。

奥に怪しげが光が潜んでいる。

どうやら、僕をからかって遊んでいるようだ。

「ていうか、妹キャラのくせにね。そんなこと言うんだ」

「そうですか？　じゃあわっかりましたぁ～。私、先輩の前だけでは、純真な妹キャラでいきまーす。なんて」

「じゃあ、僕は頼りになる兄貴キャラでいこうかな。実生活ではとんと頼りないからね」

「そんなことないですよ。先輩は頼りになりますし、私は頼りにしています」

「えっ？」

「だから、頼りにしていますってば」

と言って、絵里ちゃんは僕の背中をぽーんと軽く叩いた。

1－7　上杉　美咲

買ってきた荷物を持って、家へと繋がる坂をゆっくりと下っていく。

帰りは都立公園を通らずに、この坂を利用するのが定番。

昔、玉葱やレモンを転がしたこともある意地の悪い坂だけど、帰りはどうしてもここを通らないといけない気分になる。

「荷物重い？」

「重いけど大丈夫」

「そう」

「それにしても直、いっぱい買ったね」

「春が来ないから」

「そっか」

あの後、絵里ちゃんと僕の奮闘を遠目から見守っていた直が、すべての材料をカゴの中に入れ終えて待っていた。

直は律儀に重いカゴを持ちながら、精肉売り場の少し手前でこっちを見ていた。

「あのさ直」

「何？」

「一つ聞いていい？」

「うん」

直の返事を受けて、僕は言う。

「僕が直を忘れて会話に興じていたのがいけないんだけど、どうして待ってることを言ってくれなかったの？」

「二人が楽しそうだったから」

「それで？」

「それを見守っていたかった」

「どうして？」

「なんとなく」

一応答えは予想できたが、その通り。

しかし直は、ときどき僕には思いつきもしないようなことをする。

「まあ、そう思うなら直の好きなようにすればいいか」

「ん」

坂を下り終え、僕と直が住んでいる東風荘はもうすぐ。
東風荘はけっして贅沢な建物ではなく、築三十二年の鉄筋コンクリート。部屋の数は一号室から八号室。トイレは共同で、風呂は完備していない。

なので住人の多くは、近くの銭湯を利用している。
そんなボロアパートだ。

「ただいま」

「ただいま」

三号室。
表札の坂本をいつもどおりに確認し、僕達は部屋に入る。

買い物で買ってきた荷物を一旦床に置き、部屋のカーテンを開けようとしたその矢先。
ピンポンと古臭いチャイムがなった。

「二人が帰ってくるの、待ってたよ」

まだ玄関を開けてないのに声が聞こえてくる。

「どんだけ暇なんですか」

「そう、油断すると大学生はすぐ暇になるのね」

やはり、声の主は美咲さん。
通名は、上杉美咲。

彼女は隣の二号室の住人で、世話になっているんだかわからないぐらいこの部屋に入り浸る人である。
まあ、総じて交流が深い人。

「で、開けて」

「はいはい」

「お、その声は春坊だな」

「今さらですか」

「ていうか、直っちに開けてほしい」

「わがまま言わないでください」

そう言うとともに、僕は玄関のドアを開ける。
するとその瞬間、三和土の上にどさーっと大きな段ボールを下ろす美咲さん。
やけに凛々しい表情で、かいてもいない汗をぬぐうふりをする。

「はい、これじゃがいも」

「って、なんなんですかこの量は」

「あげるよ」

「じゃがいも？」

直も何事かとこっちにやってくる。
それだけで、この狭い玄関は許容オーバーになっていく。

「ん？　メークインはだめなのかい？」

「いや、そういう問題じゃなくってですね。嬉しいですけど、量が半端ないというか多すぎるというか」

「いいじゃん」

「よくないですよ」

「ほら、中にはじゃがいも以外も入っているぞ」

がさごそと段ボールを開ける美咲さん。
どんどんと中の物を取り出していく。

「お、こんなのが入っていたとは」

「はぁ、ここに持ってくる前に確認してください」

ため息をつきつつも彼女を見やる。
今日も相変わらず、美咲さんは美咲さん。

これで彼氏持ちなのはよく見れば美人なのだからだろう。しかし、その素材を生かさないだけではなく、持って生まれたずぼら気質が魅力を殺している。
髪もうねるように伸び放題。もっとも、本人は無造作でボリューミなヘアスタイルと公言している。

「春坊」

「なんですか」

「今、なんか失礼なこと考えたんじゃないの」

「い、いえ」

「それじゃあエロいことか」

つん、つんと鼻を突っついてくる。

そんな美咲さんは、やはりうっとおしい。

「そうそう、この前春坊が読みたいと言ってたアレどうなった？」

「なんですか？　それ」

「『親愛なる義妹』というタイトルの官能小説」

「って、何を言ってんですか。違うでしょ。あれ、美咲さんが勝手に置いてったやつじゃないですか」

美咲さん相手には、普段温厚な僕もつっこみを入れてしまう。

「い・も・う・と」

「だからなんなんですか。だいたい『親愛なる義妹』なんてふざけたタイトルで――じゃなくて！　とにかく、こっちはほとほと困っていたんですからね」

「そんなー、ほんとは熟読しているんじゃないの？」

「なわけないでしょ」

「またまたぁー、ムキになるところ怪しいなあ」

「ムキになっていません」

「春」

直までかわいそうな目で見つめてくる。

「何さ、直」

「ほどほどにしないと悪影響だからね」

「違うーっ」

いくら直の方がしっかりしているからって、無表情でそんなことを言われたらたまったもんじゃない。

こっちのプライドがずたずたになる。

「まあ、うまく春坊も直っちも上手く付き合いなさいな」

「ん」

「だからそんなふうにまとめないで」

僕は必死になって主張するのだった。

1－8　鍋パーティー

ひと騒動あった後、美咲さんを家の中に招き入れる。
そして僕達は、互いにやることを開始する。

僕は料理。直は部屋の片づけ。
予定では、美咲さん以外にあと二人やってくる。

一人は、美咲さんの友達の竹内由貴さん。
あっさりとした色白の美人であり、茶髪のセミロングが良く似合う人。この人はいたってノーマルな常識人なので、なぜ美咲さんと友達なのか謎なくらい。
僕との関係は、彼女が主催するバレーボールの集まりに参加させてもらっていること。

そしてもう一人は、六号室に住む野々垣鳥子さん。
彼女は、言動が不思議な美咲さんと違って、行動が不思議な人。
趣味は手品、仕事はウィリアム・テルという自らが立ち上げたブランド名で林檎の剥製を作っている。

「直、今何時？」

「六時二十分」

「美咲さん、二人がくるのは？」

「半くらいかな」

どうやら二人は、あと十分ばかりでここにくるらしい。
もちろん鍋の支度の方は順調に進んでいる。

だから、問題ない。
獲得してきた戦利品と、イレギュラーに手に入れた贈呈品もふんだんに使った。おかげでいつもより具たくさんの鍋になりそうだ。

「美咲」

「ん？　どうした直っち」

すでにチューハイの缶を何本も開けている美咲さんに、直は問いかける。

「なんで美咲はいつも来てくれる？」

「え？　私がここに来る理由？」

「ん」

「それはあたしの部屋は足の踏み場もないからな」

「へぇ」

「まあ、あたし片付けられない女だからさ」

「どうせそんな理由だと思いましたよ」

僕も鍋をかき回しながら会話に参戦する。
鍋の方は細かなアクを取るだけで、ほぼ完成。
お米の方もすでに焚いてあって、食べたい人が各自で盛り付けるだけだ。

「でもさ、春坊」

美咲さんが缶を掲げて続ける。

「一番は春坊と直っちの空気が居心地いい、ってことなんだよね。これはなんでかわからないんだけどさ。なんとなく、入り浸りたくなる何かが出てるんだよ」

「そうなの？」

「そうなんだよ～。直っち」

嬉しそうに言う美咲さんは、直をがばっと抱きしめる。
直はされるがままだ。

「それにしても直っちは、おかしい子よね」

「えっ？」

「家事は完璧なのに、料理がてんでダメ。料理だけで言えば、あたしとどっこいどっこいじゃないの？」

「ん」

直は頷くが、こっちは納得がいかない。

「美咲さん、それはないですよ」

「そうかな」

「直だって日々上達していますし。それに美咲さんが料理をしているところを見たことないんですが」

「そりゃしないからね」

「そうですか」

「でもそれなりにやれるさ」

「それ、まんまできない人の言い訳ですね」

「へいへい。でもそんな細かいと、春坊は女の子にもてないぞ。いや、もてそうなんだけど、そのチャンスをいちいちをふいにしそうだ」

テレビのチャンネルを変えながら、そう言う美咲さん。

「お、ここの場所、うちの街じゃない？」

「あ、ほんとだ」

と、僕もおもわず声を上げる。

美咲さんはそこでチャンネルを止め、くずしていた姿勢を正す。

やっていたのはありきたりなニュース。

しかし内容は、夜間に出没して女の子の髪を切る話。
すでに被害は、この街で十五人近く出ているという。

「まったく、あたしの髪ならいくらでもあげるのにね。こんもりあるからさ。まあ、そういう犯人は直っちみたいなストレートに執着するのかもしれないけど」

「やめてくださいよ」

「おっとっとごめんごめん」

美咲さんが気を取り直して、チャンネルを変えていく。

「で、春坊、料理は終わったの？」

「あ、さっき終わりましたよ」

ついでとばかりに、鍋をテーブルの上に持って行く。
さらには、美咲さんの前で鍋のふたを開いて見せる。

「おおー」

いつものように驚く美咲さん。
明らかにテンションが上がっているのを見て、僕はほくそ笑む。

「よし、じゃあ先に乾杯をしようじゃないか。春坊、さあオマエも飲め」

で、いつもこのパターン。

「またそれですか」

「悪いか」

僕は呆れて美咲さんを見やる。

「じゃあ、直っちか」

直は黙って首を振り、艶やかな黒髪が左右に揺れる。

「そんなー。いつになったらあたしと飲んでくれるんだい？」

「あのですね、美咲さん。何度も言いますけど、僕達未成年なんですからね。僕は十五歳で、直は十四歳。直なんか四捨五入すれば十歳ですよ」

「春、それは変」

たしかに僕も変だと思った。

「まあ、ともかく、もう少しで二人がやってきますから。それまで我慢してくださいね」

そしてそう言ったと同時に、家のチャイムが鳴る。

これ幸いだ。

時間的に、竹内さんと鳥子さんだろう。

直が立ち上がり、玄関の方へかけていく。

1―9　野々垣　鳥子

宴もたけなわ。
というには少しばかりまだ早い。

せめて、鳥子さんの新作手品が終わってからだろう。
唇に薄いルージュを引く妖艶な鳥子さんは、特徴あるソンブレロという帽子を左手に、自作であろう林檎の剥製を右手に持ちこう言った。

「さて。本日はお日柄もよく、と言ってももう夜になってしまったのだけど、とにかく私のためにお集まりくださったみなさんこんばんは」

「こんばんは」

従順にあいさつを返す僕達。

「とは言いつつも、べつにこの手品のために集まったわけではないのだと思うわけですが、そんな雰囲気を醸し出してくれるみなさんに感謝しつつ、ほんの少し驚きを提供してあげましょう」

「よっ、鳥子」

もうぐたぐたに酔っぱらっている美咲さん。
彼女が、いの一番に歓声を上げる。

鳥子さんはそれに右手を上げて応え、飄々とした表情をほころばせていく。
そして、そのまま林檎を持つ右手を掲げて言う。

「それではみなさん、私の右手には林檎がありますね」

林檎をこんこんと額で叩く鳥子さん。

「これは本物ではなく置物の林檎なんですが、何か物足りないと思いませんか。と言うよりかは、何かがあってぴったしくる感覚というのがありますでしょう」

なんだろうか？
などと考えるまでもない。
ここにいる誰もが、それをわかっている。

「もちろん、みなさんなら言わなくてもわかっていると思います。ウイリアム・テルというブランドを立ち上げている私にとって、矢の刺さっていない林檎というのはその価値が半減してしまうに等しい代物ってことを。ところで竹内さん」

「はい？」

「あなたの膝には何かありませんか？」

竹内さんが自分の膝を見る。

「あれ、なぜこんなところに」

「ありますね」

「矢があるの？」

来るときに軽い打ち合わせをしたのだろう。

しかし、竹内さんのあまりの大根役者っぷりに笑いがこみあげてくる。

それくらい下手だった。

「竹内さん」

「はい」

「それを私に渡してください」

「どうぞ」

竹内さんが、慎重な動作で矢を渡す。

「ところでみなさん、この矢には一つの使命があるのを理解してください。それは私の機嫌を損ねないために、この林檎を貫通していなくてはいけないってことです」

「えー鳥子」

「なんでしょう」

「その林檎って、置物だからムリなんじゃ……」

美咲さんは納得できないとばかりに、声を上げる。

「うん、絶対にムリだよ」

「それはごもっとも。しかし、この種も仕掛けもないこのソンブレロの中に林檎を入れると」

「えーマジで！　もしかして！」

美咲さんがさらに声を荒げるのも無理はない。
なぜなら、今回の手品は大掛かりだ。

いつもやるカードマジックとは規模が違う。
もう誰もが予想はついていると思うのだけど、きっとこれはソンブレロの中に入れれば、矢が刺さっているという構図。

しかし、本当にそんなことがありえるのだろうか。
そして手順は、予想通りに進んでいく。

「――それでは林檎の次に、矢を入れましょう」

だがそこで、僕は重大な欠陥に気がついた。

「鳥子さん」

「はい」

「その矢は帽子の中に入らないよね」

僕に指摘されても、顔色一つ変えない鳥子さん。
むしろそれどころか、よく気づいてくれたとばかりに見つめてくる。

「心配いらないですよ。ついでと言ってはなんですが、この帽子には復元作用がそなわっているのです」

「復元作用？」

オウム返しをする美咲さん。
その言葉の意味がわかっていないのか不思議な顔をする。

「で、なんだい？」

うんうんと周りもうなずく。
結局、みんなの要望もあって、鳥子さんは説明をしはじめる。

「復元作用とは、簡単に言うと壊れたものを元通りにすることですよ」

「へぇ、てかホントにそれ手品か」

「はい、手品ですよ」

笑顔を絶やさない鳥子さんが、余裕の表情で頷いた。

「それでせっかくですので坂本くん、この矢を細かく折ってください。一本なので簡単に折れると思いますが」

僕に矢を渡す鳥子さん。

僕は鳥子さんに言われたとおり、矢を細かく折っていく。

「はい」

「ありがとうございます」

鳥子さんは、折れた矢を林檎が入っているソンブレロの中に入れ、黒い柄のハンカチをかぶせる。
そしてそのハンカチに手をあてがい、念を唱える。
これらの動きを、なんの不自然のない様子でこなす。

手品にタネが仕込まれているとしたら、僕達には見破ることのできない完璧な動作。
なにせ、タネがあるかどうかすら疑わしくなるくらいだ。

「さて、みなさん」

「はい」

「物事を為すには何事も時間というのが必要ですね。目を見開いてこの帽子を見つめるのはいいですが、少しばかり時間をください」

そう言いつつも、鳥子さんの表情は変わらない。
好奇心でいっぱいの僕達は、いまかいまかとその帽子を見つめる。

「はい、そろそろ変化した頃合いでしょう。それでは全員を代表して竹内さん、ハンカチを取って見てください」

指名された竹内さんがさっと素早くハンカチを取り、僕達はソンブレロの中を見れば――、

「えっ？」

「おーすげぇ」

もはや、感嘆の声しか上げられない。

なんなんだこれは。

「すごいですね」

「すごい」

直も声を上げている。

「すごい。すごい。これ、すごいな」

美咲さんにいたっては、すごいを連呼しちゃっている。

「どうやら成功したみたいですね」

成功もなにも、大成功に違いない。

なぜなら、ソンブレロに入っていた林檎には、さきほど折ったであろう矢が刺さっていた。

もちろん、帽子には何の欠陥もない。

少なくとも、確認できる範囲での違和感は何もない。

「それで、この手品は使えそうですか？」

「使えるに決まっているじゃないか」

おもわずみんなつっこんでいた。

１－１０　竹内　由貴

すべての後片付けを終える。
そして、今日の一日をまた思い返す。

幼馴染の綾がまた告白されて、屋上の給水タンクでその様子を見守った。
綾の機嫌を損ね、イチョウ並木で素直に謝って許しを得た。
買い物をしているとき、久しぶりに会った絵里ちゃんと共闘した。
夜は荘の知り合いの美咲さん達と鍋パーティをした。

「……」

感慨やセンチメンタルに浸るわけではない。
でも、一日を思い返すことはよく行う。
なぜだかわからないんだけど、自分の中でそういう習慣ができあがっている。

「――春、春」

気づけば、直に声をかけられていた。
直の顔が物凄く近くにある。

「あ、直」

「ん」

「それで？」

「春は寝てたの？」

きっと給水タンクのことを思い出したのだろう。
僕がまた寝ていると思ったらしい。

「いや、ぼっとしていたんだ」

「大丈夫？」

すべてを見通しそうな切れ長の瞳。
その瞳がこっちを見つめてくる。
照れくさくなった僕は、おもわず視線をそらした。

「うん、大丈夫」

「ん、よかった」

昼と同じように、両手を握ろうとした直。
しかし僕が、手で制した。
携帯電話がなっていたからだ。

「ごめん、直。ちょっと電話に出るね」

「ん」

僕は充電してあるコンセント付近にまで行って、電話を取る。
そして直に気を使いつつも、少し距離を開けた。

「もしもし」

『あ、もしもし』

急いで電話に出たせいで相手がわからなかったが、声を聞いてすぐわかる。

さきほどまで家にいた竹内さんだ。

竹内さんの声は風貌そのものといった感じで、あっさりとして聞きとりやすい。おもわず聞き惚れてしまうくらいである。

『春くん。今大丈夫？』

「あ、平気です」

『じゃあ、ちょっと話ししない？』

「なんでしょう。忘れ物ですか？」

『それなら、春くん家に戻っているよ』

「そうですね」

『まあ、忘れ物みたいなもんなんだけどね』

竹内さんがおちゃらけた調子で言った。

それでも声に美しさを持っている人だな、と僕は思う。

「竹内さん、将来オペレータになったらどうですか？」

『えっ？　何？』

「いえ、なんでもないです。ところで何用でしょうか？」

『春くん。用がなければさ、私はかけてはいけないのかな』

「それは竹内さんのキャラじゃないですよ」

『そうだね。若干慣れないことをしたと私も思う。まあ、気にしないでよ』

うふふと笑う竹内さん。

『で、春くん。私が聞きたかったことなんだけどさ』

「はい」

『来週あるバレーボールの集まりこれる？　来週はどうも人が集まらないみたいで困っているんだよね』

言葉通り困った調子の竹内さん。

ぜひとも僕に参加してほしいと述べている。

対して僕は、今日絵里ちゃんにも言ったように、来週の集まりには参加する予定で間違いない。

なので、参加する旨をつげることにする。

「行けますよ、来週」

『ほんと？　ありがとう』

「で、結局どれくらい人集まりそうなんですか？」

『それがなんだけど、あいにくタイミング悪くてか六人ぎりぎりくらい。もちろんこれは私や絵里ちゃん、そして直くんも入れてなんだけど』

「そうなんですか」

六人か。

規定人数ぎりぎりでほんとに少ない。

『それで相手のこともあるし、どうしても最低六人集めなくてはいけないんだ。ていうか、こんなにタイミングが悪いこと初めてでびっくりだよ』

たしかに竹内さんの言うことよくもわかる。

なぜなら竹内さんが主催する『ジモティーズ』というちょっと野暮ったいネーミングのバレーボール会は、下は中学生から上は大学生までの男女問わず、毎回十人以上は集まっているからだ。

なので、今回はよほど珍しい事態である。

「ところでですね、竹内さん」

『ん？　どうしたの？』

「美咲さんは来るんですか？」

『あの子はちょっとムリだって。彼氏とデート。でもそろそろ心配

なんだ。美咲が別れる予兆ってのが見え始めたから』

「ということは、僕、またからまれるんですね」

『あはは、そうだね』

「いやだなあ」

『まあ、がんばって』

心もとない応援も、竹内さんに声にかかれば俄然気分が良くなるから不思議。

『そうそう、予兆で思い出したけどね』

「予兆？」

『近いうち大きな地震がくるらしいよ』

「えっ、それはなんですか？」

『あ、これは鳥子さんが別れ際に言っていたんだけど、彼女、ずっと耳鳴りがするらしくて。だから大きな地震がやってくる頃合いなんだってさ』

「へぇ。鳥子さん、予知までできるんですか」

『そうだよね。謎めいて素敵なんだけど、得体の知れない存在だよ鳥子さんは』

1－11　直の心配

地震を予知するあいかわらずな鳥子さん。
その存在に驚き、それから少し世間話をした後、竹内さんとの電話を切る。

「地震かぁ」

地震は、しばらくお目にかかっていない。
けど僕の記憶では、直が極端に苦手だった。そういえば、怖いもの知らずの美咲さんも苦手を公言していた気がする。

にしても鳥子さんは、手品だけでなく予知までしてしまうとは驚きだ。
なので、今までにそういう場面があっただろうかと思い返してみる。

するといくつか覚えがあった。
鳥子さんは、経済の変化、外国で起こる紛争やデモ、運気の流れなどを予言していた気がする。

「と、鳥子さん……」

やはり、彼女は間違いなく凄い人。
なぜこの荘にいるのかがわからなくなるくらいだ。

もうこうなったら、林檎の置物を水晶変わりにして、占い師でも始めた方がいいんではないだろうか。

そんなふうに物思いにふけっていたところ、直に声をかけられた。

「春、電話終わった？」

「あ、うん」

「誰？　綾？」

綾であってほしいとでもいうように、直が聞いてくる。

「違う？」

「うん、違う。竹内さんだった。『ジモティーズ』の集まりのことを言い忘れていたらしくて、その連絡」

「そうなんだ」

「そう。来週の集まりにはさ、規定人数ぎりぎりの六人集まれるかどうかわからなくて困っているらしいんだ。それで、たまには直も行く？」

運動があまり得意ではない直も、何度か『ジモティーズ』には参加している。もっとも僕だってそうなのだが、身体を動かすのは好きかどうかの違いはある。

「で、どうする？」

「ん。当日までに考えとく」

直がそう言い、僕は頷いた。
そして就寝までの間、ゆっくりとした時間が流れる。

テレビのニュースではまた地元の事件のことをやっていて、髪切りにあった女の子たちの被害状況を詳しく解析している。

ニュースによると、女の子達は通りすがりに刃物を突き付けられて、髪を切られたのこと。
手口は皆一緒で、夜道の一人歩きには気をつけてくださいとの喚起がなされていた。

「春」

「なに？」

「春も気をつけて」

そう言われて、僕はどきっとする。

「どうして？」

「春と私は似ている」

「うん」

「だから、女の子と間違う人がいる」

そう、直と僕はよく似ている。

わりと僕の髪が長めなのもあり、昔から女の子に間違えられることが多かった。

「でも、今は大丈夫だよ。間違えられることも少なくなったし」

「そう？」

「そうだよ。最近はそんなことないでしょ。それに髪質を見れば女の子だと思うこともないんじゃないかな」

ここが矜持だとばかりに、一生懸命抗議する。

「ん、そうだね」

おかげでか、直も納得したように頷く。

「むしろ直の方こそ気をつけてよね。ふらふらとスケッチしていてそのまま被害にあった、なんてことになったら大変だしさ。それに美咲さんじゃないけど、直が狙われる可能性はかなりあるんだよ。直の髪はきれいだから」

「えっ」

無表情で驚く直。

「いや、ほんとのことだからさ」

「ん。褒めてくれてありがとう」

「そうじゃないんだってば」

「とにかく気をつけようね」

「そうだね。って違うんだけどなぁ」

1－12　直の甘え

いろいろあった一日を終え、就寝の時が近づく。
今、僕達二人は一緒に布団を敷き終えたところ。

直は、もうすでにパジャマへと着替えはじめている。
直はこの年になっても、僕の前で着替えることに無頓着である。
流石に下着類の着替えはしないけど、服の場合は平気で着替えてくる。

なので今も、パンツとブラの格好。
これは困ったものだ。
もう少し羞恥心を持ってほしい。

そして布団の距離も、この狭い部屋のせいなこともあってか、それなりに近い。感覚としては一緒に寝ているようだ。

着替えを終え、僕と直はうつぶせになって寝ころぶ。
これも寝る前の軽い決まりごとみたいなもの。
こうして寝るまでの間、いくつか会話を交わす。

「そうそう、直」

「ん？」

「近いうち大きな地震が起こりそうなんだって」

「えっ」

「これ鳥子さんが言っていたんだけどさ、彼女手品だけではなく予知もできるのかと――あれ、直？」

そのきれいな足でシーツのしわを伸ばしていたはずの直が、見れば固まっていた。

「地震怖い」

「直、そんなに地震苦手だったっけ？」

「うん苦手」

たしかにこの東風荘はぼろくて心配だ。

へたすれば全壊すらあり得る。

しかし、もしその可能性があれば、鳥子さんがちゃんと伝えてくれるのだろう。

だから、楽観的に考えてしまって問題ない。

「直、きっと大丈夫だよ」

「ほんと？」

「うん。もし東風荘が危険だったら、鳥子さんがみんなに注意してくれるから」

「そっか」

直は落ち着いたのか、ほっと息を吐く。

「ていうか、不安がらせてごめん」

「ん」

もしかしたら余計なことを言ってしまったのではないかと反省する。でも、いきなり地震が来てもあれだしな、と思い悩む。

そしてそんなことで悩んでいると、直にそっと手を握られた。

「春」

「どうしたの？」

「五センチだけ近くによっていい？」

直の遠慮したような声。

「えっ、いいけど」

僕がそう言葉をかける。

すると、直はいそいそと布団を近づけてくる。

まるできっかり定規で図っているかのような慎重さにあふれた動きだ。

「あの、もう五センチいい？」

「うん」

「もう五センチ」

「うん、いいけどさ。一気に寄せていけばいいんじゃない？」

「ううん。少しずつ寄せていった方が幸せ」

直が普通の人には幸せには見えなさそうな表情でそう言った。

「そうなんだ」

「ん」

「僕にはわからないけどなぁ」

それから直は何度も五センチずつ寄せていき、結局布団はくっついた。

そして完璧にくっついたところで電気を消す。

「ねぇ、春」

「なに？」

「たまにはね」

「うん」

「お兄ちゃんって呼んでもいい」

「えっ」

僕が驚いたせいか、直が小動物みたいにびくっと震えた。
そして直のすべてを見透かしそうな瞳が、一瞬だけゆらいだ。

「やっぱりいい」

「いいのに」

「いいって」

直はぷいと横を向いて、布団のはしまで行ってしまう。
それでは布団をくっつけた意味がないじゃん、と僕は心の中で思うに留まった。

1―13　朝の風景

直の朝はとにかく早い。
まだ僕が寝ているうちから起きているのは確実で、いつも朝食の準備をしているし、僕が寝坊しないように起きる時間を過ぎているときは速やかに起こしてくれる。
実際、僕はそんな直に甘え切っている。

「春、春」

直が、僕のことを揺り動かす。

「……あと十分」

「だめ」

「お願い」

「しょうがないな」

「やったぁ」

「じゃあ、後十分だけ」

そう言って、直はキッチンの方に戻っていく。
キッチンからは、朝食の定番である目玉焼きのいいにおい。

直の場合、においは良くても、味が落ちるという不思議な料理の腕を持っている。だけど直の作ってくれた料理なので、こんなに嬉しいことはない。
今日も残さず食べようと、いるかどうかもわからない神様に誓う。

「春、十分たった」

「ほんとに？」

どうやら、いつのまにか時間になっていたらしい。

「ん。だから起きて」

「うん、わかった」

直をこれ以上困らせてはいけないと思い、僕はむりやり体を起こす。

「おはよ」

「うん、おはよう」

制服にエプロン姿で直が、窓から入る斜光とあいまってまぶしく見える。
今日もその無表情さは変わりがなくて安心する。

「顔洗ってくるね」

「ん」

僕は一度ノビをしてから、洗面所へ向かう。
洗面所には直が用意してくれたのか、新しいタオルが置いてある。
僕は早速、そのタオルを使って顔を洗う。
ついでに歯も磨きながらつぶやく。

「……地震こなかったなぁ」

でも、鳥子さんの予知は期間を示していなかったから、きっとこれから地震が起こるに違いない。
そして、これから地震が起きるまでの間、毎日布団をくっつけて寝るのも間違いない。

しかし、昨日の夜の直はなんだったんだろうか。
お兄ちゃんと呼んでいい、なんて言っていた。

「春」

向こうから直の呼ぶ声が聞こえて、僕は思考を中断させる。

「ごはん、食べないと」

「うん、わかった」

呼ばれた僕は、部屋の真ん中に置いた小さなテーブルへと向かう。
もちろんテーブルには、直が作った朝ご飯が並べられている。

さきほどいいにおいがした目玉焼きを筆頭に、こんがり焼けた食パンとポテトを中心としたサラダがある。

「さあ、食べよ」

すでに座っている直は、僕にも座るように促す。

「ちょっと待って。着替えてからにするよ」

「ん、わかった」

僕は急いで着替え、そして席に座る。

「じゃあ、いい？」

「うん。ＯＫ」

直が両手を揃えながら合図をし、僕もそれに応えた。

「いただきます」

「いただきます」

まずは目玉焼き。

メインからである。

「おいしい？」

無表情ながらも懸命に聞いてくる直。

これはいつものことだ。

「おいしいよ」

「ほんとに？」

「うん、おいしい」

「春、ほんとのこと言って」

「ごめん。おいしいんだけど、やっぱり味気ない気がするんだ。なんだか」

「そう」

表情には出ないけど、やっぱり残念そうにしている直。そして、このやり取りも残念ながらいつものこと。

やがて、食パンもサラダも食べ終った。

「ごちそうさま」

「ごちそうさま」

二人一緒に挨拶をして、後片付け。

「春、今日のお弁当」

「うん」

お揃いのトートバックを渡される。

「ありがとう」

お弁当は一日交代で互いに作っている。
直は朝に強いので朝作り、僕は朝に弱いので夜作り。

「なんだかいつもより軽いね」

「ん」

「どうして？」

「開けたらわかるよ」

1－14　小平　真由

結局、僕の寝坊のせいで、少し急ぎ足で学校に向かうこととなる。

「直、ごめん」

「ん、いい」

僕が謝ると、直は気にしないでというような無表情。
いつも通りの表情だと思いほっとする。

「春、今日もいい天気」

「そうだね」

空を仰ぎみると、雲ひとつない快晴。
秋の空は、直がスケッチしたくなるぐらいに晴れ渡っている。

おもわずずっと見ていたくなるような空だったが、早く学校に行かなくてはならないと思い顔を戻す。

が、その瞬間。

交差点に差し掛かっていたせいか、誰かにぶつかってしまった。

しかも、相手に乗ってしまっている。

「さ、坂本」

「小平さん」

ぶつかった相手は小平真由。

彼女は綾の親友だ。

なのに、僕とは相性の悪い女の子で、誤解されている面が多々あったりする。

「そうやってぼーっとしてるから」

「ごめん」

「謝ればいいってもんじゃない」

「そうだね」

そう返事すると、チョップが降ってきた。

「いたっ」

さすが空手を習っているだけあり、女の子にしてはダメージの残るチョップをする。これがスキンシップだとしたら、たまったもんじゃない。

「いたっ、じゃないって」

腕を組みながら小平さん。

ショートカットの髪が風になびく。

「まあ私も急いでいて走っていたんだから、半分くらいは悪いんだけどさ。でも、空見てるのは前方不注意すぎ」

と、小平さんは言う。

僕が何を言おうか考えていると、直が口を開いた。

「真由」

「あ、直。おはよ」

「ん、おはよ」

あいさつをする二人。

「で、どうしたの？」

「半分は私が悪いの」

「えっ、何が？」

「春のこと」

直が僕をかばおうとしている。

「なんで？」

「私がいい天気って言ったから」

「そうなの？」

「そう」

「でもね、直。ぼけーっと空見てぼんやりと歩いているのはないと思うわけよ。そう思わない？」

「そうかな？」

「そうだよ。こんな忙しいときに、あっ、そうだ。遅刻する」

「ほんとだ」

二人のやり取りをぼんやりと眺めていたが、たまらずに声を出していた。

「ほんとだ、じゃないって」

「でも、ほんとなんだけど、ね、直」

「ん」

直がゆっくりとかぶりを振り、すべてを見通してしまいそうな一重の奥ゆかしい瞳でこっちを見つめてくる。

「もう、坂本兄妹のんびりしすぎ。この脱力系兄妹」

「そんなことないよ」

「ん」

「だぁから、そんなこと言ってないで」

腕時計を見て、小平さんは直の手をひっぱる。

「さあ、急ぐよ」

「あ、真由」

直が声をあげた。

でも、小平さんは直をひっぱることを止めない。

瞬く間に、僕と二人とのあいだで距離ができる。

「ほら、坂本も早く」

1－15　約束（1）

毒にも薬にもならない数学の授業中。
四時間目で、みんな疲れが見えはじめている。
江藤、小倉、神楽と順番に当てられていく中、まだ順番が来ない僕は、隠れてメールを交わしていた。

『先輩、先輩。せっかくだから来週の土曜日にある《ジモティーズ》の集まり一緒に行きませんか？』

「方向が違うよ」

『それでも先輩、一緒に行きましょう』

「いや、いいって」

『そんなぁ。あっさりと断らないでください』

「そんなつもりじゃなかったけど」

『じゃあ、いいじゃないですか。先輩は私のことが嫌いだったりします？』

「そんなことないよ」

『じゃあ、先輩は私のことが大好きなんですね』

「そんなこともないよ」

『うぅ～、なんか先輩、ひどいです。そこはそうだよ、って言うところじゃないですか。ときに先輩って、私の好意を柳のようにあっさり受け流しますよね』

「そうかな」

『そうですよ。私なんか、こうやって先輩とメールできるだけでうれぴみんなのに』

「うれぴみん？」

『あ、それはうれしい時にでるドーパミンのことなんですよ』

以上がこれまで続いたメール。
これを一つ後輩の絵里ちゃんと交わし、今に至っている。

次にどんな返事をしようか。
あるいは、話の流れからしてもう返事をしなくていいのか。
などと考えながら、数学の教科書をぼんやりと見ている。

問題を解く順番は、葛西、木内、近藤と当たっていき、やっぱり返事を止めようかと考えていたところでメールがやってきた。
僕は自分に当たる問題をチェックしながら、そのメールを開く。

『先輩。今返信をしようかな、と思ってやっぱり止めましたね』

どうやらお見通しのようだ。
彼女の書き出しはこんな感じではじまり、その後には長い文章が書かれている。

『それで先輩、結局、バレーの件はどうなりました？　やっぱり一緒に行かないんでしょうか？　一緒に行けないのならそれでもいいんですよ。でも、それならお願いを聞いてくれますね。代わりにデートとかどうですか？』

デート。
その言葉にびっくりして、携帯を閉じてしまった。
しかも、その音が大きく鳴り響く。

「どうした、坂本くん」

「あ、すいません。なんでもないです」

慌てて先生に謝る。

「ならいいが」

「はい」

「けど、授業中に大きな音を鳴らすのはよくないぞ」

「はい、すいません」

「それと次は、きみが問題を解く順番だからな」

「はい、わかりました」

そうして、先生が指定の場所に戻っていく。
先生が去った後、僕はおもわずつぶやいてしまう。

「デートか……」

絵里ちゃんの好意は嬉しい。
けど、美咲先輩のせいで、その単語には拒否反応が生まれていた。

１－１６　お弁当（１）

数学の授業が終わって、昼休み。
昼休みを迎えると同時に、急いで教室を出ていく人がいる。
それは弁当を持参していない人が購買のパンを買うためであり、人気の銘柄を獲得するための熾烈な競争のはじまりでもある。
そう、この近辺の中学校では珍しく給食がない。
なので、弁当と購買ですませている。
そしてさらに珍しいのは、どこで食べても自由という校風。
高校などではそうしているところが多い。けれど、中学では班を作って机を並べるのが基本だと聞く。
たとえば《ジモティーズ》のメンバーでもあり、違う中学の山口さんなんかは、そんなことはありえないと否定する。
ともあれ、みんなそれぞれ、好きな場所で好きな相手とともに昼食。
そんな習慣が当たり前のようにできあがっている。
僕は基本、同じクラスの小倉くんと一緒。
小倉くんは、すぐ脱ぐ癖がある以外はカードゲームが好きな普通

の人。それと、よくしゃべるから聞き役の僕と相性がいい。

直も女の子同士でご飯を食べることが多いけど、たまにはこっちにやってくる。

それで僕達の弁当が一緒なのを見て、小倉くんは、やっぱ兄妹なんだなとしたり顔で言う。

あれはどういう意味なんだろうか。

「春、飯食うぞ」

「あ、うん」

ちょうど、激戦の購買から戦利品を確保してきた小倉くんが教室に帰ってきた。

調理パンを三つも抱えている。

彼と僕は机を並べ、昼食の準備を始める。

そこで、今日は直がやってきた。

「春」

「あ、直」

「私言い忘れていたことがあった」

「何？」

小倉くんとともに、きょとんとした顔をする。

お弁当の包みを開きながら、直の言葉を待つ。

「今日のお弁当軽いでしょ」

「そういえば」

もう一度、お弁当を持ちなおして、その軽さを確認。

「たしかに軽いね」

「ご飯しか入っていない」

「なんだそりゃ」

と、小倉くん。

僕の代わりに、彼が声をあげてくれた。

「どういうこと？」

と、僕は聞く。

「綾がおかずを作ってきたの」

「んん？」

直の言っていることがよくわからない。

だから、どういう事態なのか考えてみる。

すると、全容が見えてきた。

「直」

「何？　春」

「言い忘れていたなんて言っているけど、お弁当の中身がご飯なのは確信犯じゃないの」

「ん」

射抜くような直の視線。

「だから、綾のところ」

「そっか」

「そうなんだな」

小倉くんが残念そうに言う。

「ということは、今日、春も直もここでは食べないってわけだ」

「ごめんなさい、小倉くん」

「うん、ごめん」

綾が頭を下げ、僕も謝った。

「あ、いいって」

けど、気のいい小倉くんは、直と僕の謝罪をあっさりと受け入れる。

「遠藤とは面識ないから、まあしょうがないな。それに遠藤のファ

ンクラブににらまれたら、たまったもんじゃない」

「それじゃあ」

そして、少し申し訳なく思いながらも席を立つ。

「だー、俺、鈴木達のとこで食うから気にすんなってば、春」

「うん。わかった」

1－17　お弁当（2）

喧騒に満ちた教室を抜け、人のいない廊下へと出る。
そしてその廊下を速足で歩き、上へ繋がる階段を足早に駆け上がっていく。

直と僕は、屋上へ。
僕は屋上に思い入れはない。

けど、この場所には縁がある。
というのも、直が屋上でのスケッチを好んでいるし、綾がのっぴきならない事情でよく使用しているからだ。

「あのさ、直」

「ん？」

「どうして綾のこと、もっと早くに言ってくれなかったの」

「……」

手に提げたお揃いのトートバック。
それが、階段を上るとともに揺れる。
直が次の言葉を探すあいだ、僕はその動きをじっと見ていた。

「なんとなくかな」

「そっか」

直がなんとなくと言うのだから、本当にそうなんだろう。
深く追求はしない。

やがて屋上に到着し、直がドアノブをくるりと回す。ドアノブは屋上独特の音を響かせながら、ゆっくりと開く。

開けた瞬間、一面に解放感にあふれる秋の空。
心地よい気分にさせられる。

「着いたね」

「ん」

「綾はいるかな」

「いたよ」

直が綾のいる場所を指差す。
そこには青いベンチがあって、綾が所在なさげに座っている。

「綾」

直とともに、手を上げて呼びかけてみる。

すると綾は気がついたらしく、その場で立ちあがって手を振りか

えす。凄い勢いの振りなので、僕は犬のしっぽを連想してしまうほど。

直と僕は綾の所まで行き、同じベンチに座る。

「来た」

「うん」

直が無表情で一言。

綾は表情豊かにうなずいている。

「私、けっこう待っていたんだから」

「ん、待たせてみた」

「そうなの？　直」

「……」

「どうしてそんなことするのよ」

「なんとなく」

今日の直も気まぐれだ。

でも、それが許されるような雰囲気が直にはある。

「まあ、こうして来てくれたからいいんだけどね」

綾が気を取り直す。

「それで、二人には昨日のお礼に手作りのおかずをつくってきたの。昨日は、その、見守ってくれてありがとう」

昨日とはうって変って、とっつきやすい綾。
何かいいことでもあったのだろうか、と思う。
綾はバックから、おかずが入っているであろう何種類かのタッパーを取り出す。

「みんな二人のために作ってきたんだからね」

そして一つ一つタッパーのふたを開け、かいがいしく説明をし始める。

「これは生野菜のベーコンエッグ巻き、これは鮭のムニエル、これはほうれんそうのシーチキン和え。こっちにはね、ちくわのきゅうり詰めと春雨サラダ」

「これは、すごいな」

「ん」

直も無表情で驚いている。
もちろん、綾の料理の腕の良さは知っていた。

けど、正直ここまで成長してるとは思っていなかった。
他にも、お弁当のおかずに定番な玉子焼き、ハンバーグなどが入っていて、きれいに盛り付けがされている。

「まるで花見みたいに豪勢だ」

「そう、よくわかったわね、春。今は秋なんだけど花見をイメージしたの」

幼馴染は得意げな表情で言う。

「見てわかった？」

「うん。というか、早く食べたくて仕方ないんだけどさ」

「そうね、じゃあ取り分けるから」

綾が、ん、と手を差し出してくる。

「何？」

「お弁当箱」

「そうだった」

そして綾は、直と僕のお弁当箱におかずを取り分けてくれる。

「よし、ではいただきます」

「いただきます」

「じゃあ、私も食べようかな」

暖かなひだまりと緩やかな風が吹くなか、屋上での食事。

しかも、綾が丹精込めて作った絶品のおかず。

「私も綾みたいに料理上手くなれる？」
「大丈夫よ、練習すればきっと」
「そうかな」
「そうだよ」
「で、春。一応、その、どう？」
「うん。かなりおいしい」
それにしても、小さいとき砂団子をむりやり食べさせられそうになったのは、もういい思い出である。
「って、あれは忘れてっていったでしょ、春」
「うん、ごめん。でも、食べないとぜっこーするって言われたから、どうやってごまかそうか必死に考えていたのは今でも覚えているよ」
「もう、春のいじわる」
ふん、とそっぽを向く。
とてもじゃないがお嬢様とはいえない綾。
そしてそのまま、膨らましたほっぺを両手で押さえる。
さらには空気を抜き、ため息までつく。
「どしたの？」

直が綾に聞く。
けど、綾はなかなか答えない。

「昨日のこと？」

「うーん」

綾の返答はまるで雲の流れのようにあいまい。
空を仰ぎ見る綾は、太陽に手をかざしながら言う。

「なんか昔は平和で良かったなぁ、と思ってさ」

「今も平和だけど？」

「春、そういう意味じゃなくて」

「じゃあさ、どういう意味？」

おもわず聞き返す。
綾はこっちを見て、何か不満そうな顔をしたあと、小さな声でささやく。

「付き合うとか付き合わないとか」

そしてさらに続ける。

「それと建前とか本音とか。女の子とか男の子とか。なんかいろんなことが複雑になって、なんだかな、と思ってね」

1－18　お弁当（3）

綾の作ったおかずを三人で食べ終え、一息つく。
食べ終えてもなお、綾の作ってきた料理に感動を覚えるほどで、あんなにボリュームがあったのにすべてなくなっていることに驚きをかくせない。
綾の料理はお腹いっぱいになっても、どんどん入った。

「綾、おいしかったよ」

「うん、ありがとう春」

「なんかすごい上手くなっていたね」

「そりゃそうよ。人は日々成長していくものなんだから」

「そういうものかな」

「そういうものでしょ」

綾は得意げに胸を張る。

「それに気合い入れて作ったし」

「そっか」

「だから上手にできないわけがないじゃない」

「そうだね」

それから、たわいない会話を交わす綾と僕。

今日何があったとか、勉強の調子はどうだとかいろんなことを話す。

そして僕達が話しているあいだ、直はいつのまにかスケッチをしている。

さらには、時々何か考えごとをしているようで、切れ長の視線をさらに細めて、フェンスの向こう先を見ていた。

「そいえば、綾」

直が口を開く。

「何？」

「あのとき、なんでいつも綾がお父さん役だったの？」

「えっ？」

直の質問を聞いた綾が不思議そうに首をかしげる。

「それで春がお母さん役」

「な、何の話？」

「泥団子作ってた頃の話」

「それって子どもの頃？」

「ん」

「そっか。子どもの頃の話ね」

綾が納得する。

「でも、そうだったっけ？」

「そう。それで私が子どもだった。どうして？」

「えっと……」

「なんとなく？」

「うん、なんとなくかな」

綾が戸惑ったように笑う。

でも、僕は綾が戸惑ったわけを知っていた。

それは二人の秘密の遊戯に関係あることだったからだ。

2―1　ジモティーズ（1）

鍋パーティーから三日が経ち、週末がやってきた。
今日は竹内さん主催のバレーボールの集まり、『ジモティーズ』の会に参加する日。

前日に直、それと綾も参加するという。
綾はバス通学なので、距離が遠く、あまり参加することがない。
だから綾が参加するのは、とてもめずらしいことだった。

ともあれ、直と僕は、雨が降る中、徒歩三分の場所にある地元の小学校へと一緒に向かって坂を上っていく。

雨が降ったこともあり、結局、後輩の絵里ちゃんとは別々に行くこととなる。
彼女はいたく残念がっていたが、自転車も乗れない状況で遠回りさせるのはしのびない。かといって、こちらから迎えに行くのもナンセンスだ。

「直」

「ん？」

直がこっちを向く。

「バレーするの久しぶりだよね」

「えっと……」

「どうしたの？」

「まだ、やるかどうかわからない」

「そうなんだ」

「ん」

直はうなずく。

傘をくるくると回しながら、歩を進める。

「直、そんなに回していると髪に水がはねるよ」

「ん」

案の定、髪に水がはねる。

「はねたよ」

「ん」

返事をしたあと、直は手櫛で髪を整えていく。

ついた水滴も取り払った。

「これで大丈夫」

「そうだね。元通りになった」

そして改めて、直を見る。

この湿気の多さにも負けない直の髪は、あまり手入れをしなくてまっすぐに整っている。

これは、一重の奥ゆかしい瞳とともに直の魅力の一つだ。

「ところでさ」

「ん？」

「どうして参加することにしたの」

話をさっきの続きに戻す。

「なんとなく」

「なんとなく？」

「ううん」

直は傘を傾げて、雨空を見る。

「雨だったから」

「そっか」

その論理性に納得はできない。

けど、まあ直ならあり得るだろうなと思う。

なにせ直は、僕の知らない賢さであふれている。

「春」

「何？」

「明日は晴れるといいね」

直がこっちを見て言う。

「そうだね」

「あさっても晴れるともっといいね」

「うん」

2―2　ジモティーズ（2）

体育館に着くと、もうみんなが待っていた。
ポールやネットなどの準備も出来ていて、あとはこちらがスタンバイするだけ。

今日は、手合わせをする相手が十人。
こっちは直と僕、綾、竹内さん、絵里ちゃん、違う学校の山口さん、高二の岩崎さん、そして、竹内さんの知り合いでもあるイケメンの長谷川さんの八人。

「人数足りている？」

体育館の中に入って開口一番、直が言う。

「まあ、足りているね」

「だったら私、見ている」

「やらないの？」

「ん。スケッチする方がいい」

「うん、わかった」

早くも直が戦線離脱。
どうやら非常事態と聞いて来ただけらしい。
結局、七人になり、ギリギリの人数となった。

「春、こっち」

「先輩、早く来てください」

幼馴染の綾と、後輩の絵里ちゃん。
二人が競い合うようにして僕を呼ぶ。

二人とも運動しやすい格好だけど、細部には違いはある。
綾はいつも来ていないせいか、体育着という格好。絵里ちゃんはロンTと短パンという自前の格好。

どちらがよりバレーに適している格好かは定かではない。
でも、目の保養には確実になる姿。

「春、どう？」

「え？」

まさか体育着の格好について聞かれているのか。
そう邪推してしまったが、綾にはそんなつもりはないみたいだ。

「んー」

僕の目の前でわたふたとする綾。
僕が黙っていると、綾が口を開く。

「私、髪くくってきたんだけど」

たしかに綾は、ミディアムの髪をくくっている。

「そうだね」

だからそう言ったら、問答無用でつねられた。

人前で猫かぶっているせいか、誰にも気づかれないくらいこっそりと。

「春、最低」

「え？」

「そうだねってさ」

「でも、そうだと思ったから」

「じゃあ、私の髪型なんかどうでもいいの？」

「そんなことないよ。綾はどんな髪型でも似合っているから、べつに言う必要ないと思ったんだ」

そう言うと、綾は押し黙ってしまった。

「いきなりずるい」

「？」

そして変な雰囲気になっていく。
綾と僕がどうしようもならなくなってきたところで、絵里ちゃんが割り込んできた。

「先輩達〜、なにいい雰囲気になっているんですか」

「いい雰囲気？」

「はい、そうです」

これをいい雰囲気と言うのだろうか。

「いい雰囲気になんかなっていません」

綾も絵里ちゃんを諭すように説得している。
しかも、お嬢様モード。

「そうですか」

「ん？」

「だったら私にもチャンスが」

なにやら絵里ちゃんがつぶやいていたが、こっちまで聞こえない。

「絵里ちゃん。なんか言った？」

「あ、いえ」

「そう」

「あ、それと私の髪型はどうですか？」

「絵里ちゃんも似合っているよ」

絵里ちゃんは、いつもと同じくサイドにくくっている髪型。
活発な彼女らしい髪型で、やはりよく似合っている。

「わぁーい。ありがとうございます、先輩」

喜ぶ絵里ちゃん。
けど、なぜだか綾の機嫌が悪くなったような気がする。

「それよりも春」

「ん？」

「私と練習しよ」

「あ、うん」

いつもより不気味なくらいとりすましている綾が、僕の手をやんわりとにぎってくる。
お嬢様モードもいまだに継続中だ。

「え、先輩。私と練習するんじゃないんですか？」

「えっ？」

「だって、一緒に来れなくなったから、てっきりそうだと思ったんですが」

「そうだったっけ？」

僕は首をかしげる。

「春、絵里ちゃんと一緒に来る予定だったの？」

「そうですよ」

「春、どうなの？」

「い、いや」

なんだか得体の知れない二人の勢いに、飲み込まれてしまいそうになる。

「春、とにかく私と一緒に練習しよ」

「あの、綾先輩。ここは譲ってくださいね」

バチバチと火花が散っている。

これでは、まるで僕を取り合っているみたいだ。

「どうしたのさ。二人とも」

「春は黙ってて」

「そうです。先輩は黙っててください」

なんだかにっちもさっちもいかない状況になってきた。
しかし、そんなときである。

「三人でやったらいいんじゃない？」

一斉にふりむく僕達。

「七人で奇数だしね」

その竹内さんの鶴の一声で、騒動はやっと収まった。

2－3　ジモティーズ（3）

準備運動をして、軽い練習を綾や絵里ちゃんとこなす。
さっきの騒動は二人ともやりすぎたと思っているみたいで、お互いに謝りあいっこをしてからはじめた。

バレーの腕前は、二人とも僕よりうまい。
綾は持ち前の運動センス。
絵里ちゃんは練習の成果。

今日も、それを存分に発揮していた。
けど、一通りの練習が終わって、今日来てくれた相手との試合。

その試合で『ジモティーズ』の大敗してしまった。
唯一、竹内さんだけが大車輪の活躍。

竹内さんは、中高と厳しい環境でバレーに打ち込んでいたため、かなりの上級者。しかしその反動として、楽しくバレーをする機会を設けたかったという。
だから竹内さんは、負けてもにこにこの笑顔だった。

「さあ、打ち上げ」

そして無事バレーを終えて、楽しみな打ち上げ。

近くのファミレスに入り、みなとおしゃべりを交わす。
今日は直もいるため、帰る時間を気にしなくてもいい。

「綾」

「ん？」

「ちょっとトイレに行きたいから立ってくれる」

「うん。わかった」

綾が席を開けてくれる。
僕はそこをすり抜けるようにして通っていき、トイレに行く。
そして帰り際、高校生の岩崎さんと一緒になる。

「今日のおたくさ、とんだハーレムだったな」

「僕がですか？」

おもわず立ち止って聞き返す。

「あの、綾って子と絵里がおたくを取り合いだったじゃないか」

「まさかそんなことは」

「まさかじゃないよ。私は結構遠巻きで見ていたけれど、なかなかの迫力があったさ。あれが女同士の戦いってやつか」

「そうですか。でも、綾にかぎってそんなことはないと思いますよ」

そう、綾にかぎっては絶対ない。

「ふーん。そんなこと言うんだ」

「ふーんって」

「おたく、そのうち刺されるんじゃない」

「何を言っているんですか？」

「いや、いっそ刺されちまえばいい。なんてーな」

にやにやと笑いながら言う岩崎さんは、けっこうな皮肉屋であることを知っている。

なのでこういった言動はよくしてくる。

もう慣れてしまったけど、最初のうちはとても苦手だった。

「ところでさ、おたく高校はどうすんの？」

「高校ですか？」

「そうだよ」

「そうですね。一応、直と僕は岩崎さんのいる学校を目指しています。あ、後、綾もです」

「そうかい」

「はい」

「まあ、知っている後輩もできるし、私としてもそれはよいな。でも、おたくと直ちゃんには頭の出来に違いがあるんじゃなかったかい？」

「直がレベルを下げるので」

「ふーん」

「それに学校は近い方がいいらしいですし」

僕がそう言うと、岩崎さんが満足げにうなずく。

「たしかに学校は近い方がいいな。私の友達には、電車などを使って通うことに憧れていた子がいた。けど、今ではラッシュの愚痴を聞かされるくらいだ」

「そうですか」

「まあ、それにうちの学校は面白いぞ。マンモス校特有の華やかさがあり、行事は豊富だ。それと、いろんな部活を自由に濫立できるのがいい」

「あ、それ前も言ってましたね」

「たしかにな」

「そして、岩崎さんは屋上部の話をしました」

「違う。屋上の平和を愛する会さ」

屋上の平和を愛する会。
とにかく、直が好きそうな部活だ。
無事、高校へ入学できたなら、まっさきに興味を示しそうである。

「ともあれ」

「はい」

「おたくは勉強をがんばらないとな」

そしてぽん、と肩を叩く岩崎さん。
僕を気遣ってか、めったにない励ましをしてくれる。
が、岩崎さんの顔はだんだんと笑みの形に変わっていく。

「笑ってますね」

「あはは、心にもないことを言っちゃったからだ」

「それはまた酷いですよ」

「ま、気にすんな。さて、そろそろ戻らないと大の方だと思われる」

「……」

下ネタもＯＫな岩崎さんだった。

2－4　ジモティーズ（4）

みんながいる場所へ戻ると、いつのまにか席がリフレッシュされていた。
綾の隣にはイケメンの長谷川さんがいる。
二人は何事かを熱心に話しこんでいて、お互いに笑顔だ。

僕はべつに綾のことをどうしたいとか思っているわけではないんだけど、屋上で綾が告白されるような、なんとも言えない胸のもやもやを感じた。

この微妙な気持ちはなんだろうか。
嫉妬ともまた違う。
だけど、やり切れない気持ちで満たされる。

「先輩、先輩」

そんな中、絵里ちゃんが呼びかけてきた。

「なに？」

「ここに座ってください」

「あ、うん」

そこしか席が開いていないのもあってか、絵里ちゃんの言われたとおりに座った。
絵里ちゃんはピザを食べるのを止めて、僕に呼びかけてくる。

「先輩」

「ん？」

「先輩」

「えっと、何？」

何か期待したまなざしでいるけれど、僕にはさっぱりわからない。
でも、絵里ちゃんのその笑顔は好きだ。

「あのー」

「うん」

「私との約束はどうなりましたか」

「約束？」

「そうです。約束です」

約束と言われても、思い当る節がない。
ということは、絵里ちゃんの早とちりだろうか。
しかし、絵里ちゃんの早とちりよりも、僕の忘れっぽさの方がもっとひどい。

「覚えてないんですか」

「うん。そうみたいなんだ」

「じゃあ、耳を貸してください」

「えっ？」

「耳ですよ、先輩」

「耳か」

言われたとおりにそうして待つ。

絵里ちゃんは、ピザを食べた手をおしぼりで念入りにふいている。

そして僕の耳に手を当ててきた。

「ごにょごにょごにょ」

「……」

「ごにょごにょ？」

「えーと」

絵里ちゃんは何を言っているんだろうか。

「ごにょごにょ」

「え？」

「ごにょごにょごにょごにょ、って、先輩！」

「えっと、それよりも何を言っているの？」

「おそいですよー。早くつっこんでください。私、つっこみ待ちだったんですからぁ」

そうなのか。

さっぱりそのペースに乗れていなかった。

けど、絵里ちゃんのテンションの高さもいつもよりおかしい。

「ところでさ、絵里ちゃん」

「はい？」

「約束の件はなんだったの？」

「えっと」

急に口ごもったようになる絵里ちゃん。

そしてこっそりとつぶやく。

「あの、デートです」

「え、デート？」

「しー。先輩。みんなに聞こえてしまいますよ」

「絵里ちゃん。聞こえたらまずいの？」

僕も絵里ちゃんと同じように小声で話す。

「はい。せっかくデートをするんですから、内緒のデートがいいんです」

「……」

「内緒のデートですよ。胸躍る感じがしませんか？」

「……」

「来週の日曜日なんかどうですか？」

「来週の日曜日」

オウム返しにつぶやいて、僕は押し黙る。

すると絵里ちゃんが、残念そうな顔をしながら言う。

「先輩。何を困った顔しているんですか。後輩の女の子にデートを誘われて、困った顔をする男の子なんていませんってば」

「そうだね」

たしかにそのとおり。

美咲さんのせいでいくらデートにトラウマがあるとしても、僕となんかデートに行きたいと言ってくれる絵里ちゃんの気持ちはとてもうれしい。

でも、来週の日曜日。

この言葉で脳裏に浮かんだのは、綾のこと。

もちろんこれは綾とデートをするという意味ではない。
僕達が周期的に行っている秘密の遊戯のことである。

「あのー、先輩？」

「あ、ごめん」

「どうしました？」

「ちょっと考え込んでいて」

うわの空になっていた自分を軽く叱責する。
改めて、絵里ちゃんの方へ向き直った。

「それで、絵里ちゃん」

「はい」

「デートの件は約束なんだね」

「えっ、あ、はい。そうしちゃいます」

ちゃめっけいっぱいの絵里ちゃんは、ウインクしながらうなずく。

「そっか。でも、来週の日曜日は都合が合わないんだ。だから、絵里ちゃんの都合がいいなら土曜日でどう？」

「えっ、土曜日ならいいんですか？」

驚いたように目を丸くする絵里ちゃん。

「うん」

と、僕はうなずく。

「ほんとですね」

「ほんとだよ」

僕がそう言っても、絵里ちゃんは何度も聞き返してくる。

そんなやりとりが数回続いたあと、絵里ちゃんはやっと納得して喜んでくれた。

2―5　ジモティーズ（5）

結局、あれから二時間。
僕達はファミレスですごした。

注文はドリンクバーで繋ぎつつ、みんなとさっくばらんな会話を楽しんだ。
気がつけば時間が経っていたというぐあいで、時間の流れがこれ以上ないくらい早く感じた。

皆、世代は違うけど、話題はたくさんあった気がする。
勉強のことは共通として、将来の夢や最新のエンタメ情報までいろいろと話し合った。

違う学校の山口さんやイケメンの長谷川さんとも思ったより話が弾んでいて、あまり付き合いのない人特有の違和感みたいなのものがほとんどなかったくらいだ。

「じゃあ、綾」

「うん」

「また明日」

「春、また明日ね」
「絵里ちゃんもまたね」
「はい。さよならです先輩」
綾はファミレス近くのバス停へ。
絵里ちゃんは家の方向へ。
綾や絵里ちゃんと別れ、同じようにあいさつを交わしている直の方へと歩いていく。
「さて、直」
「何？」
「僕達も帰ろっか」
「ん」
そして僕達は、まだ道端で話し込んでいる他の人達に別れを告げようとする。
けど、そこで竹内さんに話しかけられた。
「今日はありがとね、春くん。おかげで助かった」
「あ、いえ」
「ううん、ほんとにありがとう」
やはり癒される声。

疲れが一気に吹き飛ぶ。

「直ちゃんもありがと」

「由貴」

「ん？」

「私はスケッチしてただけ」

「ううん。それでもうれしかった」

「そう」

「そうだから」

あっさりとした笑顔で竹内さんが言う。

「ともあれ、何とか人数が少ないのを乗り切れた」

「そうですね」

「ほんと、どうなることかと思ったけどね」

くすりと笑う竹内さん。

やっぱり彼女には、さっぱり美人という言葉がよく似合う。

「だから、二人には感謝」

「いえ、そんなたいしたことしていません。ね、直」

「ん」

「いいや、感謝、感謝」

竹内さんは懲りずに何度もお礼を言ってくる。
おかげで、なんだか照れくさくなってきた。

「じゃあ、直と僕は帰りますので」

「うん、わかった。それじゃあ気をつけて」

「はい」

「あ、言い忘れてたけど、また今度美咲達と一緒に鍋をしよ」

「そうですね」

「ん」

と、直もうなずく。

「でも、きっと今度の鍋のときはは美咲がふられる頃合いで、大変かもしれないけどね」

「あ、それは困ります」

「そうだね。そのときは私も美咲を一生懸命励ますよ。じゃあ、そのときまでまたね」

「はい。さよなら竹内さん」

「さよなら、由貴」

そして僕達は家路へと向かう。

2－6　銭湯（1）

家に着いたときは、ちょうど夜の九時。
なので、急いで銭湯に行く準備をしなければならない。

「直、急がないと」

「ん」

自宅近くの銭湯は、たしか夜の十時までの営業。
直と僕は急いで風呂道具の準備をして、また家を出る。

銭湯の場所は、都立公園の近く。
だから、そう遠くない。
十分くらいで着くはずだ。

「直、今日楽しかった？」

「ん。スケッチいっぱいできたからよかった」

「じゃあ、帰ったらまた見せて」

「ん。わかった」

直が無表情で返事をして、そこで会話が途切れる。
しかし、直とは会話が続かなくても、問題はない。直の不思議な雰囲気もあるけれど、兄妹としての信頼関係がそうさせる。

直は僕よりも賢くて、自慢の妹。
直も僕のことは、頼りないけど兄だと接してくれている。

この広い空の下、こういった繋がりを感じられるのはもう直だけ。
そう考えたところで、幼馴染との綾が思い浮かぶ。
しかし、綾とは昔ほど繋がりを感じない。

それは二年前に一度疎遠になってからか。あるいは、綾がお嬢様の猫かぶりをして、素の姿を人前では見せなくなってからか。
それとも綾の秘密を目撃してしまい、一緒にその遊戯をするようになってからだろうか。

僕にはわからない。
でも、そう感じる。

「春」

「？」

「春、春」

直の声が聞こえてきて、僕は我に返った。

「春、ぼーっとしてたよ」

「うん」

「何か誘われたの？」

「うん。そうだね」

「何に？」

「思考すること」

「そう」

直が無表情でうなずき、僕は少しずつ意識を周りに持っていく。
どうやら、目的地に着いていたみたいだ。
湯のマークが描かれている暖簾が目の前にある。

「いつのまにか着いたんだね」

「ん。いつのまにか着いていたよ」

直が神妙な面持ちで言い、さらに続ける。

「私も考え事をしていたから、危うく通りすぎるところだった」

「そっか」

「うん」

今度は深くうなずく直。

「私、春と綾のことについて考えていた」

「そうなんだ」

綾と僕のこと。

奇しくも、同じことを考えていた。

「そして、二人の始まらないストーリーについても」

「二人の？」

「そう」

「それって綾と僕？」

「ん」

直はまたもやうなずく。

「どうしてそう思ったの？」

「なんとなく」

切れ長の視線が僕をとらえてくるが、前にも言われたこの言葉の意味がわからない。

双子なのに、どうしてこうも感じるところが違うのか。

僕はそう考えて、あることに気がついた。

直は日頃からスケッチしてるだけあって、人間観察にも優れている。だから、僕にアドバイスをしているのだろうと。

でも、わからない。
それがとても残念だ。

「直」

「ん？」

「やっぱり、二人の始まらないストーリーっていわれても、僕にはなにがなんだがわからないよ。それじゃあ、直と僕に特別なストーリーってものがあるみたいじゃないか」

僕がそう言うと、直は押し黙った。
さらには、しゅんとへこんだように見える。

「どうしたの？　直」

「なんでもない」

「ほんと？」

「ん。ただ、春はわかってない」

「そっか」

直の機嫌は変わらない。
無表情でそのままだ。
ただ、暖簾をくぐっていく直は、ほんの少しだけ肩をいからせている。

2－7　銭湯（2）

銭湯からあがって待合室に行くと、すでに直がいた。
いつもは直より僕の方が早くあがっていて待っていることが多いけど、今日はまさかの逆である。

直は両手で瓶を持って、こくこくと牛乳を飲んでいた。
これも、あまり牛乳を飲まない直にしては珍しい。
とにかく、僕は直に声をかける。

「直」

直が牛乳瓶を持ったまま、くるりと振り向く。
その可愛らしいしぐさに微笑ましく思いながら言う。

「牛乳飲んでいるんだ」

「ん」

「珍しいね」

「なんとなく飲もうと思った」

「じゃあ、僕も飲もうかな」

やっぱり風呂上がりの定番といったら牛乳。コーヒー牛乳もありだけど、牛乳の方がよりふさわしい。

「さて」

僕は自販機のそばまで行って、牛乳を探す。

売り切れになっていたら、どうしようかと思ったがちゃんと置いてある。

なので、それを買って直のところまで戻ると、直はすでに牛乳を飲み終えていた。

「春」

「なに？」

「お願いがあるんだけど」

直のお願いと聞いたら、もうピンとくるものがある。

スケッチだ。

僕は直の言うであろう言葉を制して、牛乳を飲む姿勢を身体で表現してみる。

「こう？」

「さすが、春」

そして直は、ポケットからメモ用紙を取り出し、さらさらとデッサンを開始する。

直の要望通り、二、三分だけその姿勢。

もう銭湯の営業も終わりに近いせいか、まわりには誰もいない。
よくあることとして、直がデッサンしているあいだ僕がポーズをとっているのを不審がる人なんかがいるけど、今日はその心配もいらない。

「出来た」

「え、終わったの？」

「うん。あ、もうちょっと」

「わかった」

「よし、今度こそ出来た」

その直の言葉を聞いて、姿勢を崩す。
そして一気に牛乳を飲みほし、一息つく。

「ふう」

口をぬぐいつつ、直に言う。

「やっぱり直は描くの早いね」

「デッサンは早く書けるのが取り柄」

「そうだった」

僕は直の絵を見ながら納得する。

「さて、そろそろ閉まる時間だ」
「ほんとだ」
「出ようか」
「ん」
直と僕は、急いで帰る支度をする。
そして程なくして準備を終え、店頭の人にあいさつをして外に出た。
外に出ると、気温が下がっていて肌寒い。
「あ、星」
直が夜の空を見上げて言う。
空を仰ぎ見れば、星がたくさんある。
「やっぱり秋の空は澄んでいる」
「そうなの？」
と、僕は聞き返す。
「そうだよ」
「へぇ～」
僕にはその違いがわからない。
けど、直が言うのならそうかもしれない。

2－8　鳥子の話

結局、僕達は星のことを話しながら、東風荘の前までやってきていた。

しかしそこで足を止めたのは、東風荘で一番の不思議な人である鳥子さんが、空を見ながら微動だにしないで固まっていたからだ。

「おや、春くんに直さん。こんな時間に帰ってきてどうしたのかな、と思えば銭湯にいってらしゃったんですね。こんばんわ」

「こんばんわ」

直も僕と同じようにあいさつする。

今日の鳥子さんは、神秘的な雰囲気に拍車をかけるように全身黒づくめの格好だった。

「あの」

「どうしました？　春くん」

「今、何をしているんですか？」

「それは私のことを聞いていらっしゃるのですか。ああ、きっと私のことでしょうね。このミサにでも行くような格好に気を取られているのでしょう」

「はい」

「ん」

僕達はうなずく。

すると鳥子さんが説明をはじめる。

「じつはですね。春くん、直さん。私の事情というのはたいしたことではありません。本日は私の師範だった人が亡くなった命日でしたので、哀悼の意を込めてこの格好をして、月を見ていたところなんです」

「そうですか、それは」

僕はなんとも言えずに、あいまいに言葉をにごす。

「そうして、世界の中での自分の存在を確認していたところなんです」

「自分の存在を確認？　ですか？」

「そうですよ。自らの存在は脆く儚く途端に崩れ去ってしまうもの。だから私は空を見て、星を見て、月を見て、そして自分を立ち止らせて固定していました」

「はぁ、そうですか」

「はい」

「哲学的ですね」

「ん。哲学的」

直も言葉をはさむくらいだ。

「いいえ、そんなものでありませんよ。ただ、何秒か、自分を意識的に立ち止まらせて固定してあげればいいだけなんです。そうですね、貴方達も一緒にやってみましょうか」

「え」

おもわず声をあげてしまう。

「大丈夫です。そのお手伝いを私がしてあげましょう」

「あの、鳥子さん？」

「さあ、上を見てください」

その言葉と同時に、直と僕はマリオネットで操られたかのように上を向いてしまう。そしてさらに、身動きがとれなくなる。まるで金縛りにあったみたいに動かない。

時間にして、一分間。

しかし、世界の中での自分の存在を確認するのには充分な時間だった。

「これも、私の師範だった人が教えてくれた人体のツボをつく技なんです。せっかくなので貴方達に教えてさしあげましょうか？」

「え、いいんですか」

もっとも習得できるかどうかは疑問である。

「はい、今日は師範の命日なのでいいでしょう」

「では、お願いします」

「じつはある一部分をつけば、誰にも実践できる技なんですよ。美咲さんにからまれたときにでも試してみたらいかがでしょうか」

2―9　秘密

それから鳥子さんの師範の話をたくさん聞いて、家に戻る。
家に着いた時はすでに十時半。
一日の終わりが刻々と迫ってきている。

僕達はいつもと同じように布団を並べ、寝る準備をはじめる。
前に鳥子さんが地震の予言をしていらい、直は布団をぴったりとくっつけるようになっている。
今日も、少しずつ少しずつ布団を近づけてくる。

「春」

「何？　直」

僕は直にたずねる。

「私、春のことお兄ちゃんって言わないから」

「えっ？」

先日の発言を気にしての直のセリフだろうか。
しかし、こっちはもう気にしていない。

「お兄ちゃんって呼んでいいって言ったこともなしにする」

「それは無理なんじゃ」

「ううん。ノーカウント」

無表情だったが凄い剣幕であるのかのように錯覚させられる。
それくらい直は必死だった。

「わ、わかったよ」

結局、僕は直の勢いに押されてこうつぶやいてしまう。

「ん」

直は満足したのか、いつもどおりうつぶせになった。
そして足でシーツのしわを伸ばすいつもの直のしぐさを見届けながら、僕はいつものように一日を思い返す。

やはり今日は『ジモティーズ』での活動について。
何よりも困っていた竹内さんの手助けができた。
試合には大敗してしまったけど、楽しんでてきたことがとても良かった。

そう思い返しながら寝返りをうったところで、僕の携帯が鳴る。
ディスプレイに表示されていたのは綾。

「直」

「ん？」

「今から電話する」

「わかった」
「相手は綾」
「ん」
一応、直に伝えてから、電話に出る。
そして電話を耳元に当てると、元気のない綾の声が聞こえてきた。
『春』
「どうしたのさ、綾」
『うん』
「家で何かあった？」
『べつに大丈夫』
とはいうが、事実、綾の家庭環境は二年前に大きく変わっている。
母が再婚して、普通では信じられないくらいに大きな家に住み始め、綾自身はお嬢様の真似ごとをするようにもなった。
『あのさ、春』
あいかわらず元気のない綾。
僕はできるだけ明るい調子で言う。
「大丈夫だよ」

『え？』

「元気のないときは、またあれをやればいい」

『また、あれやってくれるの？』

「いいよ。いつでも」

と、僕は返事をする。

「問題ないから」

と、さらに付け加えもした。

『でも、そろそろやめないと』

「そんなことないよ。綾の欲するままにすればいい」

そう、僕達は悪いことをしているわけではない。
ただ、誰にも理解されないだけだ。
結局、綾は少し考えた後こう言った。

『じゃあ、今週の日曜日にお願いしていい？』

「うん、わかった」

『服はいつもどおり私が持って行くから』

「オッケー」

『私、わがままでごめんね』

「いいよ。わがままなのが綾だから」

『そうだけど。でも、そんなことないもん。春のばか』

「そっか。僕はばかだよ」

『ううん。ちょっといいすぎた』

「そう」

『とにかく、ほんとにありがとう。春』

「うん。いいよ」

直も知らないこの秘密の遊戯。
それは互いに性別を交換しあい、夜の街へと繰り出すこと。
しかしそれこそが、唯一、幼馴染の綾に頼られているのだと僕は実感していた。

2－10　カラオケ（1）

鳥子さんが予言していた大きな地震。
それがやって来たのは、あの鍋の日から一週間後の夕方のことだった。

この日は、とうとう彼氏に振られてしまった美咲さんが家に来ていて、なぜか心を落ち着けるために直と僕とでジェンガをしていた。
そして、そのジェンガが地震によって崩れていく。

「春、地震」

無表情で微動だにしない直がつぶやく。
けど、その声色は不安そうだ。

「うわー地震いやだー。あんな男なんてもっとやだー」

対する美咲さんは、心を静めていた効果もなく大騒ぎしている。
美咲さんも地震は極端に苦手だという。

もっとも、地震に強い人などいない。
地震はしばらくのあいだ揺れ続けて、僕達を不安にさせていく。
積み上げてあった本や、ちょっとした小物が落ちたりもする。

そうして、数分後。
ようやく地震が止まってくれた。

一息ついたあと、部屋の片付けをはじめる。
片付けの最中、直がいきなり声をあげた。

「どうしたのさ？」

美咲さんがびっくりしたように聞く。

「これ、地震で落ちてきた本のあいだに挟まっていた」

「本？」

直がなんかの券みたいなのを美咲さんに見せる。
だが美咲さんは、それより先に直が持っている本の方に注目。

「って、これ『親愛なる義妹』じゃん。やっぱりこの部屋にあったのか。ないない、と思ってたんだよな春坊」

「なんでそこで僕を呼ぶんですか」

美咲さんに対しては、どうもつっこみが先に来てしまう。

「しかも春坊ってやつは、こんな大事なバイブルを、あんなところにのさばらせていたのか」

「あんなところって、それよりもバイブルってなんですか」

「バイブルはバイブルでしょ」

「それじゃあ、僕が変態になってしまいますよ」

「いいじゃん」

美咲さんは僕の肩をぽんぽんと叩く。

果たしてそれはどういう意味なのだろうか。

「ところで、美咲」

「ん？」

「これ」

直が、本に挟まっていた券を美咲さんに渡す。

すると、美咲さんがつぶやいた。

「カラオケの半額券？」

「えっ、カラオケ？」

僕もつぶやく。

「しかも今日までじゃんこれ」

ここまで聞いて、なんだかすごく嫌な予感がした。

というのも、美咲さんが彼氏に振られる。僕がデートの相手としてあてがわれる。デートがカラオケになる。美咲さんがマイクを離さないで歌い続ける。

そんな方程式が出来上がっていたからだ。

「よしっ！　じゃあ行くか」

「えっ？　そんな」

がしっと、腕でヘッドロックされた僕。、
抵抗する余裕も与えない。
そして、顔にその大きな胸が当たっているのも全く気にしない美咲さんがさらに言う。

「行くのか？　行かないのか？」

一瞬、鳥子さんに教わった相手の動きを止めるツボでも押そうかと思った。
けど、倍以上になるであろう報復が怖かったので、直前で躊躇してしまう。

「さあ、どっちなんだ？」

さらに胸を押しつけてくる美咲さん。
これでは攻撃されているのか、恩恵を受けているのかわからない。

「はっきりしなさい、春坊」

「あ、えっと」

そう言いつつも、直の様子をちらっと確認してみる。
しかし、直は我関せず、といった様子で部屋の片づけ。
助けを求めても無駄だろう。

「で、どっちなんだい」

「い、行きます」

「もっと嬉しそうに」

「行かせてください。お願いします」

僕は心の底から正反対のことを一生懸命に叫んだ。

「よしっ！　さすが春坊」

美咲さんは納得したのか、ようやく僕を離してくれた。

「じゃあ、直っち。私と春坊はちょっくらストレス解消のデートしてくるから。お留守番を頼むぞ」

「ん。わかった」

直がうなずく。

「美咲。いつものデートだよね」

「そうそ」

「春」

そして僕を呼ぶ。

「何？」

「私、料理作っててていい？」

「料理？」

「うん」

「材料はあるの？」

「いつものスーパーで買ってくる」

僕の真正面に直の無表情が広がっていた。

「いい？」

「うん」

「綾に負けてられないから」

ただ僕は、上手くいくように祈るしかない。

「それじゃあ、春坊。準備して」

「はい」

僕は美咲さんに言われたとおり準備をする。

財布と携帯、それと心の準備を忘れずに。

「さ、行くか」

「はいはい。あ。ちょっと待ってください」

もう玄関を飛び出している美咲さんを追いかけるために、僕も急いで靴を履く。

けんけんをして靴をしっかり履き、直に声をかける。

「じゃあ、直。行ってくるから」

「ん。じゃあね」

「うん」

「あ。春」

直がすべてを見透かしそうな視線でこっちを見る。

「えっと、何？」

「『親愛なる義妹』はどうするの？」

「えっ？」

「『親愛なる義妹』」

「す、捨てていいからね」

僕はそう言うしかない。

2－11　カラオケ（2）

美咲さんと僕が東風荘を飛び出したのは、西日がオレンジに染まっている夕方。

市街へと繰り出すには遅い時間だったけど、カラオケ店はそこにあったので、僕達は急いで小学校前のバス亭に向かった。

幸い待っていた行き先のバスはすぐ来てくれた。

一時間に二、三本なので、タイミングがぴったしだと得した気分になる。

「ちょうど良くバスが来ましたね」

バスに乗り、二人して後ろから二番目の座席に座る。

美咲さんが窓側、僕が通路側。

美咲さんはこどもみたいに窓側を喜んでいて、あいかわらずだなと僕は思った。

「座れました」

「そりゃそうさ。私がそうなるようにちゃんと計算していたからな」

「そんな甲斐性、美咲さんにはありませんよ」

「なんだと、生意気な春坊め」
「いててててて」
笑顔で頬をつねられる。
「やっぱり頬がこんなに伸びるから、春坊はエロイな」
そして僕の頬をさらに伸ばそうとした。
「そんな言いがかりやめてください」
「言いがかりじゃないぞ」
「言いがかりですよ」
僕は改めて主張する。
「だったらなんでヘッドロックしたとき、顔がにやけていたんだ？」
「そんなことは」
「いいや、にやけていたさ」
鬼の首を取ったようにしてやったりの美咲さん。
なんだかとても悔しい。
「まあ、にやけていいけどな。おかげで私の自尊心は見事に回復したから。やっぱ私も捨てたもんじゃないわけだ」

そりゃそうである。
なんたって美咲さんは華の女子大生。
ずぼらなことを除いてよくよく見れば、かなりの美人さん。

「つまり、私いけないんじゃなく、包容力がないアイツの方がいけないってことだ」

美咲さんは一人納得してそう言う。
けど、それはどうかはわからない。
美咲さんのいい加減な性格に呆れ果てているかもしれない。

「おい、春坊。またろくでもないこと考えているな」

「いいえ、滅相もありません」

「嘘付け」

美咲さんがぐにぐにと頬をいじりまわす。

「やめてくださいよ」

と、僕は言う。
しかしそうやってじゃれ合っているとき、僕の目の前にある人が立っていた。

「さ、坂本。あんたなにしてるの？」

立っていたのは、綾の親友の小平さん。
ショートカットで感情の起伏がけっこう激しい人だが、僕との相性はあまり良くない。

間の悪いタイミングで登場していつも誤解される。
前も、美咲さんにむりやりデートさせられたとき、腕を組まされたところで小平さんが現れた。最近も、僕と小平さんがぶつかって、小平さんの上に乗ってしまった。

そう、なぜかタイミングの悪いところでいつも鉢合わせ。
それが小平さんと僕の関係。
だから、きっと今も誤解される。

「坂本には綾がいるのに」

「えっ？」

「えっ、じゃないでしょ。このすけこまし」

言葉とともに、チョップが降ってくる。
空手を習っている小平さんの強烈な一撃だ。

「これでも手加減してんだから」

「いてて、ほんとに？」

「ほんとにじゃないでしょ」

小平さんが僕を見て怒る。

「で、この人とはどういう関係なの、坂本。返答しだいでは綾に言いつけるよ」

「綾に言いつけるって。それに美咲さんとの関係は話したような」

「うん、聞いた。けど納得がいかない」

さらに小平さんは、僕に向けてびしっと指をさす。

「そういえば坂本、前見たときは腕組んでいたよね」

「そうだけど」

仕方なくうなずく。

「そうだけどって坂本。そんなんじゃだめでしょ」

あいかわらず小平さんは、すごい勢いでまくし立ててくる。

僕は不謹慎にも、めんどくさいなあ、と思ってしまった。

「あ、それとあなたも説明してください」

「え、私？」

自分を指差す美咲さん。

美咲さんは今までやけに静かだった。

けど明らかに、小平さんと僕のやりとりを楽しんでいる。

なぜなら、その表情には愉悦を隠しきれないでいるからだ。

「そうです。あなたです。あなたは中学生を誑かして何が楽しいんですか？」

まるで風紀委員のような小平さん。
それはまたいきすぎである。
しかし美咲さんは、そんな小平さんを相手に、煽るかのような発言をしてくれた。

「楽しい？　そんなのあたりまえじゃん。だって春坊は、私のデート相手だもん」

「坂本、どういうこと？」

「そんなこと言われてもさ」

「説明しなさい」

「えー」

結局、このやり取りが目的地に着くまで続いた。

2―12　カラオケ（3）

「せっかくだから三人でカラオケ行かない？」

バスを降りてすぐ、美咲さんが小平さんに提案する。

「真由っちならいいよ」

しかも、下の名前で呼んでいる。

「どう？　春坊」

「僕もいいですよ」

しかし小平さんは、どうしてこんな展開になったのかと腑に落ちないような顔をして言う。

「私は、買い物に来ただけです」

「え、いいじゃん」

「それに坂本なんかとデートしたくありません。こいつは顔がいいだけで女の子にちやほやされる優柔不断なんです」

「そうなんだよな。しかもアンニュイ系だし。顔がいいかは見方によるからわからないんだけど、意外ともてそうな感じで、でもそのチャンスをふいにする感じでもあるんだよね」

なぜか僕があて馬にされている。

おかげでとても居心地が悪い。

「まあ、それはおいといてさ。真由っちも行こう」

「その呼び方やめてください」

「いいじゃん、真由っち。で、行くんでしょ」

「私は買い物が」

「はい、それはまた今度」

「でも」

「いいの」

こうして、美咲さんのペースに乗せられた小平さん。

僕達と一緒にカラオケへ行くこととなる。

「坂本、勘違いしないでよね。私は二人がへんなことしないかどうか見守りに行くだけなんだから」

「なにそれ？」

美咲さんが豪快に笑ってる。

「坂本、聞いてるの」

「うん、聞いてる」

そして結局、こじゃれたカラオケ店に三人で入った。

案内にされた部屋に入った瞬間、美咲さんは即座に店員を呼び付け注文。

カラオケの券を使ってしっかりと割引もおこない、注文したサイドメニューがどんどんとやってくる。

「なんで飲み物は全部オレンジジュースと生ビールなんですか」

「え、いいじゃん」

「それにサイドメニューは揚げ物やフライドポテトでバランス悪いし」

小平さんもショートカットをいじりながら文句を言っている。

「こら、文句を言うな中学生達」

「小平さん、この人はいい加減だから」

「ほんとにそうね」

そう言われても、やはり美咲さんには何の効果もない。もう既に、自分の歌いたい曲を入れていて、臨戦モードに入ってる。

こういうのは楽しんだもん勝ちなんだろう。

小平さんと僕は、一緒になってため息をつく。
ここに来て、初めてわかりあえた気がした。

「ほら、何してんの二人とも。私が三時間全部入れちゃうぞ」

振られたとは思えないくらいテンションの高い美咲さん。
リモコンをぷらぷらさせながらそんなことを言う。

「待ってください」

「ん？　真由っちも歌うのかい」

「はい。私も入れます。で、坂本は？」

「一応、僕も歌うよ」

「ふーん。それは意外」

「こう見えて僕は歌う方」

歌は上手いとか下手とかはべつにして好きである。
歌うことにも特に抵抗はない。

「んー。じゃあ、しょうがないな。二人のぶんの時間も開けといてやろう」

とはいうが、最初の一時間半は美咲さんのメドレーが確定。
じつは、これがけっこうしんどい。

なぜなら美咲さんは、自分が気持ちよく歌うだけの歌い方をする

し、何より演歌が好きで、僕達は聞いていても中々乗れない。
つまり、退屈をもてあます。

しかも美咲さんは、自分の歌をしっかりと聞くのを強要してくる。
なので、体力まで消耗する。

「さ、坂本」

「何？　小平さん」

「い、いつまで続くの？」

「もう少しだよ」

「……」

小平さんから声にならない叫びが聞こえた。

「もう疲れたよ、パトラッシュ」

「がんばろうって、小平さん」

こっちはこっそりと声援を送るしかない。
そんな中でも、美咲さんはあいかわらず気持ちよさそうに歌っている。

「しかも、なんだか眠いんだ」

「眠っちゃだめだ。小平さん」

「じゃあ坂本、私の話を聞いて」

「うん。なんでも聞くから」

「私生まれ変わったら木になるの。木の一部になって、風や訪れる鳥達を感じるの」

とうとう壊れてしまった小平さん。

僕は頭を抱える。

「ねぇ、小平さん？」

「ん？」

「これがデートに思える？」

「ごめんなさい」

「思えないよね」

「私が悪かったです」

そうして美咲さんの一人メドレーが終わった頃には、小平さんは歌う元気がなくなっていた。結果、彼女は最後まで歌うことができなかった。

「終わったぁ、坂本」

「うん」

「楽しかった？　真由っち」

まだまだ元気な美咲さんが笑顔で問いかけてくる。

「は、はい」

これこそが、美咲さんのバイタリティーのすごさに恐怖の片鱗を感じた瞬間だ。

こうして今回の美咲さんとのカラオケは、小平さんにトラウマを植えつけただけになってしまった。

2－13　美咲の涙

疲れ果ててしまった小平さんとはバスの中で別れる。
そして小学校前のバス停で降りた僕達は、東風荘近くのいつもの坂を下っていく。

「美咲さん」

「ん？」

「あいかわらずのニューカマー殺しですね」

「ニューカマー殺し？　ああ、そういう意味ね。ホントは私、そんなつもりはまったくないんだけどさ」

「どこがですか」

今日、小平さんの身に起こった光景を思い浮かべて、僕は言う。

「どこがですかって言われてもな。どうしてか私と一緒にいると相手は疲れるんだよね。じつは今回振られた理由もそれだし。春坊は疲れる？」

「疲れますよ」

「でも、そんなの関係ないや」

「そうですか」

僕はがっくりと肩を落とすが、美咲さんは気にしない。

「あーあ、どっかに包容力のある男はいないかな」

秋の夜風を受けながら、くるくる回る美咲さん。
バランスを崩して、電信柱へとぶつかりそうになっている。

「千鳥足ですよ、美咲さん」

「んー。これわざとやってんの」

「そうなんですか？」

「そうそ。なんか重力を感じたくてさ」

そう言って美咲さんは、さらにぶらんぶらんと手足を動かす。そこだけ見れば奇々怪々な動きで、イソギンチャクみたいである。

「じゅーりょーく」

美咲さんはまだ重力で騒いでいる。
と思ったが、それっきり黙ってしまった。
奇妙に動かしていた手足もだんだんとまともになっていき、そのまま歩みが止まる。

「どうしたんですか？」

僕は聞いてみるが、うつむいたまま顔を上げない美咲さん。
それを見て、酔って気持ち悪くなったのかなと思う。

しかし路上にポタポタとしずくが落ちていき、これは涙なんだろうかと思って隣を見ると、やっぱり美咲さんの涙だった。
美咲さんの涙なんか見たことない僕は、心底驚いている。

「あれ、私泣いている？」

一人ごとのようにつぶやく美咲さん。
僕は黙っているしかない。
どうすればいいかわからないのだ。

「私、どうしたんだろう。春坊」

美咲さんはさらにほろほろと涙を流す。

「ほんとにどうしたんですか？」

「わからないよ。でもなぜだか悲しいんだ」

そして美咲さんは、とうとうと語りはじめる。

「なんか、今回のことはショックだったのかな。大学の友達と街に繰り出したときは、ぜんぜん悲しくなかったのに。どうしてだろう。今はとても悲しい」

そう言って涙をぬぐう。

「きっと春坊のせいだな」

こつ、と拳で額を殴られる。

しかしいつもの乱暴な美咲さんではなく、心の内側まで響く優しい拳。

僕には美咲さんとその男のあいだに何があったのかはわからない。

でも、美咲さんと彼は繋がっていたのだと思う。

だからその輪郭を失って、戸惑っている。

「美咲さん」

「ん？」

「大丈夫ですよ」

「何を言う」

「また朝が来るんですから」

なぜだかわからないけど、そんな言葉が飛び出す。

言われた美咲さんは、ほうけたように僕を見る。

けど、ふふふと笑いだした。

「春坊のくせに生意気な」

「いてて」

今度はきつい拳をお見舞いされる。

でも、表情はいつもの美咲さんに戻っていく。

「春坊のばーか。そんなこと言うな」

「すいません」

「でも、なんだが悲しくなくなった」

ノビをしながら言う美咲さん。

「そうですか。良かったです」

「ああ、良かったよ。でも良くないこともある」

「え、それはなんですか？」

「春坊にお礼を言わなくはならないことさ」

「お礼？」

「そう、お礼だ。こんなこと言うのははずかしいから一度だけだぞ」

美咲さんが僕を見つめる。

「ありがとな」

そして美咲さんは、僕の頭をくしゃくしゃと撫でてきた。

2－14　美咲の料理（1）

美咲さんが直の料理を食べていくというので、家に寄ることとなった。
美咲さんは一度家に戻り、それから十分後に改めてやってくる。
なのでそのあいだ、僕は直の料理の味見をする。
直の作った料理は、一汁一菜、それと豚肉とレンコンの炒め物というシンプルなもの。
しかし直の手にかかれば、なぜか味気なくなってしまう。

「春、どう？」

直が期待を込めたまなざしで聞く。
でも、その期待に応えてあげられないのが悲しい。

「やっぱり味気ないな」

「そうなんだ」

しゅんと落ち込む直。

「でもさ直、食べられるんだからオッケーだよ」

僕はそう言うが、直は納得しない。

「私上手くなりたい」

「うん」

「それで春にもっと喜んでもらいたい」

そして直が、無表情でそんなことを言う。

「その気持ちだけでうれしいよ」

「ううん」

しかし直は首を振る。

「そんなんじゃだめ」

「だめじゃないって。料理が少しくらい上手くないのも愛嬌があっていい」

「ううん」

「ううんってさ。それでいいのに」

「そんなんじゃだめ」

結局、料理のことより、直をなだめる方が大変だった。

綾に触発されたのか、直は自分の料理の腕前に納得いかないようでとても悔しがっている。

それは美咲さんがやって来てもあいかわらずの姿勢で、彼女もびっくりしていた。

「どうしたの、直っち」

美咲さんはもうすっかり元に戻っていた。
いつものようにおちゃらけてさえいる。
さらには、カラオケ店でも生ビールを飲んだのに、ここでも缶を開けていた。

「どうも直は自分の料理に納得がいってないんです」

「そうなの？　直っち」

「ん」

「どれどれ」

美咲さんは、直が作った料理を食べる。
もぐもぐと咀嚼して、味を確かめている。

「うーん」

そしていつも直の料理を食べるときのように、首をかしげて感想を述べる。

「正直言うとね、直っちの料理はおいしいんだかおいしくないんだかわからない微妙な線をついてきてつっこみづらいんだよね」

「そうなの？」

直が無表情で聞く。

「そうそ。なんていうか、なにかが抜けているような感じでさ」

「それを味気ないというんじゃないですか？」

僕はすかさずつけ加える。

「そう。味気ないっていうんだな、これは」

レンコンの穴をのぞきこみながら美咲さんは言う。
やっぱりその結論になってしまう直の料理。
直が料理を始めてから、ずっと僕が言っていること。

「美咲。私、どう料理すればいい？」

直が美咲さんに料理のことを尋ねる。
こんなことは初めてであったので、僕は驚く。
つまり、それだけ切実に上手くなるのを願っている。

「どう料理すればいいって、やっぱり練習するしかないんじゃない？」

「直は練習してますよ」

「じゃあ、そうだな」

美咲さんは腕組みをして考える。

「よし、私が一肌脱いで手本を見せてあげることにしよう」

「ほんとに、美咲」

直が声を上げて喜ぶ。

だが、美咲さんの料理と聞いて、僕は逆に不安になっていく。

そしてその予感は現実のものとなった。

まず、直のエプロンを借りて冷蔵庫をのぞきはじめた美咲さんは、衝撃の一言を口にする。

「で、どうすればいいの？」

「美咲さん、大丈夫ですか？」

「ん？　何が？」

平然とした調子でつぶやく美咲さん。

直も無表情ながら心配そうな顔をしている。

「それで何をすればいいんだろ？」

美咲さんは何も考えていないような顔でさらに言う。

「そうだ。なにかリクエスト出してよ」

「リクエストですか？」

「うん。なんでもやってみせるぜ」

そんなことを言うが、もう美咲さんの料理には何も期待できない。
第一よく考えてみれば、足の踏み場もない美咲さんの部屋で料理なんてできるはずもない。
だから僕は、初心者でも出来るだけ問題なさそうな玉子焼きを指定した。

「オッケー。任せとけ、春」

美咲さんは威勢よく返事をすると、卵を冷蔵庫から取り出す。
しかし卵を取り出した段階で落としそうになっていて、料理なんてしたことないような感じのあたふたさを醸し出している。

「おっとっと」

「ちょっと美咲さん。本当に大丈夫ですか？」

おもわず声をかけてしまう。

「大丈夫だって。食べれないものなんてこの世にない」

もう不安で仕方ない発言だ。

「玉子焼きなんだから、焼けばいいのさ」

2－15　美咲の料理（2）

結局、美咲さんの玉子焼きはさんざんな出来で終わった。
直の料理の腕なんて比じゃないくらいにひどくて、卵を割る段階からたくさん問題が発生した。
塩や砂糖の加減も何度も間違えて、しまいには卵本来を味を楽しむということになってしまうくらいだった。
おかげで、卵を何個もムダにしたかわからない。

「どうだい、直っち。努力すればいつかは成功するのさ」

やっとのことで成功した玉子焼きを抱えて、美咲さんが自慢げに叫んだ。

「どんなごまかし方ですか」

しかし直は感銘を受けたようで、うんうんと何度もうなずいている。
一応、失敗から成功の過程を見ているおかげか、説得力はあった。

「ほら、二人とも食べてみなよ」

「ん」

直がいち早くうなずき、玉子焼きを口にする。

「ん。おいしい」

「ほら見ろ、春坊。調味料なんかいらなかったんだ」

「いいや、原則としてそんなことはないですから」

「じゃあ、食べて見ればいい」

美咲さんは箸を僕の目の前にかざす。

「これ、なんの真似ですか？」

「口開けてってこと。あーん」

「しませんよ。自分で食べますから」

「だめだ。春坊、食べるふりして食べない可能性がある。だからあーんしなさい」

「断わります」

目の前に広がっている光景は、よくカップルなどがやる行為。
だが、けっしてそんな甘い雰囲気ではない。
これは自尊心をかけた意地と意地の張り合いだ。

「口を開けなさい」

「いやです」

「じゃあ、鳥のエサみたいに放り込んでやる」

その言葉を最後にして、瞬時に戦闘へと変わった。
箸をのどに突き刺しそうな勢いで、美咲さんが迫ってくる。

危なくてたまらない。
だから僕は、必死でそれを避け続けた。

「くそ、おぬしなかなかやるな」

美咲さんが一度箸を置いて、気合を注入する。
僕はまだやる気なのかとうんざりする。
そしてそのときだった。

「美咲ばかりずるい」

なんと敵が二人に増えた。
直まで、自分の作ったおかずを挟んで箸を差し向けてくる。

「春」

「何、直」

「あーん」

「……」

直が切れ長な瞳で見つめてくる。

この瞳はすべてを見透かしてしまいそうな瞳だ。

「あーん」

「待って直」

「あーん」

全然話を聞いてくれない。

美咲さんは直の暴走を楽しんでにやにやしている。

いつのまにか自分が突撃するのを止めて、缶を片手にくつろぐ始末だ。

「春」

無表情の圧力をものすごく感じる。

「食べてくれないの？」

直が嘆願する。

「えっと」

僕はというと、これ以上ないくらい困惑。

目の前に向けられている箸の破壊力は、直に手を握られたときをも上回る。

「お兄……じゃなくて、春」

「はい」

「あーん」

やはりといっていいか、直の頑として譲らない姿勢は変わらない。なので僕はとうとう根負けして、直の箸のおかずの御相伴にあずかる。

すると、美咲さんが鬼の首でも取ったようにこっちを見てくる。

「やったね、春坊」

にやりと底意地の悪い笑い。

「直のあーんが食べられて、私のあーんが食べられないなんて言わせないぞ」

再び箸を持った美咲さんが、玉子焼きをつかんだ。

「さあ、行け。私の玉子焼き」

そして箸を目の前に出される。

「あーん、と」

「もうなんでもいいです」

「じゃあ、あーん」

「はい」

できるだけ意識しないように、美咲さんが出してくれた箸へとか

ぶりつく。

「おいしい？」

「おいしいです」

その言葉は本当で、卵本来の味がふわりと広がっておいしかった。

2－16　直の宣言

翌朝、今日も直に起こされた僕は、直のいきなりの宣言を聞かされた。

「春、これからは私が料理を作る」

「え？」

と、僕は驚く。

額に『努力』のはちまきをしている直。

なんだかとてもやる気に充ちあふれている。

なので、否定はできない雰囲気だ。

「春、私が料理する」

「でも」

「努力すればいつかは成功する」

力こぶしを込めるという似合わないしぐさで直が言う。

どうやら美咲さんの言葉を信じ込んだ直に死角はない。

「じゃあ、今までの当番制はどうするの？」

「私に全部任せて」

「弁当も？」

「ん」

今度も力強くうなずく。

テーブルの上を見てみると、トーストとサラダに目玉焼きといういつものメニュー。

この定番のメニューでも、直が作るとなぜか味気なくなる料理。

原因はわからない。

ともあれ、起きぬけの僕は顔を洗いに洗面所に向かう。

鏡を見て、これからどうすべきかを考える。

「春」

「ん？」

「早く朝ご飯を食べよ」

「うん」

言われた僕は、いそいで顔を洗いテーブルに向かう。

「いただきます」

「いただきます」

そしていつものように向かい合わせて食べはじめる。

直はまだはちまきを取っていない。『努力』の文字がなんだか僕に迫ってくるようで居心地が悪い。

なので僕は直に言う。

「直」

「何？」

「はちまき取らないの？」

「ん」

直はうなずく。

どうやら予想外にはちまきが気にいっているようだ。

「でも、学校へ行くときは外すよね」

「ん」

「そっか」

「でも、気にいっている」

直が無表情ながら嬉しそうにはちまきを触る。

努力、努力、努力。

文字が躍動する。

「そうだ」

「何、直」

「料理はどう？」

「料理？」

「うーん」

言われて僕はしぶい顔になる。
直の料理は変わらない。
根本的に味気ないのだ。

「だめ」

「だめじゃないよ、うん」

「うそ」

「うそじゃないって」

「ほんと？」

「うん。あ、スケッチ見せて」

これ以上目を合わせてられない僕は、ごまかすために直のスケッチに手を伸ばす。
中を開けば、屋上の風景から始まりいろんな場面が描かれている。
ぺらぺらとめくっていくと明らかにネコの絵が多くなっていった。

「直、最近はネコばかり描いているね」

「ん。私のまなネコ」

直が目を細めて言う。

どうやら上手く話題をそらせたようだ。

「近所にいたあのネコだよね」

「そう。もふもふしてかわいいやつ」

前に都立公園近くで見つけたまだらのあるネコ。

あの後も、直との邂逅を果たしていたのだろうか。

「あのさ、直」

「ん？」

「直は動物に好かれるよね」

「そう？」

「そうだよ」

そう、直はわりと動物に好かれる。

直の雰囲気がそうさせているのかはわからない。

けど、僕と比べてその違いは明らかに顕著であった。

「そうそう」

直が口を開く。

「私、勝手に名前つけた」

「名前？」

「ん」

「で、どんな名前？」

気になったので、僕は聞いてみる。

「ナマネコ」

「え？」

「ナマネコってつけた」

ナマネコ。

それはどういう意味なのか。

「意味？」

「うん、どういう意味？」

と、僕は聞く。

「名前に意味なんて必要ないよ」

と、直は答える。

2－17　ウノ（1）

昼休み。
いつものように購買のパンを求めにいった小倉くんが帰ってくる。
そして直と僕とが一緒に机を並べているのを見て、一言言う。
「今日は直がいるんだな」
「ん」
小倉くんは近くの席を借りて座り、指を折り数える。
「昼食のとき、兄妹が二週間ぶりくらいか」
「それくらいかな」
僕もつぶやく。
「そうだ、そうだ。前に直がいたときはスケッチを見せてもらったな」
「ん」
弁当を開け、昼食の準備を整える。

直と僕は中身が同じ。
今日の朝、直が料理をする宣言したため、直が作っている。
「やっぱり同じなんだな」
あはは、と笑いながら小倉くん。
「さて、じゃあ食べるか」
僕達二人はうなずく。
「いただきます」
「いただきます」
「いただきますっと」
「ところで直。今日はどうしたの？」
食べてる途中、僕は直に聞く。
「ん。綾が来るから」
「ん？　遠藤が来んのか。そしたら俺はここにいていいのだろうか」
パンをもそもそと口にしながら小倉くんが言う。
「いや、気を使いすぎだよ。小倉くん」
「でも、幼馴染のおまえはいいけど、俺なんかは遠藤みたいなお嬢

様がいると緊張してしまうんだよ」

確かに綾がうちのクラスに来るときは、小倉くんは一歩引く。
他のクラスメイトが騒ぎ立てるのを尻目に、彼は違った対応を取る。

「小平さんも来るよ」

「え、小平も来るのか？」

綾の親友である小平さんも来るという。
僕とのあいだに誤解があった小平さんとは、昨日関係がたいぶ改善された。もっとも、小平さんに新たなトラウマを植えつけてしまったけど。

「小平が来るのか。なら俺がいてもいいのかな」

というのは、小倉くんと小平さんが空手部で知り合いだからだろう。
僕とは違い、小倉くんと彼女の関係は良好だ。

「あ、来た」

直がつぶやき、僕達はそちらを見る。
ドアの前にいたのは綾と小平さん。

二人が満を持してうちのクラスに入ってくる。
そして二人の美少女がクラスに入ってきたことで、ざわざわとした空気ができあがっていく。

「春、直。来ちゃった」

目の前にはお嬢様のふりをした綾。

小平さんを引き連れて、ここの席までやってきた。

「今日は、真由が春を誤解していたとのことでどうしても謝りたいって」

「綾。私そこまで言ってない」

綾にひじをつく小平さん。

綾は上品に身をよじり、その光景を見たクラスの男子達が騒ぎ立てる。

やはり二人は注目を集めている。

綾だけでなく、小平さんも相当の美少女なだけあって注目度が高い。

「綾、座って」

直が言う。

「うん」

「真由も」

「わかった」

二人が座り、五人が班を作るような形になる。

並びは直が上座のような位置に座り、そこから左に綾と僕、右に

小平さんと小倉くん。

「私達もここで食べていい？」

「うん、いいよ」

綾が聞くので、僕は答える。

「もう先にご飯食べていたけどね」

こうして、五人で話をしながら昼ご飯を食べていく。
このとき、小平さんが僕に正式な詫びを入れたりして、へんに盛り上がったりもする。
そして昼ご飯を食べ終えて一息ついた頃、小倉くんがウノを取り出して言う。

「よし、二人の誤解もなくなったことだし、仲直りの印としてこれでもしようか」

「ん」

直がいち早くうなずく。

「私もやろうかな」

綾も賛同する。
一応、当事者である小平さんと僕。
もちろん反対するわけがない。

「ルールは大丈夫だよな。じゃあ始めるぞ」

カードを配り終えた小倉くんが親役のように仕切り、ウノがはじまった。

2－18　ウノ（2）

クラスメイトの喧騒をよそに、僕達はウノをこなしていく。
クラスメイトは綾と小平さん、それと直の三人が並んでいることで歓喜にわいている。

兄バカな表現だけど、直もクール系な美少女の範疇に入り人気がある。
なので三人がそろうと、とても眼福な光景が広がる。

「あーあ、また負けちゃったよ」

小平さんがカードを机に放り投げ、四回目の対決が終了。
もう三度目となるびり対決を制した僕は、大人げないと思いながらも控え目なガッツポーズをする。

「坂本、やっぱこいつはムカつく」

「真由、落ち着いて」

「いや。なんだか坂本の笑顔を見ているといらいらする」

「真由ったらもう」

綾が必死になってなだめるが、効果はなし。
一戦終わって最下位になっては感情をあらわにして負けを悔しがり、オーバーアクションを繰り返す。
でもそのオーバアクションが大きなあだとなって、プレイ中に作戦を読まれてしまう小平さん。

それに対して、感情をあらわにしない直は四戦連続一位。
完璧と言ってもいいほどの無敵の女王である。

「やっぱり直は強いな」

小倉くんが感心したように拍手する。

「それに比べて、小平は」

さらに肩をすくめて小倉くん。
相性がいいのだろうか。
二人は冗談を言い合える仲のようだ。

「なによ。私だって勝つときは勝てるわよ」

「いや、無理だな」

小倉くんが断言する。

「うん。真由には難しいかも」

「四回連続最下位だし」

綾も僕も言う。

すると小平さんが声を荒げる。

「もう一回。もう一回やろ。今度こそ坂本に押しつけて最下位を脱出するから」

「でも、もう時間ない」

直が冷静に指摘する。

あまりにも冷静すぎて小平さんがあっけにとられてしまうくらいだ。

「そうだな。時間ないな」

と、小倉くんも言う。

結局、ウノはここでお開きとなった。

「春」

そして隣に座っている綾が僕を呼ぶ。

「これ」

机の下で渡されたのは小さなメモ用紙。

「後で見て」

2－19　約束（2）

昼休みを終えて、五時間目の授業中。
この数学の時間はいろんな意味で忙しかった。

まず最初に綾のメモを見て、今週の日曜日の予定を確認。
メモには都立公園で待ち合わせと書かれてあり、そこから互いに申し合わせた格好をして街に出る予定となっている。

そう、綾と僕はいつもこの場所から出発する。
ここで着替えをして、近くの街に繰り出す。

「坂本春」

綾と出かけることを考えていたら、先生に問題を当てられた。
問題は難しく、なかなか答えが導き出せない。
僕がうんうん唸って考えていると、隣の席の吉田さんの声が聞こえてきた。

「さ、坂本くん」

どうやら僕を呼んでいるようだ。
さらに小声で話しかけてくる。

「ここの問題はこうだよ」

そう言ってノートを指し示す。
字はきれいでとても読みやすく、適切に解説してある。

「ありがとう」

お礼を言って、素早くその問題の答えをインプットする。
結果、この問題をなんとか乗り切ることができた。

「ふう」

一息ついて席につき、吉田さんに目配せでお礼。
いつも控え目で大和撫子な吉田さん。彼女にしてみれば、誰かに問題の答えを見せることは勇気のいる行為だったのだろう。

僕と目を合わせると、恥ずかしげに顔をふせてしまう。
おかげで僕も恥ずかしくなってくる。

だが、そんななかでも数学の授業は続いていく。
先生は、もう半年を切った高校受験についての説明を一生懸命している。
なので僕は、遅ればせながらもその説明に耳を傾ける。

けど、そのときに携帯のバイブが振動した。
ディスプレイの表示を見れば、一つ年下の絵里ちゃん。
メールがきていた。

『先輩、今大丈夫ですか？』

「大丈夫」

と、返信する。
しかしそれにしても不思議なのは、絵里ちゃんからメールが来るときはいつも数学の時間。彼女もこのときは数学の授業なんだろうか。
メールはこの後も続いていく。
『ありがとうございます。でも、大丈夫だと思っていました』
「そうなの？」
『はい、だって先輩ですから。それで用件なんですが、来週の土曜日のデートのことについてです。行く場所を遊園地に決めました』
「そっか」
『それでいいですか？』
「うん。いいよ」
遊園地といえば、幸いにもこの街の近くにある。
乗り継ぎを一回して六駅で着く場所で、小さい頃、綾のお姉さんの翠さんに連れられてよく行った。
直も綾もジェットコースターが苦手で、僕は翠さんとばっかり乗っていた。
直はまだしも、当時おてんばだった綾が乗れなかったのは意外だ。
『先輩、後、もう一つ伝えたいことあります』
「ん？　何？」

『秘密のデートってことを忘れないでくださいってことです』

「うん、わかってる」

『ありがとうございます。では、詳細が決まったら後ほど連絡しますね』

以上で絵里ちゃんとのメールが終了した。

2－20　待ち伏せ

授業が終わり、無事放課後。
僕は直と一緒に帰ろうと思ったが、直には用事があって一人で帰ることとなる。

直の用事というのはクラスの美術部員の助っ人。
絵の上手い直はしょっちゅう駆り出されている。

とはいうものの、直は夏まで美術部の一員。
なので、そんな感覚はないのだろう。

「さて」

小倉くんとも別れ、廊下に出て一人つぶやく。

「帰ったら勉強でもしようか」

そう、受験も近い。
もしかしたら秘密の遊戯やデートなんてしている場合ではなくて、勉強しなくてはならないのかもしれない。

いや、絶対にしないといけない。
そんなことを考えながら、昇降口で靴を履き替えていると綾が立

っていた。

「春、待ってた」

「綾」

「待ってなくてもいいけど待ってあげたんだから」

近くに人がいないせいかお嬢様モードは封印している綾。
でも、いつもの綾らしさに僕は安心する。

「で、ぼーっとしていたみたいだけど何考えていたの？」

綾が僕の顔をのぞき込んで聞いてくる。
あどけない綾の顔が近くにあって、僕は困惑しながら言う。

「勉強しなくてはいけないなあって考えていたんだ」

「勉強？」

「うん」

「そんなの当たり前でしょ。受験生なんだし」

「そうなんだけど、最近どういうわけか全く頭になかったんだ」

「だめじゃない、春」

「うん」

「うんって。もう、ほんとに春はばかなんだから」

その言葉に僕はたくさんの言い訳を言い募ろうとするが、綾の機嫌が思いのほか良さそうだったので言い止めた。

昨日電話をくれたときは、あまり元気がなかった綾。

どうしてここまで機嫌が良くなったかはわからない。

けど、綾の機嫌が秋の天気のように変わりやすいことは知っている。

「春、今度家で勉強する？」

「え、綾の家？」

綾の家といえば、探検をしたら迷ってしまうくらい広い家。

「うん。直と一緒にどう？」

「いいと思うよ」

「直に聞いてみて」

「うん。わかった」

と、僕はうなずく。

「そういえば、春」

「ん？」

「今、直は一緒じゃないの？」

「うん。一緒じゃない。直は美術部の助っ人に貸し出された」

「へえ。そうなの」

直がいない理由を綾が納得する。

しかしその後の綾は、なんだか様子がおかしい。

極端にまばたきの回数を増やし、手をわさわさとしはじめる。

「じ、じゃあさ、春。えっとこれからね」

「うん？」

「い、い、一緒に」

「綾、なんで急にどもりだすわけ？」

「うるさいな」

ばしっと背中を叩かれた。

うめきながら僕は言うが、綾は聞く耳持たず。

「なんて理不尽な」

「ほら、春。帰るよ」

ずんずんと進んでいく綾の後ろ姿を見つめて、僕も歩を進める。

2－21　テイク1

きれいなイチョウ並木を通り、綾とはバス停の前で別れる。
そして僕はいつもの坂を下っていき、東風荘にたどり着く。

「春坊～」

「……」

「春坊ってば～。無視しないでくれ～」

それで家の中に入ろうとしたところで、美咲さんを発見。
まだ夕方にもなっていないのに、酔っぱらっている。

「で、どうしたんですか？」

「私専用の超高級ミネラルウォーターが坂本家にあって、それが飲みたくて」

「いつのまに入れたんですか」

僕は文句を言うが、美咲さんはそれどころじゃない様子。

「そんなふりはいいから早く飲ませてくれ」

そんなことまで言ってくる。
しょうがないので、鍵を開けて家の中に美咲さんを招き入れる。
すると美咲さんはダッシュで冷蔵庫の前に行き、ミネラルウォーターを飲みだす。
ごくごくごく、といい飲みっぷりで、ミネラルウォーターはみるみるうちに無くなっていく。

「ふー生き返った」

美咲さんが一息ついて言う。

「そんで春坊、直っちはどしたの？」

やはり酔っぱらっているのか、声のトーンがいつもより高い。

「直はまだですよ」

「へえ」

「美術部に駆り出されたから帰ってくるのは遅いと思います」

「そうなんだ」

ニヤッと笑う美咲さん。
確信ともいえるくらい嫌な予感が満ちてくる。

「それなら春坊」

言いつつも、つつーっと身体をなぞってくる。

「お姉さんといいことしちゃう？」

生々しくしなだれかかってきて、目と目が合う。

へんな沈黙が生まれて、対応に困惑する。

「み、美咲さん。そんなキャラじゃないでしょう」

「だよなー。あはははは」

今度は豪快に笑う美咲さん。

僕は完璧にもて遊ばれているのに、本人にはあまり美人である自覚がないから困る。

「私に色気ってもんがあれば」

「十分ありましたって」

「ほんとか？　うそつけー」

しょうがないので、美咲さんが美人であることを必死に告げる。

「なに真顔でしょうもないこと言ってんだ？　春坊」

「美咲さんが言わせたんでしょう」

「いいやそんなことはないな。オマエの負けだ」

何が負けだか知らないけど、美咲さんはそう言い放つ。

ほんと、何が何だかわからない。

要するに、酔っぱらいの思考回路を読むことなど、そんじょそこらの凡人にはできやしないのだろう。
黙って返事をしていれば、それでいい。

「だから、罰として私が理想とする告白シーンを演じてもらう」

「はい。えっ？」

「あ、今はいって言ったな」

「はい。って、えっ？」

なんだかへんなことになりつつあるのを自覚する。
なのでそれはそれで困る。

いや、プロレスの技なら鳥子さんに教えてもらった秘儀のツボで回避可能か。
僕は頭の中でどうすればいいのか算段する。
けど、美咲さんが目を輝かせているので、結局諦めてやることにした。

「夕日。公園。ブランコ。漕ぐ私。出来る二つの小さな影。オレオレ系な先輩が謝りながらの告白。恥ずかしさを突き放すような感じ。でも、本当に好きだと表現が言葉で入っているように」

「……」

突然で、僕は言葉が出ない。

「どったの？　春坊」

「そのお題はなんですか。わけわかりません」

そう言っても美咲さんはきょとんとした表情。

わからないと言われても、全然懲りていない。

「まあ、いいからさ」

「そんな」

「とにかく、始めようぜ」

僕の肩をぽんぽんと叩く。

そして自分の設定した情景でも思い浮かべているのか、目をつむっている。

「さあ、始めっ！」

「え？」

「始めっ！」

しょうがないので、美咲さんがいた言葉を思い出しながら声色を変えて言ってみる。

「美咲、オレ、オマエのことが好きだせ」

ここまで言って困惑する僕。

言葉が出てこないし、あまりの似合わなさに自分で吹きそうにな

る。
でも、なんとかこらえて言葉を繋げる。
「オマエさぁ、オレについてこいよ。なぁ、美咲。ついてこないと言わせねぇからな」
もう限界だ。
なんだかよくわからないリミッターが振りきれている。
「お、終わりです。美咲さん」
僕はぜえぜえと息をしながら告げ、美咲さんが目を開ける。
「いいかも、これ」
「そうですか？」
「うん、良かったよ」
あんなのが良かったなんて、到底そうは思えない。
けど、酔っぱらっている美咲さんが満足できたのならめでたしだ。
「よし、今のがテイク１ね」
「え？」
「だから、テイク１」
「そんな」

それは悪魔のささやきだった。

「やらないと暴れるぞー。この部屋を私の家並に汚してやるからな」

子どもみたいに騒ぐ美咲さん。

「あー現実世界に帰してください」

と、僕はこっそりとつぶやく。

2―22　ネコミミ

夕刻、直がようやく帰ってきた。
鍵を開ける音とともに、僕は救いを求める。

「直、助けて」

「春？」

急いでドアの方に向かい、直がドアを開くのを今か今かと待ちわびる。
すでにあれから一時間。

すっかり美咲さんのおもちゃとなっていた僕は、心身ともに疲労困憊。
何パターンものわけのわからない告白の場面をやらされていて、正直うんざりしていた。
だから、直の帰還は救いでもあった。

「直」

「春、どうしたの？」

直が焦っているのか、鍵がなかなか開かない。

ガチャガチャと金属音が鳴り響き、取っ手が激しく動く。

「直、落ち着いて」

「ん」

「でも急いで」

「うん」

背後からは千鳥足の美咲さんが迫ってくる。
美咲さんに捕まったら、プロレスの技をかけられるのだろうか。
それはいろんな意味で対処の仕方に困る。

「開いた」

直がいつもより幾分大きな声で言い、ドアが開く。
そして直と目が合い、僕は愕然とする。

「直ー」

「何？」

「それどうしたの？」

「お礼にもらった」

僕が愕然としたのは、直がネコミミをつけていたこと。
ついさっきまで、ネコ語での告白をやらされたせいで二重にへこんだ。

「そうじゃなくってさ、なんで付けてるの？」

「なんとなく」

「なんとなくって」

「ううん。ネコの気持ちになりたくて」

またしても言葉が出ない。

しかし、ネコミミを装着している直は、なかなかに魅力的だ。

いつもの直の無表情さとマッチしていて、神秘的な雰囲気を醸し出している。

「それでずっと付けてきたの？」

「ん」

僕は頭を抱える。

そしてその最中に僕へと追いついた美咲さんが、直を見て騒ぎ立てる。

「なにそれー。かわいい」

直にくっつく美咲さん。

「直っち、直っち」

名前を連呼し凄い勢いで抱き寄せる美咲さんに、直も少々居心地が悪そうだ。

「これ、やばいって春坊」

「なにがですか」

「かわいさの破壊力高すぎ」

たしかに美咲さんの言うことはもっともである。

一度離れた美咲さんは、改めて直のネコミミを眺めまわす。

「直っち」

さらに手を合わせて合掌。

「眼福、眼福だー」

なんだかとても親父くさい。

でも、結果として美咲さんの気をそらせたから良かった。

「あ、そうだ」

美咲さんがぽんっと手を叩く。

「直っち」

「ん？」

「一つお願いがあるんだけど」

「何？　美咲」

「にゃーって言ってくれない？」

「え？」

無表情ながらも困惑する直。

それは少し見てみたい気もするが、さすがにやらないだろう。

しかし美咲さんは、なおも要求を増やしていく。

「こうさ、手を前にして。そう、要するにネコのポーズをしながらさ。どう？」

直は手をあごに当てながら考え込んでいる。

「美咲」

「ん？　どしたの？」

「私、それやるとネコの気持ちになれる？」

「うんなれる。きっとなれるよ」

サムアップまでする美咲さん。

「ほんと？」

疑わしそうな目で聞いてくる直。

「ほんとだって。私もネコになりたいときはそうしてるから」

「そんなこと一度たりともないでしょ」

と、僕がすかさず言うが、美咲さんがにらみつけてくる。

さらに美咲さんは、ポケットから携帯を取り出し言う。

「春坊。さっきのネコ語での告白、携帯に録音しといたから。これ、とっておいてもいいんだよ」

「すいませんでした」

「じゃあ、直っち。やろうか」

「ん」

直はこくりとうなずく。

そして手をネコのポーズにする。

「にゃー」

さらにもう一回。

直がかわいらしく鳴く。

「にゃー？」

「きゃー鳴いた。直が鳴いたよ。かわいい」

歓喜にわく美咲さん。

やはりとてつもない破壊力だ。

けど、僕はいつ現実世界に帰してもらえるのかをもうずっと考えていた。

2―23　散髪

美咲さんが帰った後、直はネコミミを外し、『努力』のはちまきをつける。
そして宣言通り料理を作り、僕達はそれを夕飯にする。

直の料理はいつもの出来と変わりなく、これまたいつもと同じようなやりとりをして夕飯を終える。
それから直が入れてくれたお茶を飲み、テレビに目を移す。

テレビはちょうどニュースがやっていて、この都心から離れた小さな市街の髪切り事件を念入りに分析。被害者は三十人を超えたのことで、くれぐれも気をつけてくださいと喚起がなされていた。

「直」

「ん？」

「そろそろ銭湯に行かない？」

「ん。でも春」

「何？」

「その前にやっておきたいことを思いついた」
直は雑貨が入っているタンスから、ハサミを取り出す。
「髪、切ろう」
「え？」
「髪」
伸びきっている僕の髪を見て、直がもう一度言う。
「まあ、切ってもいいけど。でも、そんなに僕のことを心配したって無駄だよ」
しかし、直は首を振る。
「ううん。そんなことない」
「そんなことなくないよ。だって、僕は男だし」
「だから、逆上して傷害行為に走るかも」
「そういう考え方もあるのか」
「ん」
僕は変に納得し、直はうなずく。
けど、僕だって直のことが心配だ。
その豊かな黒髪は直の魅力の一つで、もし切られでもしたらとて

も悲しい。

「春、準備」

「わかった」

直がハサミを持ってこっちにやってくる。

「後、必要なものは」

と、直が聞く。

「くし」

「霧吹き」

この二つを準備する。

「それと首に巻くやつ」

「ん」

直が洗面所に行って取ってくる。

「直、首に巻くやつの正式名称はなんていうんだと思う?」

「わかんない」

やがて直が首に巻くやつを持ってきて、準備が整う。

僕は適当なイスを準備して座り、直がハサミを入れてくれるのを

待つ。

「春、どう切る？」

「おまかせで」

「いつもそう」

「だって直は上手いから」

そう、直は料理以外ならなんでも器用にこなす。
髪を切るのだって、絵を描くための繊細な筆使いに比べたらたいしたことないに違いない。

「まずは、霧吹き」

シュ、シュと心地よい音。
髪が霧吹きによって濡れていく。
これから髪を切るであろう期待感が芽生えてくる。

「次、くし」

直の手櫛とともに、くしが髪に入る。

「直はくしでとくの上手いね」

「そう？」

「うん」

「じゃあ、切るね」

「オッケー」

切れ長の瞳が髪の毛先を見つめ、じょきりとハサミが入る。

ハサミは、肩まである僕の髪をバッサリと切っていく。

「切りすぎた？」

「ううん。そんなことないよ」

「そう。良かった」

「直、この調子で」

「ん」

やがて二十分が経過して、直の手が止まる。

「完成」

直が持ってきた手鏡にはさっぱりとした僕の姿がうつる。

「完璧だよ。直」

「ん」

「ありがとう」

僕がそう言うと、直は無表情ながらも若干笑みをこぼす。

「頭軽い？」

「うん」

僕はうなずく。

「でもさ、直。ほんとは順序逆だよね」

「どういうこと？」

「ほんとはお風呂に入った後切るもんじゃない？」

「あ、そうだね」

3－1　遠藤　翠

今日の天気は快晴。
傘いらずで洗濯物がよく乾く。
そんな予報を、綾の姉でもありお天気お姉さんでもある翠さんがテレビで言っている。

「直、翠さんが出ているよ」

「ん、翠」

改めてテレビに注目する僕達は、翠さんのさわやかさに元気をもらう。
翠さんは、アナウンサーとやりとりをしながら、天気の説明をてきぱきとこなしていく。

「それよりも直」

「ん？」

市販のラスクをほおばりながら、直が首をかしげる。

「翠さんがお昼の枠から朝の枠になったの知ってた？」

「知ってた」

「いつから？」

「結構前」

「へえ、そうだったんだ」

「うん」

直の生返事を聞きながら、僕は翠さんのことを考える。
綾の姉の翠さんは二十二歳で、泣きぼくろが印象的な美人だ。

小さい頃、僕達はとんとお世話になった。
よく街外れの高台に連れて行ってもらい、わがままを言う子ども達の相手をしてくれた。

「そういえばさ、直」

「どうしたの？」

「綾と翠さんってあまり似てないよね」

「ん」

直も納得するとおり、綾と翠さんはあまり似てない。
もちろん、歳が離れているのも前提としてある。
けど、綾が成長したら翠さんのようになるかと言われればそうではない。

「春」

「ん？」

「綾は綾、翠は翠。人それぞれ皆違うはず」

直が真理を説く。

でも、そこで僕はあることを閃く。

「ただ、僕達の外見はかなり似ているよね」

「ん」

「どうしてだろう」

「神様がなんとなくそうしたんだよ」

優しげな声色で直が言う。

「ふーん」

そうして会話が途切れ、僕はまたテレビに目を移す。

すると今度は、週末の天気予報をやっている。

「そう、ふーんって感じで」

「そっか」

翠さんが言うには、週末も快晴で天気は崩れない模様。

しかし最後の締めくくりに、秋の空は女心のように変わりやすい

のでカサを持ち歩くようにしましょうとの喚起がなされた。

「あのさ、直」

「何？」

「僕、土日出かけるから」

「ん。わかった」

直は無表情でうなずく。

そこからは特別な感情が何もない。

「土曜は絵里ちゃんと。日曜は綾と」

「二つともデート？」

「え？」

その言葉を聞いて、僕はしまったと思う。

そういえば絵里ちゃんは、今回のことを秘密のデートだと言っていた。

「ううん。違うよ」

「そう」

「二つともデートとはまたちょっと違うもの」

なので、なんともつかない言い訳をしてしまう。

そんな僕を見て、直は言う。

「気をつけてね」

「うん」

と、僕は答える。

3－2　綾の苦悩

三時間目の数学の授業中。
綾から一通のメールが届く。

『春、大事なお願いがあるんだけど』

「何？　綾」

と、僕はすかさず返信。

『今日の放課後、直と一緒に屋上の給水タンクに隠れて私を見守ってほしいの』

「わかった」

もちろん、この内容の意味は知っている。
これは綾が男子に告白されるということ。

前回から、まだ一週間くらいしか経っていない。
それなのに、またいつもの儀式が始まる。

「……」

僕はなんだかな、と思って、教室中を見渡す。
すると、前に数学の問題をこっそり教えてくれた大和撫子な吉田さんと目が合う。
しかし吉田さんは、僕と目が合うと赤くなってうつむいてしまった。

どうしたのだろう。
僕にはわからない。

やがて、数学やその他の授業も終わり、放課後がやってくる。
綾の要請を受けた直と僕は、示し合せて屋上に向かう。そして、いつもの給水タンクに身を隠す。

十分ほどして、綾と知らない男子が屋上に到着する。
案の定、その男子は告白し、綾がその申し出を慎重に断る。
そして男子がこの場を去り、僕達は綾のところに行く。

「綾、見ていたよ」

「うん。ありがとう、春」

「いいよ、綾」

「いや、いつもありがとう」

綾がもう一度礼を述べる。
この時ばかりは、いつも素直な感じになる幼馴染。
さすがに僕も学習した。

「そして直もありがとう」

「ん」

「私はその人のためにも、好意が受け入れなかった場面を忘れるわけにはいかないから」

「綾、またそのセリフ」

直が綾を抱きしめる。

これも定番となった光景。

けど、僕はやっぱりどこか外れた視点で見ている。

「綾、元気だそう」

直が励ましの言葉を送る。

「うん」

それに綾はうなずくなか、僕は勝手に思う。

綾には早くお嬢様という猫かぶりを解いてほしい。

いつものように、活発でわがまま。じゃじゃ馬であれこれ命令してきても構わない。好き勝手し放題で怒りっぽくても構わない。

だから、綾。

君には君のままでいてほしい。

僕には綾との秘密の遊戯をする以外、何も手助けはできない。

けど、こうやって苦しんでいる今の姿を見るのは忍びない。

「綾」

「何？　直」

「雲の形でも見てれば元気が出るから」

「雲の形？」

直の言葉を聞いて、不思議そうに首を傾げる綾。

「ん。雲の形はどんどん変えていくから見ていて飽きない」

「そうみたい」

「心の形も同じ」

直が悟ったように言う。

「じゃあ、私の心の形もどんどんと変えていくのかな」

「そうだよ、綾」

直が切れ長の瞳で綾を見つめ、深くうなずく。

「だから始まらないストーリーもね」

一呼吸置く直。

「きっと変わっていくはず」

3－3　寄り道（1）

屋上を出て、あいかわらず車の往来が多いイチョウ並木を三人で進んでいく。

一週間前、同じように三人で歩いたときに比べると、イチョウはだいぶ落葉している。きれいなイチョウの葉も、足元にあれば人に見向きもされない。

だから、若干感傷的になっている僕は、一つだけ鮮やかなイチョウの葉を拾う。

その行為に理由はない。

ただ拾うだけ。

拾ってトートバックのポケットに入れる。

「――だからね、直」

前方では直と綾がおしゃべりをしている。

綾は、一応元気を取り戻したみたいだ。

「春、何ぼーっとしているの？」

気がつくと、綾が後ろを振り向いていた。

そして僕を見ている。

「あー、春ってば、また勉強のこと考えていたんだ」

「ううん。違うよ」

「じゃあ、何」

と、綾がつぶらな瞳をこっちに向けながら聞く。

「綾のことだよ」

「え？」

綾はなぜか頬を染めていく。

「あ、特別な意味じゃないけどさ」

「だったらどういう意味？」

今度は柳眉を逆立てる綾。

何だかあまりよくない気配がしたので、綾から目をそらす。

そうして結局、のらりくらりと綾の詰問をかわし、都立公園の入り口までやってくる。

今日は都立公園にある屋台で、クレープとたこ焼きを食べる予定だ。

「あ、クレープ屋あった」

直と綾がクレープ屋を見つけてかけていく。

「じゃあ、僕はたこやき買ってくるね」

「ん」

直の返事を聞いて、僕はたこやきが売っている屋台に行く。

「すいません」

「はいよ」

現れたのはいかにもな感じのおじさん。
坊主頭にはちまきをしている。

「たこやきを一パックください」

「よし、まかされた」

愛想のいいおじさんが出来たてのたこやきを作っていく。
そしてそのたこやきをパックに詰め、僕に手渡しをする。

「じゃあ、三百円ね」

「はい、わかりました」

おじさんにお金を渡し、ベンチへと向かう。
直と綾は、まだクレープ屋の前で並んでいるようだ。

僕は辺りを見渡し、明日と明後日とのことについて考えてみる。
明日は絵里ちゃんと遊園地。
明後日は綾との秘密の遊戯。

ともすれば、いろいろと考えてしまいがちになる。
けど、物事は深刻に考えすぎないようにすることが大切だ。
そのことと自分とのあいだに、しかるべき距離を置くことも大切になる。

「春」

「あ、直」

まずは先に、直が戻ってきた。

「ピース」

「ピース」

直がVサインで言い、僕も同じように返す。

「綾は？」

「もう少し」

直の言うとおり、すぐに綾が来る。

「ピース」

「ピース」

そして直のときと同じようなやりとりをする。

「春はたこやき買ってきた？」

「うん、買ってきたよ綾」

「普通の？」

「普通の」

綾がたこやきのパックをのぞくので、僕も一緒になって見る。
きれいに並んでいる姿を見て、なんだか授業中の僕達が教室にいるみたいだなあ、とへんな感想を抱いてしまう。

「で、綾。一個いる？」

「いいの？」

「だって欲しそうにしているから」

「私欲しそうにしてた？」

はずかしそうな綾。

「うん。だからあげるよ」

「ありがと。でも、先にクレープを食べるね」

綾がとろけるような笑みを浮かべる。
そしてその後、少し戸惑ったように口を開く。

「えっと、春」

「ん？　どうしたの？」

「わ、私のクレープも少し食べる？」

「あ、じゃあ少しもらうよ」

僕がそう言うと、綾に得意げな顔になって言う。

「じゃあしょうがないなあ。特別にあげるんだからね」

3－4　寄り道（2）

小さい頃、僕達は綾の姉の翠さんにいろんなところへと連れてってもらった。
たとえば、この街の高台や六都科学館といった地元どころ。たとえば、海や山、行楽地といったちょっと遠いところ。

すべては良き思い出なのだが、その中の一つに地元の祭りもある。
今でも毎年夏になると必ずそこへ行く。
去年も三人で夏祭りを楽しんだ。

では、今なぜそのことを思い出したのか。
それは綾が、たこやきを見てこんな発言をしたからだ。

「春、ふーふーして」

そのとき、僕は一度自分の耳を疑った。
そして綾を見て言った。

「綾、それはないって」

「えっ？」

綾は自分が何を言っていたのかわからないという表情。

やがて、自分の無意識の発言に気がついたのか、顔をまっかにする。

「間違えたの」

そしてその後の反論の勢いがすごかった。

「小さいときに春が熱をさましてくれたでしょ。だから、そのなごりの口癖がふいにでちゃったの」

というのは、小さい頃、僕は直によく熱いものをさまさして食べさせてあげていた。

直は猫舌で、わがままなお姫様だったので、僕がしょっちゅう手伝っていた。

特にそれが顕著だったのが、夏祭りの時だった。

「なんか文句ある?」

「いや、ないけどさ」

「ふとそういうことってあるでしょ。あるよね?」

「まあ、綾が言うならあるかもね」

僕はおざなりに言う。

「ほら先生に向かって、お母さんっていうようなもの」

「そうかな?」

「そうよ」

綾はそう言うが、話せば話すほどドツボにはまっている気がする。

「ほんっとにもう。さらりとながしてくれたっていいじゃない。春のばか」

「いや、それは無理だよ」

「じゃあ、今度からはさらっと流しなさい」

「はい」

綾が腰に手を当てて命令するので、僕は反射的に返事をする。

しかし、どうしてこうも綾のペースになるのか。

原因は綾の方にあるというのに。

「春」

「何？」

「なんか不満そうだし」

「そんなことないよ」

けど、なんだかもやもやもやした気持ちだったので、不意を突いて綾のクレープにかぶりつく。

「あっ、春」

すると綾が驚いたように声をあげる。

「ん？　食べ過ぎた？」

「そうじゃなくって」

「え？」

「そこ、私が」

「あ、ごめん。食べようとしていたところ？」

「だからそうじゃなくって、口つけたところ。か、間接キスだぁ」

「え、聞こえないよ綾」

なぜか綾は、ごしょごしょと小声でしゃべっていて聞こえない。
その後、綾は僕が食べた部分を見てにらめっこしたり、顔赤くしたりと大忙し。

そんなに大事な部分だったのだろうか。
とりあえず、僕は謝ることにする。

「ごめん、綾」

「あ、うん」

いまだに顔が赤い幼馴染。
また、最近多くなったあれがやってくる。

綾と僕とのあいだに微妙な空気が流れだすのだ。
しかし、その空気はすぐなくなっていく。

「あ、ネコ」

そう、あのまだらのネコのおかげ。
そして、それまでずっと黙ってぼんやりしていた直がぽつりとつぶやく。

「スケッチする」

「スケッチ？」

「ん」

直は徽章のある胸ポケットからメモ帳を取り出し、クレープを口にくわえながらスケッチを開始する。

「春、見て。直がすごい」

綾の言うとおり、直はものすごい集中力で描いていく。
スピードもさることながら、細部まで綿密にこだわっている。
直の特徴でもある写実的な技巧が存分に出ていた。

「早い、早い」

綾がますます感心する。

「てか、危ないよ」

「ん？」

「クレープ落ちるって直」

「ん。大丈夫」

がぶっとくわえなおす直。

先に食べてしまえばいいのに、と僕は思う。

けど、そう考えているうちに直の手が止まった。

「完成」

「できた？」

「うん」

「じゃあクレープを食べる」

「ん、わかった春」

直がクレープを食べていく。

「やっぱすごいな、直」

綾が感心したように褒め、直は無表情で誇らしげになる。

「私も絵、習おうかな」

「ほんと？」

「ほんとって何よ、春」

「いや、だってさ」

前に一度見たことがある。
綾の壊滅的だった絵を。

「でもね、春。私だって努力すればできるはずよ」

思い出したのは『努力』のはちまき。

「そう、努力」

直も思い出したようで何度も努力を繰り返す。

「それに私は仮にもお嬢様だし、絵くらい人並みに描けないといけないんだから」

3－5　遊園地（1）

土曜日。
予報どおり天気は快晴で、行楽日和である。
今日いつもより早く起きた僕は、遊園地に行く準備を整える。そして直の作った朝ご飯を食べ、八時半に家を出る。

「いってくるね、直」

「いってらっしゃい、春」

絵里ちゃんとの待ち合わせは駅のモニュメントの前で九時。
なので、僕は十五分前にたどり着く。

けど、すでに絵里ちゃんがいる。
絵里ちゃんは雑踏に紛れることもなく、僕が見つけられる場所に立っていた。

「先輩」

「あ、絵里ちゃん」

小走りで寄ってくる絵里ちゃん。

瞳がきらきらと輝いている。

「おはようございます」

「おはよう」

「もう先に来ちゃいました」

「うん、もういるとは思わなかったよ」

僕達は笑顔で言葉を交わす。

「ところで先輩」

「何？」

「今日の私の格好どうですか？」

言われて絵里ちゃんの格好を改めて見る。

「森にいそうな格好だね」

「はい。これ、私の一張羅です」

「似合っているよ、絵里ちゃん」

「あ、ありがとうございます」

人懐っこい笑みを浮かべて、満足気な表情を浮かべる。

「そういえば先輩、髪切ったんですね」

「あ、うん」

と、僕はうなずく。

「さっぱりしましたね」

「そうみたい」

「私はどっちも好きですけど、今の長さの方がもっと好きです」

「そっか」

「はい」

「ありがとう、絵里ちゃん」

「いえいえです」

絵里ちゃんがはにかむように言う。

「じゃあさ、そろそろ行く？」

僕は駅の方面を指差す。

「あ、ちょっと待ってください」

「ん？　どうしたの」

「まず、ここで写真撮りたいんです」

「ここで？」

疑問に思ったのでおもわず声をあげてしまう。

「はい」

絵里ちゃんは自分のウエストポーチからカメラを取り出す。
カメラは年季の入った代物で、どこか高級そうな感じがする。

「これ、おかあさんから借りてきたものなんです」

「そうなんだ」

「それでは、ためしに一枚いいですか？」

「いいよ」

すると絵里ちゃんが、いきなりカメラを構える。
しかし、ほんとにここでいいのだろうか。
バックに写っているのは駅前の『涙を集める人』のモニュメント。

「あ、絵里ちゃんは映らなくていいの」

「いいんです」

「そうなの？」

「はい。秘密のデートなんですから」

「え？　それ関係ないんじゃ」

「いいんですよ、先輩。それではいきますね。はい、チーズ」

絵里ちゃんの掛け声とともに、僕は適当なポーズをとる。

けど、きっとその写真は必要以上にかしこまってうつっているはずだろう。

写真写りの悪さは幼い頃からずっとだ。

「先輩、ありがとうございました」

絵里ちゃんが頭を下げて礼を言う。

「あ、うん」

「じゃあ、行きましょうか」

「そうだね」

そして僕達は券売機のところへと向かう。

3－6　遊園地（2）

ホームの待合室のベンチに座って電車を待つ。
そのあいだ、僕達は今日の予定を話し、明るい展望に心を弾ませていく。

「それで先輩、まずはジェットコースターに乗りましょうね」

「ジェットコースターから？」

「はい。あ、先輩。ジェットコースターは大丈夫ですか？」

「大丈夫だけどさ」

ジェットコースターには乗れないこともない。
けど、順序として間違っているのかもしれない。

「先輩先輩」

僕がそう考え込んでいると、絵里ちゃんが腕を引っ張ってくる。

「電車が来てますよ」

「ほんとだ」

「早くいかないと、閉まっちゃいます」

「急がないと」

僕達は、慌てて電車に飛び乗る。
電車はプシューと音を立てて、扉を閉めていく。
どうやら間一髪間に合ったみたいだ。

「危なかったですね」

絵里ちゃんがほっとしたように一息つく。

「そうだね」

と、僕も同じように一息。
顔を見合わせて笑い合う。
そしてお互いに同じようなことを言う。

「先輩がぼーっとしていたから」

「絵里ちゃんがおしゃべりに夢中だから」

思わぬ責任のなすりつけ合いに、また顔を見合わせて笑う。

「まあ、ともかく、乗れてよかったよ」

「そうですね」

「しかも座れたし」

「はい」

車両は、休日のせいなのか人が全然いない。
まばらだという表現がぴったしなくらい人数。

電車はガタンゴトンと心地良い音を鳴らしながら、小刻みに左右に揺れている。
その揺れは胎内にいた頃を回帰させるリズムだと言われるが、僕にはわからない。

「絵里ちゃん」

「なんですか？」

「この電車の音ってさ、母親のおなかの中にいたことを想起させるっていうけどどう思う？」

「え？」

絵里ちゃんが驚いてこっちを見る。

「先輩ってそんなことを考えたりもするんですか」

「考えたりもするよ」

「そうですか」

「それでどう？」

僕はもう一度聞いてみる。
すると絵里ちゃんは、少し考えた後でこう言う。
「私にはわかりません。でも」
「でも？」
「なんだか電車の中は安心しますね」
「そっか。僕もだよ」
「そうなんですか？　じゃあ同じですね」
絵里ちゃんが嬉しそうに笑う。
「あ、それよりも先輩」
「何？」
「外見てください」
「ん？　何かあったの？」
「いえ。景色がきれいです」
車窓に写る景色を見て、絵里ちゃんが喜ぶ。
もう何度も見ている景色だけど、絵里ちゃんは体をのけぞらしてまで見ている。
「なんか子どもみたいだよ」

「何言ってるんですか、先輩」

「え？」

そして絵里ちゃんは真顔で言う。

「私も先輩も子どもですよ」

3－7　遊園地（3）

六駅はほんとにすぐだった。
十五分かそこらで目的の駅に着いた僕達は、電車から降りて改札を出る。

久しぶりにこの場所に来たのでお互いに道がわからなかったが、案内の看板や人の波などを利用しながら遊園地にたどり着く。

そしてフリーパスを買って、入口のゲートをくぐる。
そしたらもう、そこは別世界だ。

「わー」

と、楽しそうな絵里ちゃん。

「まさしく遊園地だね」

「はい。この感じ久しぶりです」

絵里ちゃんがその場で一回転して喜びを表す。
すると、フレアのスカートがふんわりと揺れる。

「早く行きましょうよ、先輩」

「はいはい」

絵里ちゃんは僕を先導するように引っ張っていく。

「それで先輩。どうします？」

「ん？　何が？」

「やっぱりしょっぱなからジェットコースターでいきますか？」

にやりと含み笑いをする絵里ちゃん。

「いや、その前に園内を隈なく歩き回ろうよ」

「歩き回る？」

「うん。どんなアトラクションがあるか確認したいからね」

「そっか。それ、いいですね」

納得顔の絵里ちゃんがうんうんとうなずく。

「先輩、頭いいです」

「そう？」

「はい」

「でも、そんなことは言われたこともないけどさ」

「そんなことないですよ。先輩は地味に賢かったりもします」

「地味に賢いとは、またわかりにくい」

僕がそう言うと、絵里ちゃんはくすりと笑う。

「地味っていうところがキモなんですよ」

「そうなの？」

「はい、そうです」

結局、そんな話をしながらも僕達は適当に進んでいく。

道なりに沿って進んだり、好きなところで右に左に曲がったりだ。

左右を見渡せば、いろんな種類の乗り物がある。乗り物だけでなく、おみやげ屋さんやゲームセンターなんかもあった。

「よし！　これで私、どこになにがあるかを大体覚えました」

「す、すごい記憶力だね」

「そんなことないですよ」

「いや、すごいよ」

僕は素直に感心する。

「これを勉強に生かせたら完璧かもね」

「そうですね。でも、そんなにうまくはいきませんって」

絵里ちゃんは笑いながら言う。

「それよりも先輩。先輩は受験なんですね」

「あ、うん」

「どこの高校受けるんですか？」

「あ、それはね」

僕は絵里ちゃんに自分の受ける地元の高校の説明をする。

現役女子高生で『ジモティーズ』の一員である岩崎さんの情報では、その高校はかなり自由な校風らしい。部活動はたくさんのクラブが濫立するくらい盛んであり、行事も活発だという。

「じゃあ、私もそこを目指します」

「そんな簡単に決めていいの」

「はい、だって先輩が行くんですよね」

「うん。その予定だけど」

「だったら私も」

「いいの？」

「はい」

「ほんとに？」

「女に二言はありません」

絵里ちゃんは決意新たにそう言い切った。

3－8　遊園地（4）

例えば、ワインは色、香り、味という三種類を楽しむとよく聞く。ワインなんてもちろん飲んだことないけど、こういう考え方は一般的らしい。

それと同じように、ジェットコースターの楽しみ方は三種類あるという。

まずは視界、次に重力、最後に風圧。

この三種類を意識して楽しむ。

それがツウだと絵里ちゃんは力説する。

「わかったような」

「わかってくれましたか」

「でも、わからないような」

「わかりませんか」

肩を落とす絵里ちゃん。

「うーん。微妙」

結局、結論はこうなった。
今、僕達はジェットコースターの順番待ちをしている最中である。
もう少しで順番が回ってくるみたいで、だんだんと気分が高揚していく。

「でも、そんなんではダメですよ。先輩」

「そうかな」

「はい。心構えをしておかないと」

絵里ちゃんの力説はまだまだ続く。
どうやら相当のこだわりを持っているみたいで、その三つの他には不安定さが大切だと伝えてくる。

そうしてその話も一段落して、いよいよ順番が次となったときである。
絵里ちゃんがいきなり口を開く。

「あ、先輩」

「何？　絵里ちゃん」

「あ、あの」

そして急にもじもじしはじめる。
僕は何事かと思案に暮れ、一つに可能性に思い当たってしまう。

「まさか」

「え？」

「トイレ？」

「違いますよ、先輩」

真っ赤になって否定する絵里ちゃん。

「そうじゃなくってですね」

「うん」

「そのー」

そう言ったきり、今度は顔を両手で押さえてしまう。

歯切れの良い絵里ちゃんにしては珍しい光景。

「どうしたの？」

と、僕は聞く。

「あ、あの看板を見てください」

「看板？」

「はい」

言われたとおり、絵里ちゃんの指差す看板を見る。

するとそこにはカップル席へのご案内と書かれている。

カップル席とは、男女二組が係員の前で恋人であることを証明すると、より良い席へ案内されるという特別プランのことらしい。

「絵里ちゃんはカップル席にしたい？」

「は、はい」

なおも顔を真っ赤に染めている絵里ちゃん。
手うちわで自分をあおいだりもしている。

絵里ちゃんはジェットコースターにこだわりがあるくらいなのだから、より良い席で楽しみたいのだろう。
そのためにカップル席を所望したに違いない。

「でも、問題があるね」

「はい」

そう、僕達はカップルでない。

「いや、やっぱりそんなことないですよ、先輩。これ、秘密のデートなんですから」

「え？」

「恋人のふりをしましょう」

「恋人のふり？」

「はい、そうですっ」

握りこぶしをぐっと込めたまま僕に迫ってくる絵里ちゃん。
勢い余ってキスしそうな距離にまでなる。

「す、すいません。先輩」

「あ、こっちこそごめん」

僕はなんとなく謝ってしまう。

「それでですね、先輩。あの、恋人である証明として手、手を繋ぎませんか」

「うん、構わないよ」

そうして絵里ちゃんと手を繋ぐ。
絵里ちゃんの手は小さくて柔らかい。

「でも、それだけで大丈夫？」

「え？」

どこか放心したような絵里ちゃんが、慌ててこっちを見る。

「恋人だとしたら名前で呼び合わないといけないと思うんだけど」

「そ、そんなぁ」

「先輩なんて呼ばないでさ、係員の前では僕の名前を呼ばないと。

とりあえず呼んでみて」

「は、春――先輩。ダメです。どうしても」

「大丈夫だって」

「先輩、ドSすぎです」

「だから先輩じゃないよ」

「ほんとにドSです」

で、こんなことをしているうちに、本当に順番が回ってくる。
係員にカップル席であることを告げ、手を繋いでゲートを通過していく。

「絵里ちゃん」

「は、春くん」

僕はよく演技したと絵里ちゃんの頭をなでる。
そしてそれが決定打となったか、僕達はカップル席を認められた。

3－9　遊園地（5）

「では、お楽しみくださいね」

その言葉を最後に安全バーがゆっくりと降りていく。そして機体は少しずつゆっくりと上昇していき、僕達の緊張感を煽っていく。

視界、重力、風圧。
絵里ちゃんの言葉どおりその三つ。
それと、機体の不安定さ意識しながら楽しむ。

そう、この感じだ。
この胃がきりきりするような不思議な感覚。

隣の絵里ちゃんを見ると、僕と同じように楽しんでいる。
不安と笑顔が同居したような表情だ。

「先輩」

「何？」

「来ますよ」

「うん」

僕が返事をするや否や、機体がすごい勢いで落ちていく。

「きゃあああああああああああああ」

「うわあああああああああああああああ」

視界は良好。重力は最高。風圧は完璧。

猛スピードで決められたレールを駆け抜ける機体は、人々の絶叫を乗せて走っていく。

僕はその流れに身を任せ、存分にジェットコースターを堪能する。

そうして、いつまでもこの感覚を味わっていたいと思いながらも、やがて終わりが近づいてくる。

機体は緩やかにスピードを落とし、最初の場所に止まった。

「ありがとうございました」

係員がそう言い、安全バーが上がっていく。

「またのご利用をお待ちしています」

僕達は機体から降り、出口のゲートをくぐる。

一息つき、絵里ちゃんと僕は笑い合う。

二人して笑いは止まらない。

どんどんと湧きだすように、笑いの連鎖が続いていく。

そしてようやく治まったところで、絵里ちゃんが僕を呼ぶ。

「先輩」

「何？」

「先輩」

「だから、どうしたの？」

「先輩」

何度も呼ぶ。
さらに目を輝かせてくる絵里ちゃん。

こっちを見つめてもいる。
しかしそれだけで、絵里ちゃんの意図することがこっちにも伝わってきた。

「どうする？　これから」

「わかっていますよね、先輩」

「また同じの乗る？」

「はい」

やっぱりそうだったか。
僕はほくそ笑んでいた。

3－10　遊園地（6）

それから僕達は、あのジェットコースターに三回乗った。
三回も乗れば満足するはずで、午前中の残りの時間は違うアトラクションを楽しんだ。

種類は、おなじみのメリーゴーランドに始まり、カーレース、そしてモロッコみたいなレーンのアドベンチャー。

ここまでは予定通りに進んでいる。
ジェットコースター以外は並ぶことなく、午前中だけで結構乗れた。

「先輩。お腹すきましたね」

「そうだね」

昼ご飯は園内に設置してある飲食店です。
絵里ちゃんはサンドイッチ。
僕は焼きそば。

飲み物は二人とも自販機でお茶を買った。
僕達は、近くに隣接しているベンチに座って昼食をとる。

「いただきます」

「いただきます」

出されたおしぼりで手を拭いて、焼きそばを口にする。
焼きそばはこってりとした味付けだ。

「うん。おいしい」

「こっちもおいしいですよ」

絵里ちゃんは、小動物みたいなしぐさでサンドイッチを食べている。

「こういうのもたまにはいいですね」

「たしかに」

僕達は大いに納得する。

「絵里ちゃん」

「なんですか？」

「ちょっと焼きそば食べてみる？」

「いいんですか？」

「うん、いいよ」

「では、代わりに私のサンドイッチあげますね」

そう言うと絵里ちゃんはサンドイッチを取りわけてくれる。
僕も、絵里ちゃん用に焼きそばを残していく。

「じゃあ、わりばしもう一つもらってくるね」

「あ」

頬をそめる絵里ちゃん。

「？」

どうしたのだろうか。
僕にはわからない。

「せ、先輩」

「ん？」

「わざわざ先輩のお手を煩わせなくても、不肖ながらこの都築絵里、そのおはしで結構でございます」

なんだか日本語がへんになっている絵里ちゃん。
首をかしげながら僕は答える。

「いいって」

「で、でも」

「絵里ちゃん、すぐだからちょっと待ってて」

絵里ちゃんに断わりを入れて席を立つ。
店まで行き、わりばしをもらってくる。

「はい、もらってきたよ」

僕はわりばしと一緒に焼きそばのパックを渡す。

「あ、ありがとうございます」

と言うわりには、あまりにありがたがっていない感じの様子。
僕があげるって言ったときにずいぶんと喜んでいたけど、何かあったのだろうか。

さらに絵里ちゃんは、危機迫った形相でこっちを見てくる。
そして口を開く。

「先輩」

その表情に蹴落とされそうになりながらも僕は聞く。

「何？」

「代わりに私のサンドイッチ食べますよね」

「あ、うん。くれるなら」

「で、今日は秘密のデートですよね」

「そうだね」

「だったら、私が先輩にあーんをします」

「え？　どういう理屈？　それにあーんって」

僕は美咲さんとの玉子焼き事件を思い出す。

いや、あれは事件でなくて戦争だ。

あのときは、美咲さんのはしさばきが恐ろしすぎて避けるのが大変だった。

「先輩、いきますよ」

絵里ちゃんはにらむようにして見てくる。

なんだか、大変な雰囲気だ。

「いいですね」

「う、うん」

「あーん」

そしてサンドイッチがすごい速さで迫ってくる。

「え？　いっき？」

僕が驚く間もなく、サンドイッチが口の中へ。

「ごふっ」

人間のどに詰まりそうになったときは、信じられない声が出るも

のである。
絵里ちゃんは、なぜか目を閉じてしまっているのでこっちの様子を知らない。
なので僕は必死に咀嚼し、なんとか飲み込む。
「なんかへんな声しませんでしたか」
「き、気のせいだよ」
絵里ちゃんに殺されそうになった現実を直視したくないため、必死になってフォローする。
「そうですか？」
しかし、絵里ちゃんは首をかしげながら不思議な顔をしていた。

3－11　遊園地（7）

昼ご飯を終えてすぐ、絵里ちゃんは家に電話をかけた。
なんでも、弟や妹達が作り置きしてあるご飯をしっかり食べたか。
それが心配になったらしい。
絵里ちゃんによると、弟や妹達は、遊びに夢中になってご飯を忘れてしまうこともあるという。

「お昼、ちゃんと食べるんだよ。ね」

今もお姉さん然とした絵里ちゃんの声が聞こえる。
僕の前で見せる人懐っこいネコみたいな後輩の姿はそこにない。

「じゃあね。お姉ちゃん、ちゃんと帰ってくるから」

そうして、電話を切る絵里ちゃん。
しかしその直前、子ども達の物凄いエールが聞こえてきた。
あれはなんだったのか。

「絵里ちゃん」

「はい。なんですか？　先輩」

「なんか電話越しからものすごいエールがここまで聞こえてきたん

だけど」

「え？　エールですか？」

「うん」

僕は神妙にうなずく。

「デートがんばれーってさ」

デートにがんばれも何もない。

というより、秘密のデートなのに弟や妹達が知っているのが不思議だ。

僕は腑に落ちない表情でいると、絵里ちゃんが口を開く。

「な、なんでもないです」

「そう？」

「そうですよ。気にしないでください」

絵里ちゃんがあせったように手を振る。

そこまで言うのなら、たいした理由ではないに違いない。

「それよりも先輩」

「何？」

「午後のアトラクションどういうふうに回っていくか決めましょうよ」

「あ、そうだね」

「やっぱり私はジェットコースターがいいです」

その言葉で、午後もジェットコースターから始まっていく。
今度のジェットコースターは、最初に乗ったのとは違うもの。より急角度で大きなスリルが味わえるやつだった。

で、僕達はこれを三回乗った。
二人ともへとへとになりながらも十分に満足する。
ベンチで休憩しながらも、絵里ちゃんが言う。

「先輩、気が合いますね」

「たしかに」

「先輩がここまでジェットコースターに乗れるとは、私思いませんでした」

「僕もだよ」

「そうなんですか？」

「そうだよ。でも、おかげでずいぶん楽しめている」

どうやら、絵里ちゃんとはアトラクションの趣味が合うみたいだ。
僕達はお互いに満足気な表情を浮かべて笑い合い、空を見る。

一つ心配な点があるとしたら天気。

さきほどから、どんよりとした曇り空になってきている。

「雲、多くなりましたね」

「うん。そうだね」

と、僕がつぶやいたときである。
ぽつ、と水滴が額に落ちてきた。

「あ、降ってきましたよ」

「ほんとだ」

「うわ、これは大降りです」

絵里ちゃんの言葉通り、瞬く間に雨は大粒になっていく。
僕は持ってきたトートバックから傘を取り出す。

「先輩」

隣には涙目になっている絵里ちゃんがいる。
どうやら傘を持ってきていないみたいだ。

「ほら、入っていいよ」

そんなに大きな傘でもないけど、隣に女の子が入るスペースくらいはある。

「ありがとうございます、先輩」

「うん」

「そんでもって、相合傘です」

「そんなことは言わないの」

いつまでもベンチに座っているのもあれなので、僕達は立ち上がる。

人の波がお土産コーナーに向かって行ったので、僕もそっちを指差す。

「絵里ちゃん」

「なんですか？」

「今のうちにおみやげでも見ておこうか」

僕がそう言うと、絵里ちゃんはポーンと手を打つ。

「先輩。それ、いい考えです。それにこの雨もきっとにわかですからちょうどいいですね」

「うん。秋の天気は変わりやすいしね」

後、女心もだったなあ、と僕は思った。

3－12　遊園地（8）

雨はすぐに止んだ。
おみやげを見て買った僕達は、気を取り直してアトラクションをこなしていく。

コーヒカップ、お化け屋敷、回転ブランコと順番に楽しんでいくうちに日が暮れていき、すっかりと夕方になった。

それで観覧車に乗り、今特別に開催されている花火を見て、最後はジェットコースターで締めようとの相談をしていた。

「先輩。やっぱり最後はジェットコースターですね」

「そうだね、絵里ちゃん」

「でも、その前に観覧車もありですよ」

そう言って、観覧車の列に並ぶ。
やがて観覧車の順番が来て、僕達は乗り込む。

観覧車は少しずつ上昇していき、景色がだんたんと開けていく。
僕達の街も、とても小さくだけど見えている。

「先輩」

しばらく景色を見ていたが、絵里ちゃんが僕を呼ぶ。

「何？」

「その、今日は先輩に話したいことがあったんです」

「話したいこと？」

「はい。それで、そ、その、恋の相談なんです」

「恋の相談？」

僕は素っ頓狂な声を上げてしまう。

「はぁ、古典的ですよね、私」

「え？」

「な、なんでもないです」

「それで恋の相談なんですけどいいですか？」

「うん、いいけど。でも、僕なんか何の参考にもならないと思うよ」

僕がそう言うと、絵里ちゃんは立ちあがってまで反論する。

「そんなことないです。先輩だからこそなんです！」

「あ、絵里ちゃん。落ち着いて」

絵里ちゃんが立ちあがったことで、機体が大きく揺れている。

「あ、すいません」

「いいって」

しかし絵里ちゃんは、しゅんとなって顔を赤くする。

「それで話して」

僕がうながすと、絵里ちゃんがサイドにくくった髪をさわりながら口を開く。

「先輩」

「うん」

「相談とは、私の友達が男の子に手紙で告白されたことなんです」

「そうなの？」

「はい」

絵里ちゃんの相談の内容とはこうだった。

告白された友達には好きな人がいて、その好きな人はどうも自分のことが眼中にないようなかんじらしい。

しかもその人には、本当に微妙な関係の女の子がいる。
さらに、友達は告白した男の子のことを悪くは思っていない。

「絵里ちゃんはどう思うの？」

とりあえず僕は聞いてみる。

「え？　私ですか？」

「そうだよ」

絵里ちゃんは少し考えた後、言う。

「私にはわかりません」

「そっか」

「だから先輩に相談したんです」

「そうだね」

僕はもう一度考えるため、いつも告白されている綾を思い出す。
綾はどうだったか。
けど、あまり参考にはならない。

「えっと」

「先輩？」

「僕が言えたことじゃないけどさ、特別に好きじゃなかったら断わ

っているかも」

「そうなんですか？」

「うん」

根拠はなかった。

ただ、綾が悪くは思っていない程度の男の子と告白を了承する場面が思いつかなかっただけだ。

けど、絵里ちゃんはその曖昧な答えに納得してくれたようで、笑顔でつぶやく。

「先輩は、ずるいですね」

「ずるい？」

「はい。そしてドリーマーです」

「ドリーマー？」

「はい。そうですよ」

3－13　遊園地（9）

観覧車を降りてすぐ、僕の携帯が振動する。
ディスプレイの表示を見ると、そこには綾の名前。
この時間帯にかけてくるのは珍しいので、何かあったのかと勘繰る。

「先輩」

「あ、何？」

ディスプレイをずっと見つめている僕に、声をかけた絵里ちゃん。

「電話出ないんですか？」

「うん。出るよ」

「私、少し離れて待ってますね」

僕が気まずそうな表情していたせいか、絵里ちゃんが気を使ってくれる。
絵里ちゃんの少し寂しそうな笑顔を見た僕は、後ろ髪を引かれながらも電話に出る。

「もしもし」

『もしもし』

沈んだ綾の声。
覇気がない。

「どうしたの？　綾」

『うん』

綾はそう言ったきり押し黙ってしまう。
僕は綾がしゃべるまで、少し待つ。

「……」

『……』

流れるのは沈黙。
最近、綾と僕とのあいだに明らかに多くなってきている種類のものだ。

『春』

「何？」

『あのことでお願いがあるんだけど』

「あのことってあれ？」

『そうだよ』

綾が小さく返事をする。

『それでね。明日の夜になっていたけどね』

「うん」

『それを今日の夜にできない？』

「え、今日の夜？」

『うん。明日、急に家の用事ができちゃったの』

綾の家庭の事情などは詳しくはわからない。

だが、お嬢様としての責務を果たさなければならないから忙しいに違いない。

「そっか」

今、僕はこうして絵里ちゃんと秘密のデートをしている。

くしくも、綾の秘密の遊戯と同じ秘密事。

だけど、その重要性は大きく違う。

本当は天秤にかけるなんて行為はいけないんだろうけど、綾との秘密の遊戯を重視してしまう自分がいる。

だから、僕は誠意を持って絵里ちゃんに謝ろう。

なぜなら、今から綾の予定に合わせれば、絵里ちゃんと花火やパレードをみたりすることはできなくなる。

「いいよ。今日の夜」

『ほんとに？』

綾がびっくりしたような声をあげる。

「僕さ、前に綾から電話来たとき言ったよね」

『え？』

「大丈夫。綾がしたいときはさ、いつでもいいって」

『あ、言ってた。けど、春の予定もきっとあるから』

「うん。たしかに予定はあった」

『ごめん』

「でも、何よりも綾に頼られるほうが大事。だから気にしないでほしい」

『あ、ありがと』

綾が戸惑ったようにお礼を言う。

このように、いつも素直な幼馴染でいてほしい。

けど、もっとわがままであってほしいとも思ってしまう。

この二律背反は不思議でしょうがない。

「じゃあ、明日予定していた時間でいいんだね」

『うん。大丈夫』

「それじゃあ、切るから」

『うん。バイバイ』

「バイバイ」

そうして電話を切った。

3－14　遊園地（10）

絵里ちゃんは、僕から少しだけ離れたところで待っていた。

「ごめん、絵里ちゃん」

「いいですよ、先輩。電話くらいお構いなしです」

「そうじゃないんだ」

「えっと、どういうことですか？」

笑顔だった絵里ちゃんが、怪訝そうな顔になる。

「今からの用事が入ったんだ」

「そうなんですか？」

「うん、ごめん」

僕は誠意を持って謝る。

それから、懇切丁寧に秘密の遊戯以外のことについてを説明する。

「ということは、綾さんとの用事ができたということですね」

「そうだよ、絵里ちゃん」

「そっかぁー」

絵里ちゃんはのびをして、軽い調子で言う。
けど、今にも泣きそうだ。
僕は申し訳なくなってきて、もう一度謝る。

「ごめん、絵里ちゃん」

「いいですよ、先輩」

絵里ちゃんがさらに続ける。

「私、なんとなくわかってましたから」

「え？」

「なんでもないです。それよりも先輩。私のほうこそ、先輩に謝ることがあるんです」

絵里ちゃんは涙をぬぐい、舌を出して笑う。
そのちゃめっけたっぷりの表情が逆に痛々しく感じてしまう。

「今、ちょっとだけ泣いちゃってごめんなさい。それと、実は私、さっきの先輩と綾さんのお話、少しだけ聞いちゃってたのにしらを切ってごめんなさい」

絵里ちゃんが頭を下げてくる。

「これでおあいこですね」

と、絵里ちゃんが言ったときだった。
パーンという音が聞こえて、花火が上がった。

赤、黄、橙、青、緑、紫。
色とりどりのきれいな花火。

「わぁ～」

絵里ちゃんの顔も色とりどりに輝く。

「先輩、私」

絵里ちゃんの顔が近づいてくる。

「好きなんです」

「え？」

「デートが好きなんです。だから、こうして長い時間一緒にデートできただけでうれぱみんでした」

「うれぱみん？」

「うれしいときに出るドーパミンですよ」

「あ、そっか」

僕は、絵里ちゃんとデートの約束をしたときのメールの内容を思い出す。

たった十日くらい前なのに、随分昔のことに思えてくる。

「先輩、忘れっぽいです」

「そうかな」

「そうですよ」

笑いながら言う絵里ちゃん。

涙の跡はすっかりなくなっている。

「今度、デートの穴埋めしてくださいね」

「うん」

「絶対ですよ」

絵里ちゃんが念を押す。

「わかった」

「なんたって私は聞きわけの良い妹キャラ。そこがうりですから。私ならこれくらいでオッケーです」

「そんなつもりじゃなかったんだ、ごめん」

「ほんとですよ」

と言って、僕の背中をポーンと叩く。

「でも、先輩なら許しちゃいますから」

「ありがとう」

「いえいえです」

絵里ちゃんが照れくさそうに笑う。

そして、何かを思い出したように手を叩く。

「先輩」

「何？」

「後、記念にこれください」

指差すのは僕の持っていたトートバック。

「これ？」

僕は不思議に思ってそれを掲げる。

「違いますよ、先輩」

絵里ちゃんは首を振る。

「その手前のポッケからはみだしているものです」

「え、なんか入ってた？」

「はい。入ってますよ」

絵里ちゃんは、僕の持っていたトートバックのポケットの中に手を入れて取り出す。

「イチョウの葉です」

3－15　秘密の遊戯（1）

絵里ちゃんが花火を見ていくというので、園内で別れることとなる。
別れる直前に見せた絵里ちゃんの悲しそうな表情に、僕は後ろめたさを感じながらも帰路を歩く。

花火を見る観客でごった返す人いきれ。
その中をかきわけるようにして戻っていく。

駅に着いて電車に乗ると、今日一日の出来事がビジョンとして浮かぶ。
ジェットコースターの連チャンから始まり、いろんなアトラクションを楽しんだこと。絵里ちゃんといろんな話をしたこと。

楽しいことばかりなのに、なぜか寂寥感がこみあげてくる。
それは今、隣に絵里ちゃんがいないからだろうか。

僕にはその感情がわからない。
わからないけど、それでいいと思う。

やがて電車は僕達の街にたどり着く。
僕は電車を降りて、慣れ親しんだ道と下り坂を歩く。

歩きながら、これからの予定を綿密に考える。
なにせ、綾と僕のする秘密の遊戯はディテールにこだわらなければ成立しない。なので、する前にしっかりと準備をしなくてはならない。

家に着き、ドアを開けると直が出迎えてくれる。

「おかえり」

「ただいま」

エプロン姿の直。
そして『努力』のはちまき。
その格好だけで、料理に精を出していることだけはわかる。

「早かったね」

「うん。でも、これからまた綾と出かける」

「そう」

「それで明日は出かけなくなった」

「わかった」

しゃべりながらも、僕は靴を脱ぎ家の中に入る。
家の中は僕が出かけたときよりも片付いているようだ。

「直、掃除した？」

「ん」

「そっか」

狭い部屋を見渡して、僕は納得する。

「春」

「何？」

「これ」

目の前に一冊の本を掲げる。

「『義姉との関係』」

僕は棒読みでその本の名前を呼んだ。

「また美咲さんの代物が出てきたな」

「うん。これがほんとの姉妹本」

さらりとエスプリのきいたことを言う直。

どうしようもない気分にさせられる。

「それはともかく、春」

「何？」

「なんか食べてく？」

「あ、うん。少しだけ」

まだ待ち合わせまでに時間がある。
それまでに腹ごしらえをしておくのもいい。

「あ、でもさ直」

「ん？」

「僕の分の用意してあるの？」

「少しだけ」

そうして、僕は直と一緒に早めの夕食となった。
直の腕はやはりあいかわらずで、いつもどおりの会話しながら夕食を食べ終える。

夕食を食べ終えると、ちょうど良い時間だったので行く準備をして家を出る。
外はすっかり日が暮れていて、星が見えるくらい。
月極駐車場近くの都立公園入り口まで行くと、すでに綾が待っていた。

「春」

控え目に手を振ってくる綾。
片手には、変装用のセットが入っているであろう大きなボストンバックを持っている。

「綾」

「何？」

「待った？」

僕は聞いてみる。

「待ってないよ」

「そう。それは良かった」

「うん。じゃあ、いこっか」

綾がくるりと前を向いて歩きだす。

3－16　秘密の遊戯（2）

いつも利用している都立公園のホールにある障害者用トイレを使って、着替えをする。
先に綾が男の子の格好になり、髪をくくって帽子の中に隠す作業を行う。

「よし」

その声とともに、綾がトイレから出てくる。

「どうかな？」

そして、僕の前でポーズをとる。
自分でも鏡の前で何度も確認したであろう格好。

問題などあるはずがない。
なので、僕は核心を持って告げる。

「大丈夫」

「ほんと？」

「ほんと」

「完璧？」

「完璧」

お世辞ではなく、本当にそう思っている。

前に綾が説明してくれたが、胸にもさらしを巻くぐらいの本格的な変装。

今も胸部の膨らみがなくなっている。

「じゃあ、次は春」

「わかった」

綾はボストンバックから僕の着替えを取り出す。

「はい」

「どうも」

そう言って、僕はトイレの中に入っていく。

綾に渡された女の子の格好に着替え、エクステをつける。鏡の中の自分を何度も見て、大きな違和感がないかを確認する。

その作業をしながら、いつもあることを思う。

よく考えてみれば、とんでもないことをしているのかもしれないと。

けど、僕が綾の手助けとなれる唯一のこと。

そして何より、天衣無縫でわがままな幼馴染が見れるのだ。

「よし」

準備を整え、意を決してトイレから出る。
もちろんそこには綾が待っている。

「綾、どう？」

「うん、大丈夫」

「良かった」

僕はほっとする。

「春。直に似ている」

「あ、そうだね」

この格好をするとき、綾がいつも言うセリフ。
この秘密の遊戯で直に似ていることを強く実感する。

「春」

「何？」

「私、今から変わるよ」

「うん」

「いい？」

「オッケー」

その言葉を合図にキリッとした表情になる綾。女の子らしさをなくしたような表情に綾の変化を感じる。

そして綾は僕をエスコートするように手を伸ばす。

僕はその手をつかみ、綾の言葉を待つ。

「春、わかってるかい」

「大丈夫、わかってる」

綾は手をぎゅっと握りしめてくる。

「さあ、春。ボクと一緒に街へ行こうじゃないか」

ボクという一人称の変化。

綾が男子モードに変わったのだ。

3－17　秘密の遊戯（3）

バスに乗り、街へと繰り出す。
ここは小さな市街だけど、とりあえずいろいろと見て回れる。
ウインドショッピングができるくらいにお店はあるし、遊ぼうと思えばいろんな遊戯施設はあったりする。

けど、秘密の遊戯をしているときの僕達は、とにかく街中を闊歩する。
何かを発散するように、とにかく歩いて歩いて歩きまわる。

煌めくネオンや雑踏の中、目的地も決めずに漫然と歩く。
それは縛られている常識に対しての反発なのかはわからないが、まるでなにかデモをしているかのような気分だ。

「春。ボクはね、この格好をしているときが一番自由を満喫できる気がするんだよ」

綾が神妙な顔をして言う。

「そしてボクは、春がその格好で隣にいてくれると安心するのさ」

言われて、僕は自分の格好を見渡す。
どこから見ても女の子の格好。

けど、もうずいぶんと慣れたものだ。
「僕は綾が安心できるのならそれでいいよ」
「そうか」
「うん」
「ありがとな、春」
「いいよ」
「いや、ありがと」
ウインクとともに、お嬢様でいるときとはまた違った朗らかな笑顔。
それだけで、この秘密の遊戯をしている意味がある。
「春」
「何？」
「いや、なんでもないな」
「あ、そう」
綾と僕は、手を繋ぎながら街を歩いていく。
夜の街の風景はいつもと変わりなく、それが僕達を安心させる。
雑多な雰囲気も世話しない様子も何もかもが馴染んでいる気がする。

そうして一時間以上経って、そろそろ帰ろうかと頃合いになってくる。
しかし、そのときだった。
「これ、そこのお嬢さん」
見知らぬ御老人が声をかけてきた。
なので、僕は慌てて振り向く。
今、お嬢さんと呼ばれる格好をしているのは僕であって綾ではない。
だけど、そのかくしゃくとした御老人は首をかしげてこんなことを言う。
「あなたではなく、隣のお嬢さん」
その一言に、綾が限界まで目を見開いて振り向く。
「ボ、ボク？」
「そうです」
「ボクか……」
御老人の言葉にものすごいショックを受けたようで、綾はふらふらと倒れそうになる。
倒れるとまずいので、僕は綾を支えておく。
「ハンカチを落としましたよ」

御老人はわざわざハンカチを拾ってくれて、綾に手渡す。
綾はそれを、茫然自失といった表情でつかんだ。

「あ、ありがとうございます」

「いいえ、きれいなお嬢さん」

そしてその一言が決定打となる。
親切な御老人がその場を去っても、綾は表情は変わらない。

僕の隣にいるのに、どこか寂しそうに見える綾。
それは何かの世界と戦っているようにも思える。

「春」

「何？　綾」

僕には聞かれるであろう質問がもうわかっている。
けど、できるだけ平静を装って答えようと考えていた。

「ボクは……ボクはもう男の子には見えないのか？」

「そんなことはないよ」

「でも、さっきのおじいさんはっ！」

立ち止ったままの綾の表情がだんだんと歪んでいき、やがて大粒の涙となってしまう。
顔をくしゃくしゃにした綾が、僕をじっと見つめてくる。
けど、僕に綾をなぐさめる適切な言葉は見つけられない。

「ボクは、もう、男の子になれないんだ」

「綾」

「ボクの心の自由も消えてしまうんだ」

「綾！　違うって」

周りの人が何事かと見てくるが、そんなの気にしてられない。

「春だって、ほんとはボクのこと」

「綾ってば」

「春だって、きっと」

「違うよ」

「うぅぅー、春のばかっ」

混乱したままの綾は、子どもじみた叫びとともに走り出す。

冷静に突っ立っている場合ではない。

そう思ったけど、一歩も足は動かないでいた。

3－18　秘密の遊戯（4）

綾が駆けていった方角のだいたいの見当をつけ、僕は後を追う。
勝手知ったるこの街。幼馴染の行きつく先。

この二つを考慮してある場所が思いつく。
それは小さい頃、綾の姉の翠さんに連れてもらった高台。

ここから近いとは言えないが、遠くもない。
なので、僕は急いでそこへ向かう。
そして、走りながらも綾にかけるべき言葉を考える。

けど、どうすればいいか。
僕にはわからない。

「どうすれば」

ついつぶやきが口をついて回る。
あの御老人には罪はないが、綾にとっては大切にしていた何かを破壊された気分だったに違いない。

実際、綾もあんなに嘆いていた。
どうすれば綾の嘆きを取り除いてあげられるか。

「……」

そんなのはやはりわからない。
結局、誰かが手助けするのではなく、自分で解決していかなくてはならない問題なのかもしれない。

僕は走りながらもそんなことを考えて、暗澹とした気持ちになる。
やがて高台に着き、ある種の確信を持って綾を探していく。

けど、綾はいない。
可能性のありそうなところはすべて探したが、それでもいない。
もしかしてすれ違いにでもなったのかとも思い、余計な不安がもたげてきたときである。

「君の髪、きれいだね」

へんなことを言う人がいるもんだと思い、声のする方へと振り向く。
すると、男は大きなハサミを持っている。
その瞬間、この街で起きていたあの事件を思い出す。

「あ」

僕は金縛りにあったように身動きがとれない。
そんな中で、僕はこう思う。

今、僕は女の子の格好をしている。
つまり男が狙っている髪も偽物。
エクステがばれたら、いっかんの終わりだと。

男はどんどんと僕に近寄っていき、肩をつかもうとする。身動きの取れない僕は、あっさりと男に捕まってしまう。

「髪、切らせてよ」

「……」

「それだけでいいから」

男がエクステへと手を伸ばす。

僕は男の逆鱗に触れないようにだまってやり過ごすしかない。

しかし、そのときだった。

「春！」

タイミング悪く、綾がやってくる。

「あ、綾」

「春、どうしたの！」

明らかに挙動不審になった男。

大きなはさみを綾に向けながら構えている。

「こ、これ以上近づくな」

僕は勝気な綾が危ないと思った。

そしてこの時、この状況を打破するアイデアが閃く。

前に鳥子さんから教わった人体の不思議をつくツボを押せばいい。

そうすれば十五秒間、相手は停止する。

このままでは、綾が心配だ。
いけるか。どうだろう。
いや、やるしかない。

後は、二人で逃げればいい。
十五秒もあれば相当遠くまでいける。

そして、街まで降りて助けを呼べばいい。
思い立ったが吉日だ。

僕は鳥子さんに教えてもらった箇所を押す。
すると、僕をつかんでいた男の力が一瞬だけ緩くなる。
僕はその瞬間を見逃さず、素早く綾のところまで行く。

「綾、早く！」

「うん」

僕は綾の手を取り、走り出す。
さっきまで僕をリードしていた綾は、大人しくリードされている。
後ろを振り向く勇気はなかったが、男は追ってきていないようだった。

3－19　秘密の遊戯（5）

一生懸命に走った僕達は、綾が駆けだしたところまでノンストップでやってきた。
もうお互いに、完璧だったはずの変装は乱れている。

「はぁ、はぁ」

綾も僕も荒い息を吐く。
周りは僕達の尋常じゃない雰囲気に着目しているけど、自分達のことでせいいっぱいだ。

「春、大丈夫だった？」

「うん」

「綾は？」

と、僕も聞く。

「大丈夫。だってあんなのたいしたことないから」

男の子の格好をしている綾は、女の子みたいに笑う。

「それよりも、春」

「何？」

「とりみだしちゃってごめん」

「うん、いいよ」

僕は構わないというふうに手を振る。
そして、綾にかける適切な言葉が思い浮かぶ。

「綾、さっきのことだけどさ」

「え？」

「ほんとに大切なのは周りからどう思われるじゃなくて、自分がどう思うかだよ」

男の子に見えるか、あるいはお嬢様でいるか。
本当は重要ではないのかもしれない。
自分の心の欲するままにすればいい。

「でも、春の思っていることは大事」

「なら、僕は綾がそれでいいと思えるならそれでいい」

僕がそう言うと、綾がきっとんとした表情で見つめてくる。
そして、何かを悟ったように微笑む。

「そっか」

「うん」

「そういうことだよね、春。やっぱり春は春だ」

「そうだよ」

「なんか視界が開けた気分」

綾が気持ちよさそうにのびをする。

「綾」

「何？」

「あのさ、こうやって何かの指針を見失いそうになったとき、心を落ち着ける方法が一つあるんだ」

「え？」

綾が困惑した顔でこっちを見る。

僕はそんな綾をしっかり見て言う。

「空を見て、星を見て、月を見て、そして自分を意識的に立ち止らせて固定すること。それだけでいいんだ」

すべては鳥子さんの受け売り。

あのとき、鳥子さんに教えてもらったことは人体のツボだけではない。

これをすると心身ともにすっきりできる。

「そうなの？」

不思議そうな顔をした綾が聞く。

「そうだよ」

と、僕は力強くうなずく。

「綾、やってみよう」

「うん」

「準備はいい？」

「いいよ」

そして、僕達は空を見上げる。

雑踏うごめく人いきれの中、しばし停止する。

それはまるで宇宙への交信をしているかのようだった。

3－20　決意

あれから三日後、街を悩ませていた男は警察に捕まった。
事件にあった僕達から念入りに聞き込み、犯人の特徴をしっかりと描いた直の似顔絵を警察に渡したのが功を奏したのかはわからない。

ともあれ、ニュースでさんざん賑わせていたあの事件はあっけなく解決。
そして後日、僕は東風荘の前で佇んでいた鳥子さんに僕はお礼をしに行く。
すると鳥子さんはこんなことを言う。

「おかしいですね、春くん。あんなツボ押しは私にしかできないことなんですよ」

「え、そうなんですか？」

「そうですよ。ついでに言うと師範なんて私にはいません。作り話ですね」

「え……」

魔性めいた微笑みでなげかけてくる鳥子さん。
でも、それだと不可解さが拭えない。
どうしてあの男は追ってこなかったのか。

「それは君が本気でどうにかしようと思えたからですよ」

「え？　どういう意味ですか？」

「俗にいう気合の差です」

「気合。そんな問題でしょうか？」

「はい、世の中とはそういうものなんです」

鳥子さんがそう言うのならそうかもしれない。
僕は鳥子さんとの回想を思い浮かべながら、街の景色を見渡す。

今、僕達三人は屋上に来ていて、昼休みを満喫中。
直はいつもどおりスケッチ。
綾と僕は富士山の見えるスポットで会話をしている。

「春」

「ん？」

「私さ、思うの」

「何を？」

「私が私であることをわからせようと思うんだ」

「それってお嬢様じゃないってことを示すってこと？」

「そう。家族にもクラスにも」

自信を持って言う綾。

何が綾に変化をもたらしたかはわからない。

「春はどう思う？」

「いいんじゃない。綾の思うままにすれば」

「うん」

綾がこくりとうなずく。

「じゃあ、秘密の遊戯は？」

「そ、それはまだ言えない」

「そっか」

「つまり、春にいっぱい迷惑かけるつもり」

「なら、これからも大変だ」

「そう、大変。だから覚悟していてよね」

この空のように晴れ渡った笑顔で言う綾。

僕はなんとも言えない気持ちでそれを見守る。

いつまでこの秘密の遊戯が続くのか。

それはわからない。

けど、それでこそ僕にとっての幼馴染との付き合い方。
今ではこう思っているのだ。

3－20　決意（後書き）

一応話の区切りとしてここで完結しました。
そしてこの続きを書くかどうかは、実は迷っています。
続きを読みたいというコメント、あるいはメッセージなどがあれば、なんでも良いのでよろしくお願いします。

要望があれば、いきなり続編を始めるかもしれません。
まあ、あればですが（苦笑）

それでは、最後まで『幼馴染の付き合い方』に目を通してくださってありがとうございました。
あ、後、新しい小説でもある『僕と彼女は仮幼馴染』の方も機会があれば読んでやってください。

追記

作者のトマトクンです。
ここでは、前回後書きに書いたあの件についてご報告しようと思います。
そうです。続きを書くかどうかの件についてですね。

作者はどうしようか悩んでいたのですが、感想欄とメッセージボックスに続きを書いてほしいとの依頼があり、とりあえず書いてみることにしました。

「始まらないストーリーって無性に切なくなるよね」という直の言葉通り、まだ春と綾のストーリーは始まっていません。
そこを指摘されて、ああ、そうだな、と深く思いました。

なので、これからも「幼馴染との付き合い方」をよろしくお願いします。
なお、まだストーリーの道筋が見えていないので、投稿するまで時間がかかるかもしれませんし、あるいは見切り発車して更新が止まってしまうかもしれません。
温かく見守ってくださると幸いです。

それと今回は、この六十二話目を持って第一章の完結とします。
続きは第二章として、六十三話の人物紹介の後、六十四話目から開始します。
人物紹介をしたら、第二章が始まる目安だと思ってください。

それではここまで目を通してくださった読者様に感謝を込めて、追記を終わりと致します。

後、最後になりましたが、ご感想、ご指摘、評価、お気に入り登録などは作者のモチベーションにかなり深く関わってきます。
ということで、今もどしどし募集しております。
皆様、気が向きましたらどんな些細なことでも結構ですので、ぜひお願いしますね。

人物紹介

《メイン》

坂本　春

本作の主人公。歳は１５。誕生日は４月１２日。
趣味はこれといったものが特にない。
見た目は意外とかっこいいアンニュイ系。性格はやや脱力系、だけど意外とドＳ。
頭脳、運動神経はともに平凡。
唯一の肉親である妹を尊敬している。

坂本　直

年子の妹。同じ学年。同じクラス。歳は１４。誕生日は３月３日。
趣味はスケッチをすること。特に学校での屋上スケッチは気に入っている。
見た目はかわいいよりも美人に形容される顔立ち。髪は長くストレートで、すべてを見透かしてしまいそうな怜悧な視線が特徴的。

性格は完ぺきな脱力系。素直クール？
頭脳明晰で真面目。感受性豊か。家事上手の料理下手。
口癖は「なんとなく」。
兄の春と幼馴染の綾との関係には少なからず思うところあり。

遠藤　綾

幼馴染。同じ学年。違うクラス。歳は１５。誕生日は８月１０日。
学年でもファンクラブがあるくらいの人気者のお嬢様。
しかし、実態は猫かぶりで、わがままのじゃじゃ馬。若干ツンデレ。
自由を求めるためにしばしば男装をする。そしてそれが春との秘密の遊戯に関係している。
口癖は「春はほんとにばかなんだから」。
春のことは幼馴染としての関係とは違った形で意識している。

《サブ》
（学校関係）

都築　絵里

後輩。歳は１４。主人公とは一学年下の関係。
キラキラした瞳とサイドにくくっている髪型が特徴的な女の子。
性格は活発、そして早とちり。元気っ娘。
家族は多く、長女として生活のやりくりを担当している。
春には明確に好意を示している。

小平　真由

綾の親友。同じ学年、違うクラス。歳は１５。
ショートカットで空手部の女の子。
春との関係は、いつも間が悪いこともあってか、あまりよい感情を抱いていない。

小倉　隆――クラスメイト。春の友達。脱ぐ癖がある。空手部。
吉田　栞――クラスメイト。春の隣の席。大和撫子。恥ずかしがり屋。

（東風荘関係）

上杉　美咲

大学生。歳は２１。東風荘の２号室住人。
見た目はよく見れば美人。もさっとした髪型とラフな格好が特徴的。
豪放磊落なお姉さん。賭け事好き、鍋好き。
春はからかいの対象にある。

野々垣　京子

年齢不詳。東風荘の６号室住人。
薄くルージュを引いた妖艶な女の人。不思議系。
趣味は手品。腕前は一級品。
それと予知能力を持っていて、春に時々助言をしてくれる。

（その他）

遠藤　翠――綾の姉。お天気お姉さん。
竹内　由貴――あっさり美人。ジモティーズの主催。
岩崎　明美――ジモティーズの知り合い。高二。皮肉屋。

1―1　夢

「春、春」

それは優しくも低音な直の声。
さらには揺り起こすような軽い振動。
何度もあった光景だと感じつつも、僕はゆっくりと体を起こす。

「よいしょ」

「起きた？」

「あ、うん」

目前には、いつも変わらない直の表情。
かわいいよりも美人に分類される顔立ち。世の中のすべてを見通してしまいそうな瞳が僕を見つめる。

「おはよ」

「うん」

僕は寝ぼけ眼をこすりながら、今の状況の把握に努めようとする。
どうやら直が一度起こしてくれたのに、二度寝をしてしまったみ

たいだ。

「春」

「何？」

「二度寝するなんてばかなんだから」

それを聞いて、僕は嘆息する。

最近、綾の口癖が直に移っている。

綾というのは直と僕の幼馴染。

わがままで活発、さらにはじゃじゃ馬で怒りっぽい女の子。

けど、学校では猫かぶりをしていたため、深窓のお嬢様としてファンクラブも存在するほどの人気を博している。

広く膾炙しているこの事実に僕は面食らいそうになるが、綾は綾であって変わりはない。

しかもあの事件以来、綾は地を出すようになってきた。

おかげで、別方面での人気も出ているという。

ちなみに綾と僕には誰も知らない秘密を有している。綾と僕は互いに性別を交換して、夜の街を繰り出すという秘密の遊戯だ。

「直」

「ん？」

「二回も起こさせてごめん」

話しを戻して、直に謝る。
とにかく僕に非がある。
だから、頭を下げるに越したことはない。

「春。もういい」

「ほんと？」

「ん」

とは言いつつも、無表情でふくれる直。
この無表情というのがポイントで、今のところ直の表情の変化は僕と幼馴染にしか見分けがつかない。
直は感情の発露に乏しいように見えて、実はそんなことないのを他の人は知らない。

「あのさ、直」

「何？」

一度顔を戻しかけた直が、また振り向く。

「一つ聞いてほしいことがあるんだ」

「ん」

「いい？」

「いいよ」

直が了解して、僕はゆっくりと口を開く。

「さっきさ、夢を見たんだ」

「夢？」

「そう」

「でも、春は十分間くらいしか寝てないけど」

「それでも見たよ」

直が表情を変えないで驚く。

「懐かしい夢だったな」

時計の針を幼少の頃までに大きく巻き戻したような夢。

たしか小学生だった気がする。

まだ冒険とか探検とか魅力に見えてキラキラ輝いていた時で、綾の先導のもと秘密基地の探索に出かけた夢だ。

綾と直と僕がいて、もう一人おさげの女の子がいた。

「春、その女の子は誰？」

直が聞く。

「それがわからないんだ」

「そうなの？」

「うん。なんだか知らないけど頭の片隅にずっと引っかかっていてさ。なんていうか霞がかった感じで、輪郭も伴わずにずっと残っているんだ」

僕は言葉にしにくい表現を一生懸命に説明していく。

「ふーん」

「もしかして記憶の中の女の子が私を忘れないでって言っているのかも」

「そうなのかもしれないね」

直がおざなりに返事をする。

1―2　成長曲線

布団を畳んで押し入れにしまい、カーテンを開ける。
東風荘はけっして日当たり良好とはいえないけど、太陽の斜光はしっかりと入ってくる。
僕はその光を一心に浴びながら、大きく腕を曲げてのびをする。

「直」

「何？」

「今日行かないの？」

「ん。行かない」

直の返事は昨日から変わらない。
一応、念のためにもう一度聞いてみる。

「ほんとに綾の家行かないの？」

「ん。いい」

実は今日、前に約束した綾との勉強会が遂行される日だった。
しかも、綾の家に招待されている。

ちなみに綾の家は、初めて行った人が迷ってしまうくらいの豪邸だ。

今まで、直と一緒に一度しか行ったことがない。

「でもさ、綾は直が来ることを期待しているんじゃない」

僕はなおも食い下がる。

「綾には行かないって断ったから」

「勉強はしなくてはいいの？」

「ん」

「それは勉強出来る人の嫌味？」

これはあまりいい言葉ではないな、とか思いながらもつい言ってしまった。

「ううん。違うよ春」

「そうだよね」

直はそんな無粋な性格ではない。

相手を思いやる気持ちと、誰かを幸せにする能力は格段に高い自慢の妹だ。

「私は始まらないストーリーよりもね」

「うん」

「始まりそうなストーリーの萌芽に期待しているの」

たしかにあの日以来、幼馴染である綾との距離は急速に縮まった気がする。

まだ妙な間があったりするけど、変に思うことはなくなった。

「始まりそうなストーリーか」

「そう」

「でもさ、直。僕にはその直の表現はわからないよ」

「そんなことない」

と、直は言う。

そして直は気分を変えたかったのか、リモコンをかちゃかちゃといじくる。

適当に朝のエンタメがやっている所でチャンネルを止め、それを見入る。

それから程なくして番組は占い情報になり、さらには最新の天気予報へと変わっていく。

「春、翠さん」

「ほんとだ」

画面に映っているのは綾の姉の翠さん。

泣きぼくろが印象的な美人で、直と僕はよくお世話になった。

「翠さん、休日もやってるんだ」

「ん。やってる」

「直は知ってた？」

「知ってた」

「そっか」

僕はうなずく。

「それよりも春。早く朝ご飯食べよ」

「うん、わかった」

僕は顔を洗い、パジャマから服に着替えた後、食卓に着く。

今日の朝ご飯のメニューは和風だ。

列挙するまでもないけど、ご飯、お味噌汁、ホウレンソウのおひたし、鮭の切り身などが並んでいる。

「いただきます」

「いただきます」

お互いに手を合わせてあいさつをする。

そして腕の変わらない直の料理を黙々と食べていく。

「あのさ、直」
「何？」
海苔のつくだにを取り分けながらも、直が先をうながす。
「この頃、『料理上手くなった？』って僕に聞かないよね」
「ん」
料理は、家事をそつなくこなす直の鬼門だ。
作った料理が食べられないことはないんだけど、なぜか味気ない料理になってしまうという不思議な特性を持っている。
しかし、それなのに直は少し前から交代制だった料理を全て担当しはじめた。
お弁当も直が作ってくれることになり、最近の僕は台所に触れていない。
男子厨房に入らず状態だ。
「で、どうして聞かなくなったの？」
「それはね、春。ある日突然、何の抵抗もなく『上手になったね』って言われるのを待っているの」
「そうなんだ」
「そう。私はきっといきなり上手くなる」
「そういうものかなあ」

僕は首をかしげる。

「見えない成長曲線というのがあるはず」

「へえ」

「そのためにはやっぱり努力は欠かせない」

直は冷蔵庫にかけてあったエプロンのポケットを見る。
そこには『努力』の刺繍が入ったはちまき。
前はフェルトペンの文字だったけど、いつのまにか刺繍に変わっていてびっくりする。

「これを毎日拝んでいる」

「え？　どういうこと？」

「こうやって」

直が拝む姿勢を見せてくる。

「方法じゃなくてさ。どうして拝むの？」

「ん。わかんない」

「わかんないってさ」

「んと、なんとなくかな」

1－3　小春日和

朝食を食べ終えた後、しばらくくつろぐ。
直と日常の会話をしながら、招待された綾の家に行く準備をする。
何にでも活用しているいつものトートバックに勉強道具を入れて、大方の準備を整える。

「春、電子辞書忘れてるよ」

「あ、ほんとだ。ありがとう」

直に電子辞書を渡されて、僕はそれをトートバックにしまう。

「そういえば、直」

「何？」

「今日の予定は？」

「今日の予定？」

と、直がオウム返しに聞く。

「うん」

「美術部の友達と都立公園でスケッチをする」

「そっか」

僕は直の予定を確認してから、玄関で靴を履く。

とんとんと靴のかかとを合わせていた時、直がこっちまでやって来て言う。

「春、服」

「えっ？」

「少しだけよれてる」

直がよれてた服を直してくれる。

「ありがとう」

「ん。じゃあいってらっしゃい」

「いってきます」

東風荘独特の古い玄関のドアを開けて、外に出る。

外は雨上がりのあのにおい。

先日降った大雨で、綺麗だったイチョウの葉は散ってしまったのだろうか。

「あ、鳥子さん」

「おや、春くんですね」

鳥子さんは東風荘の前にて日向ぼっこしている。
服装はいつもと変わらない黒一色だ。

「おはようございます」

「はい、おはようございます。でも、そう言うには微妙すぎるほど微妙と言える時間ではありますね」

「たしかにそうですね」

僕は相槌を打つ。
鳥子さんはなぜこの東風荘に住んでいるのかが不思議な人で、仕事もウイリアム・テルという立派なブランド名を立ち上げている。

ちなみに趣味は手品。
これにはいつも驚かされてしまう。

「春くん。今日は小春日和でいい天気です。それにしても、私にとって小春日和という単語はなぜか気になる言葉であります」

「はぁ、小春日和ですか」

「はい」

唇に薄いルージュを引いた鳥子さんが妖艶に微笑む。
大人の魅力であふれたお人だ。

「で、鳥子さん」

「はい、なんですか？」

「今、何をしていたんですか？」

「ああ、それはハロウィンにむけて新しい手品の練習をしていたのですよ」

「あ、そういえばもうすぐですね」

十月三十一日。
ハロウィン。

日本では馴染みが薄いのかもしれないが、東風荘では一大イベント。
それに一年で唯一仮装をしていても違和感がない日でもある。綾も僕もこの日だったら、問題ないのかもしれない。

「春くん。では、ちょっと私の手品を見ていきますか？」

「はい」

「いきますよ」

と、宣言した後すぐに、鳥子さんは林檎の剥製をいきなり手元に出す。
鮮やか過ぎる早業で、僕にあっけにとられた。

「あいかわらず凄いですね」

「いえ。これは基本中の基本でして、ここからさらに上積みしなくなりません」

「そんなことは断じてないですよ」

「そうですか？」

「はい。今のでも十分にすごかったですから」

「ありがとうございます」

鳥子さんがお礼を言う。

「ところで、春くんはこれからお出かけになるのですか？」

「あ、はい」

僕は腕時計を見ながら、現在の時刻とバス時間を照らし合わせる。

「ちょっと幼馴染と勉強会の約束をしたもので」

「そうですか。バスを利用されるのなら、きっとバス停には美咲さんがいらっしゃると思いますよ。さきほど元気良くあいさつを交わしましたから」

「あ、そうなんですか」

朝から美咲さんのテンションについていけないなあと思い、僕は苦笑する。

1―4　ぐりぐり

小学校前のバス停につくと、案の定美咲さんが立っていた。
美咲さんの他には誰もいない。
どうやら今日のバスの利用者は少ないようだ。

「おはようございます、美咲さん」

「おー春坊。おはようさん、と」

あいさつ代わりにヘッドロックをかけられそうになり、僕は慌てて身をよじる。
なぜか知らないけど、美咲さんが涙した日以来、彼女とのスキンシップが多くなっている気がする。

中学生に絡む華の女子大生。
不思議に思いながらも、それを聞くことは自重している。

「春坊もバスに乗るのか？」

「はい。それよりも美咲さんがバスを利用するなんて珍しいですね」

「あー気分を変えたくてさ」

美咲さんがボリュームのある髪の毛をいじりながら言う。

「春坊もそんなことってないか？」

「いえ、僕はルーチンワークの方が好きです」

「なんだと、この」

今度はつかまってしまい、ぐりぐりとこめかみをやられる。

ツボをしっかり押さえているのか、かなりの痛さだ。

「美咲さん、痛いですよ」

「痛いじゃないぞ」

「いえ、痛いものは痛いです」

僕が涙目でそう告げると、やっとぐりぐりを止めてくれた。

「春坊なら、この私の繊細な気持ちをわかってくれると思ったのにな」

「繊細という言葉をどこかに置き忘れてきた人が何を言いますか」

「なんだと」

繰り返されるぐりぐりの刑。

今度は後ろから密着されて、先ほどよりも強くやられる。

「いてて、美咲さん。今度こそギブです」

「この程度でギブだと？」

「……」

僕は我慢ごっこでもしているのだろうか。

さらに背中に柔らかいモノが当たっていて、意識がそっちに持っていかれる。

「み、美咲さん。当たってますって」

「何が？」

「胸です」

美咲さんは自分の色気を自覚していない。

そんな僕の懊悩をよそに、美咲さんはこんなことを言う。

「まーたエロイこと考えていたんだな。春坊は」

「はぁ。違いますって」

僕はため息をつく。

「あ、そういえば春坊」

「今度はなんですか？」

「昨日、新刊が入ったんだよ」

「はい？」

「『義姉妹との関係』」

「こ、今度は姉と妹が合体してる」

「しかも、大学の生協で売ってた」

「大学は何を売っているんですか」

大学には官能小説が平然と売られているのか。

僕は頭を抱えそうになる。

「そんでもちろん学生割引で買ったね」

「やっぱり買ったのかいっ」

どうも美咲さんと一緒にいるとつっこみが入ってしまう。

けど、美咲さんにつっこみどころが多すぎるのがいけない。

第一、官能小説を買ったことを他人に報告するものなのか。

「心配すんな、春坊」

「何がですか？」

「読み終わったらちゃんと回してあげるから」

「いらないです」

「え？　じゃあ部屋に隠しておいてほしいのかい？」

「またそのパターンですか。止めてくださいね」
「宝探しみたいでわくわくするぞ」
「宝じゃないですから」
「何、あんなのでは満足しないと」
「そうじゃないですってば」
僕はぜえぜえと息を吐く。
けど、美咲さんはまったく懲りていない。
「あ、いいこと思いついた」
そう言ってにやりと笑う美咲さん。
まるで意地の悪いことで有名なチェシャ猫のようだ。
「あの時のネコ語での告白」
そしてぽつりとつぶやく。
「あ」
瞬時に思い出してしまう自分の痴態。
「す、すいませんでした」
「じゃあ春坊、今回はしっかり読むんだな」

「はい、読ませていただきます」

これってセクハラになるのだろうか。

僕はそんなことを考えていた。

1―5　モラトリアム

バスは話している間にいつのまにかやってきた。
待っていた時間は五分くらい。

乗車整理券を受け取り、僕達はバスに乗り込む。
バスの中は人が少なく、どこの席でも座り放題だ。

「私、窓側な。で、春坊は隣」

「はい、わかりました」

美咲さんの勧めで、後ろの二人席に腰を落ち着ける。
座った瞬間、バスはガソリン音を響かせて出発した。

「春坊」

「何ですか？」

「ガムいるかい？」

美咲さんがポケットからガムを取り出す。

「ガムですか」

「そう、ガムだよ。昨日本屋で買っておいたのが余ってんだ」

「そうじゃなくてですね。美咲さんはガムあまり好きじゃなかったような気がしまして」

「だから春坊に貰ってくれと言っているわけさ」

そう言ってガムを渡してくる美咲さん。

「でも、ガムを買うなんてほんとに珍しいですね。美咲さん」

「あーそうだな。でも男にふられた後はさ、普段しないことをしたくなるんだ」

「そうなんですか？」

僕は疑問を投げかけたが、そういえばそうだったと思いだす。

前に美咲さんがふられた時も同じようなことがあった。

「そう。たとえばガムを買ってみたり、インディカ米を食べてみたり、通学路を変更してみたり、ラッタッタを乗り回してみたり」

「ラッタッタ？」

僕は首はかしげる。

すると美咲さんは、目を丸くして言う。

「春坊はラッタッタも知らないのかい」

「はい」

「私の大学の友達が譲ってくれたスクーターのことだよ」

その言葉で僕は合点がいく。

「あの古いイエローのバイクのことですか」

「そうそ」

「けど、美咲さんはバイクの免許持っていましたっけ」

「春坊、オマエは本当にバイクのことに関しては知らないんだな。私が乗っているのは自動車の免許だけで乗れるやつなんだ」

「へぇ」

僕は驚く。

てっきり、自動車とバイクの免許は別物だと思っていたからだ。

「今度、後ろに乗るか？」

「え、乗せてくれるんですか？」

「まあ、交通違反になるけどな。原付だし」

「ダメじゃないですか」

それから美咲さんと僕は、不思議な語感であるラッタッタの由来について話した。ラッタッタとは、昔やっていたＣＭから派生してきたらしい。

「あ、僕、次で降ります」

「そうかい」

バスは都立公園前、イチョウ並木、学校の前を通り、綾の家の近くへと来ている。

「春坊。私がボタン押すからな」

「いいですよ」

「ほんとだな？」

「はい」

僕は嘆息する。

「美咲さん。なんだか子どもみたいですね」

「何言ってるんだい。私も春坊もまだ子どもじゃないか」

「え、美咲さんは大人じゃないんですか？」

「そうか？」

美咲さんが不思議そうにかしげる。

「あ」

それよりも、つい最近どこかで聞いたセリフだなと思う。
けど、思いだせない。

「ていうか、モラトリアムなわけさ」

「モラトリアムですか」

「そう、モラトリアム」

そう言いつつも、美咲さんがボタンを押す。
バスは止まる旨のアナウンスをはじめる。

1－6　大人の事情

美咲さんに別れを告げ、僕は一足先にバスを降りる。
降りた場所は閑静な住宅街。

けど、ここら辺一帯は軒並み大きな家が建っていて、通るだけで圧迫感を感じてしまう場所だ。そしてその中でも綾の家は、瀟洒な造りで一際目立っている。
特に、どこまでも続く赤レンガ造りの外壁が凄みを感じさせる。

「よし」

一息入れてからインターホンを押す。
すると、綾が出てくれた。

「春？」

「あ、そうだけど」

カメラのモニターに視線を合わせて返事をする。

「待って。今開けるから」

綾がそう言うと、門がゆっくりと自動で左右に開いていく。

「入って」

「わかった」

僕は恐る恐る足を踏み入れる。
玄関まで数十メートルある道を、庭師でも雇ってそうなガーデニングを堪能しながら進んでいく。そうしてしばらく歩くと、玄関先では綾が待っていた。

「春。ようこそ」

今日の綾はラフな私服姿。
それでも女の子らしい姿だ。

「中、入ろ」

「うん」

綾が玄関を開けて、僕達は中に入る。
邸宅に入ると、まず目につくのは物凄く広い玄関ホール。
西洋式のシャンデリアと敷き詰められたカーペット、さらにはたくさんの絵画が飾ってある。

「あいかわらず凄い家だね」

「そう？　でも、私は関係ないから」

「そんなことないと思うけど」

「そんなことあるよ」

綾が寂しげに言う。

「で、今はどこに向かっているの」

「ん？　もちろん私の部屋」

木目が艶やかな廊下を歩きつつ、左へ右へと曲がりながらも綾の部屋にたどり着く。

「着いた」

「ここ？」

「うん。入っていいから」

綾が僕を招き入れる。

前に直と来た時と、さほど変わっていない綾の部屋。

けた外れの広さと天蓋のベットがある以外は、普通の女の子の部屋だ。

「春、あんまり見ないでよ」

「あ、ごめん」

とは言いつつも、机の上に懐かしいものを見つける。

「あれ、結構前に夏祭りの景品で取ったぬいぐるみだよね」

「あ」

綾は顔を赤くして、慌てて隠そうとする。
けど、そんなことをしても後の祭りだ。

「こ、これは昨日部屋の掃除をしていた時に、偶々出てきただけなんだからね。いつも飾っているわけじゃないんだから」

「そっか」

「そうに決まってるでしょ」

不自然に怒鳴られた僕だったけど、怒りっぽい綾なので納得する。

「えっと」

「ん？」

「あ、あのさ、春」

話題を逸らすように、綾が口を開く。

「直はやっぱり来れなかったの？」

「うん。都立公園で友達と絵を描くんだってさ。そういえば今日、両親はいないんだよね」

「そうだけど」

「ということは、僕――」

「ふ、二人きりじゃないわよ。後で私専属メイドのマリアが来てくれるから」

なぜか綾が、僕の発言をさえぎって言う。

けど、それは綾の先走りだ。

「そうじゃなくてさ、綾」

「え？」

「綾の両親と顔を合わせなくてもいいんだな、と思ってさ」

というのも、直と僕がのっぴきならない事情で東風荘に二人暮らしをして以来、綾の親とはすっかり折り合いが悪くなってしまった。一時期、綾と疎遠になりかけたのも、遠回しに幼馴染関係を解消させられそうになったからだ。

「ごめんね、春。ばかな親達で」

「しょうがないよ。それが大人の事情だから」

「そっか」

「うん」

「大人の事情か」

僕は寂しそうな顔をした綾を見る。

もっとましな言い方はなかったかな、と思う。

1―7　マリア

綾の言う通り、マリアさんはすぐにやってきた。
綾と僕が勉強会のための机を準備していると、コンコンとドアを叩く音が聞こえて彼女が入ってくる。

「失礼します。マリアです」

マリアさんはいかにもって感じなメイドの格好。
けど、従順というよりは大人っぽく小悪魔な感じで、なによりも美人だ。

「マリア」

「はい。お嬢様。マリアですよ」

「今日は春と勉強会だから」

「あ、坂本春です。綾とは幼馴染の関係です」

僕は慌ててマリアさんにあいさつをする。

「はい。お嬢様から伺っています」

マリアさんが優雅に微笑むが、なにか含みがあるように思えてしまう。

「で、お嬢様」

「何？　マリア」

「勉強会とは大人の勉強会ですか？　そしたら私は席を外した方がいいと思いますが？」

「なっ？！」

綾の顔が真っ赤になる。

にしてもこの人、何を言い出すのだろうか。

「か、からかわないでよマリア。普通の勉強会だからね」

「そうですか。それは残念です」

心底残念そうな調子でマリアさんが言う。

けど、あの顔は心の底では絶対笑っている。

「それでマリアの役目は、私達がわからない所を逐一丁寧に解説すること」

「私、大人の勉強会がいいのですが」

「マリア。だからそこから離れなさいっ」

「普通の勉強会より楽しいですよ」

「いいのっ！」

綾が声を荒げて怒鳴るが、マリアさんには逆効果。
年下がからかわれるこの光景は、美咲さんと僕の構図にどこか似ていた。

「ということで、マリアも早く準備して」

「はい、わかりました。お嬢様」

マリアさんが形式に乗っ取った一礼をする。
見事な切り替えの速さに、僕は驚く。

「あ、そうそうお嬢様。一つ私から話したいことがあるのですが」

「え？」

綾が戸惑っているあいだに、マリアさんは綾の耳元まで行く。
そして僕をじっと凝視してから、何か一言、二言告げた。

「マ、マリア。そうなの？」

「はい。そうです」

「……」

綾が少しずつ困惑した顔になっていく。
果たして、マリアさんは何を言ったのだろうか。

「は、春」

「何？　綾」

「私、ちょっと席を外すから。春は勉強の準備をしていて。後、マリアも」

結局、綾は慌てて部屋を飛び出す。

というわけでこの部屋に残ったのは、必然的にマリアさんと僕。

しかもマリアさんは、パーソナルスペースの許容範囲を大幅に超える勢いで僕に迫ってくる。

「な、なんですか？」

「いえ、なんでもありませんよ」

そんなことを言うが、全身を舐めまわすように僕を見てくる。

「坂本様」

「はい」

「二つほどお聞きしてもよろしいですか？」

「いいですよ」

と、僕は返事をする。

「では、聞きます。坂本様はお嬢様のことを大切に思われていますか？　それと、最近お嬢様に変化の兆しが見えるのは坂本様の影響

ですか？」

ずいっと顔をよせて聞いてくるマリアさん。

「どうですか？」

「答えは、その、両方ともはいだと思います」

「そうですか。それは良かったです」

マリアさんが笑顔を見せる。

1－8　小悪魔

「私、お嬢様が嬉々として語る坂本様とお話したかったんですよ」

「はぁ、そうですか」

こっちにしてみれば、綾が僕のことを嬉々として話す姿は想像できない。

マリアさんは僕のことをからかっているのだろうか。

「ところで坂本様」

「なんでしょう」

「そちらからも何か聞きたいことありますか？」

「聞きたいことですか？」

「はい」

「えっと、今は思いつかないのですが」

さしあたって聞きたいこともない。

後、余計なことをしゃべるとこっちの旗色が悪くなりそうという

のもある。

「そうなんですか？」

「そうです」

「それは残念ですね」

けど、マリアさんは含みを持たせる。

「ぶっちゃけ、下着の色とか聞いてもいいんですよ。ちなみに両方とも黒ですけど」

「もう言っちゃってるじゃないですか」

「なら、好きな官能小説の種類とか聞くのはどうです？」

「僕は変態キャラですか」

くすくすと笑うマリアさん。

メイドさんというよりは、やはり小悪魔な感じの女の人だ。

「ちなみに私が好きなのは『義兄との関係』です」

「今度は女性目線？！」

ともあれ、巷の若い女性のあいだでは官能小説が流行っているのだろうか。

しかし、本当に美咲さんと同じ香りがする。

もっともあっちは色気の自覚がなくて、こっちは自覚がある。結論としては無自覚のほうが恐ろしい。
だから、まだ救いはあると言えよう。

「あ、マリアさん」

「なんですか？」

「今、思いつきました」

「？」

首をかしげるマリアさん。

「あの、聞きたいことです」

「そうですか」

「はい。そのマリアというのは本名なんですか？」

僕がそう聞くと、マリアさんはにやりと笑う。

「私を本名で呼んで口説きたいんですね」

「どうしてそうなるのでしょう」

「でも、教えて差し上げません」

僕の唇に手が添えられる。
その蠱惑的な表情に、僕は言葉が出ない。

「マリアはコードネームみたいなもので、本名をさらすのは禁則なんです」

「禁則？」

「はい。私が勝手にそう決めました」

おちゃめなウインクとともに、マリアさんが告げる。

「わかりました。それじゃあしょうがないです」

「期待に応えてあげられなくてごめんなさいね。でも、女の子はミステリアスの方がいいんですよ」

「そうですか」

「はい。なので私は、坂本様の期待に応えたいと思います」

するとマリアさんは、僕のひざの上にちょこんと座ってくる。

意味がわからない。

「いきなりどうしてそうなるんだか」

おもわず敬語が抜けてしまった。

本人に自覚がある方が扱いやすいなんてとんでもなかったのだ。

「あれ？　ひざに乗ってほしいというオーラをびんびんに感じたのですが」

「そんなオーラ一つも出していません」

マリアさんの柔らかな感触を追い払おうとしながらも、僕は言う。

「では、思っていたんですね」

「思ってもいません」

「なら、私の勘違いですか」

「はい、勘違いです」

マリアさんは上品に僕のひざから降りる。

女の子座りをして、今度は僕の隣に腰を下ろした。

「やっと降りてくれましたか」

「降りたのは坂本様が動揺しないからです」

「動揺してましたよ」

「それをおくびにも出さず？」

「そうですかね」

「それよりも坂本様」

「はい、なんでしょう」

「貴方は年上の女の子の扱いに慣れていますね」

「そんなことないです」

「謙遜したって無駄ですよ。私にわかるんですから」

「……」

僕がどう反論しようか黙っていると、マリアさんがやにわに立ち上がった。

「さて、私も十分楽しみましたし、そろそろ準備の方に取り掛かりますか」

「楽しんでたんですか」

「はい」

マリアさんがいたずらっ子のような笑顔を見せてくる。

「では、行きますね」

「あ、今日はよろしくお願いします」

「はい。お願いされました。それでは待っていてくださいね」

マリアさんはその言葉を最後に部屋を出ていく。

結局、小悪魔なマリアさんに翻弄された僕は、深々とため息をつくのだった。

1－9　勉強会

綾の部屋に一人残された僕は、黙々と簡易机の準備を進めていく。
簡易机は脚を立てるだけでできる簡単な代物で、一人でもすぐに組み立てられる。

「よし、出来た」

簡易机を完成させた僕は、その上に教科書、ノート、参考書を並べていく。
持ってきた教科は英語と数学。

他と比べて、成績が極端に低いのがこの二教科である。
特に数学の時間は、頻繁に絵里ちゃんとメールをしていたせいもあって成績は散々だ。

「あ、そういえば絵里ちゃん」

ちなみに、あれから絵里ちゃんとは会っていない。
あの秘密のデートの日以来、連絡が来ていないのだ。

「春、ごめん。遅くなって」

「あ、うん」

絵里ちゃんのことを考えていたら、ちょうど綾が戻ってきた。
綾はなぜか着替えをしていて、僕の意識はそっちに向けられた。

「綾、どうしたの？」

「ちょっと汗かいちゃったから」

不可解な理由に、僕は首をかしげる。

「綾。今は秋なんだけど」

「いいの。べつに春のために着替えたってわけじゃないんだからね」

「そう」

僕はおざなりに返事をする。

「でも、どうかな？」

「え？」

「私の格好」

「うん。似合っているよ」

綾は、ラフな格好からAラインと呼ばれるワンピースに着替えていた。
まるで本物のお嬢様みたいだ。
馬子にも衣装といえばいいのか。

「それよりも春」

「何？」

「春こそどうしたの？」

「えっ？」

「さっき考えこんでいたみたいだけど」

「あ、うん」

綾のあどけない顔が思ったより近くにあって、僕は困惑する。
もっとも、考えこんでいた内容についてを告げるべきかも悩んでいる。

「たいしたことじゃないよ」

「そうなの？」

「うん」

結局、僕は告げないことにした。
これを告げると、綾との秘密の儀式のことをぶりかえさなくてはいけなくなるからだ。

「さて、私も準備しよ」

綾は自分のバックから教科書とかを取り出していく。

そして一通り簡易机の上に並べ終えると、綾がうんうんとうなずく。

「これでよし、と。ところで春は何からはじめる？」

「僕？」

「うん」

「数学かな」

うんざりするほど厚い問題集を片手にして、僕は言う。

「あー私も数学。やっぱり問題は数学なんだよなぁ」

綾もぼやく。

僕よりも成績がいい綾でも数学は苦手なようだ。

「数学は難しいよね」

「ほんとだよ」

「昔は数字が好きだったんだけどな。算数の頃なんだけど」

「それ、僕もそうだった」

「きっと眠くなるような授業がいけないのよ」

「たしかに。それは言えてる」

それから綾と僕は、数学の教師の教え方を糾弾する。
しまいには彼の人間性に発展してしまい、さすがに二人揃って反省した。

「いけない、春。こんな無駄話している場合じゃなかった。それじゃあ、マリアはまだ来ていないんだけど、勉強会をはじめよっか」

「オッケー」

こうして綾の宣言により、勉強会がスタートと相成った。

1－10　ウサギのように

マリアさんがここに戻ってきたのは、綾が勉強会の開始を宣言してから数分後のこと。
自分の勉強道具を抱えたマリアさんは、僕達を一瞥して素直な感想を口にする。

「もう始めていらっしゃったのですね」

「そうだよ、マリア。こういうのは自主的に始めないと」

なんとも耳が痛い言葉だ。
けど、自主的にやれたら勉強会なんて開かなくてもよいのかもしれない。

「それでマリアの席はここ」

綾は僕達の真向かいの席を指定する。

「ここで私達がわからないことに直面したときに質問するから。わかった？」

「はい。わかりました」

優雅に一礼するマリアさん。

やっぱり彼女は小悪魔系だ。

僕は再度その認識を確認しつつ、手元の問題集に目を通す。

すると、さっそくわからない問題に出会ってしまった。

「ところでお嬢様。今日はあの机の上にあるぬいぐるみを抱えて勉強しないのですか？」

「ちょっとマリア。何言っているのよ」

綾が慌てたように取り繕う。

「春」

「え？」

綾が僕をにらみつける。

何かとばっちりでも飛んでくるのだろうか。

「わ、私。そんなこと稀にしかしていないからね。それと、春が夏祭りに取ってくれたやつでもないから」

「あ、うん。わかったよ」

けど、ぬいぐるみを抱えながら勉強する綾。

それを想像すると、おかしさがこみあげてくる。

「あ、春。今笑った」

「笑ってないよ」

「嘘だっ」

綾が僕のおでこをシャーペンの裏側で突っついてくる。
なので僕は、必死にそれを避けようと身をよじる。

「あの、お嬢様。坂本様」

マリアさんの声に、僕達ははっとする。

「仲がよろしいのは結構なのですが、私がいることを忘れていませんか？」

おもわず二人で顔を見合す。

「うぅー」

そして綾が恥ずかしそうに伏せる。
ちなみに僕も同じ体勢だ。

「元はといえばさ」

綾がこっそりとつぶやく。

「なんでしょうか」

「マリアのせいじゃない」

「すいません、お嬢様。でも、私は事実を言ったまでですので」

マリアさんはにこりと微笑む。

「それにぬいぐるみを抱いて勉強をすることくらいたいしたことないじゃないですか。それよりも、寂しいとの理由で私と一緒に寝てほしいなんて言うことの方が問題だと――」

「マリア」

綾がマリアさんの口をふさごうとする。

けど、ほとんどは聞いてしまった。

綾はウサギのように寂しがり屋なのか。

というよりは、年上にからかわれる構図がまた出来上がっていた。

美咲さんと僕を連想させるこのやり取りに既視感を覚えつつも、とりあえず綾をかばおうとする。

「あ、あの、マリアさん」

「はい。どうしましたか？」

マリアさんは物凄い切り替えの速さでこっちを向く。

僕はそれに戸惑いながらも、質問をする。

「ここの問題、教えてくれませんか」

「いいですよ」

「この代入した後、よくわからないんですが」

「あ、これですね」

「はい」

「これはこうなるんですよ」

マリアさんの心地よい解説が耳朶に響く。

しかも、家庭教師もかくやというくらい丁寧に教えてくれる。

そんな中、綾がナイスフォローという目で僕を見てきた。

1－11　ガム

まずは、午前に一時間半数学の勉強をした。
この一時間半というのが大切で、人が最大限に集中できる時間だという。

そして軽い昼食を挟んで、午後は英語の勉強。
勉強をしている最中、僕はだんだんと無我の境地になっていく。
自分でも信じられないほど集中していて、驚いてしまうくらいだ。

時計のカチコチとした音が響く中、僕は問題に目を凝らす。わからないところがあったら、マリアさんに聞けばいい。

そう考えながらも、僕は順調にノルマをこなしていく。
やがて午後も一時間半が経過し、綾が先に根を上げる。

「春。私疲れたんだけど」

「え？」

「もう限界」

綾がシャーペンを放り投げ、床に行儀悪く寝ころぶ。
ぐてーとなっていて、声をかけるのもはばかられるくらいだ。

「春ー。なんでそんなに集中できてるのさ」
綾の声が批難となって僕に届く。
「どうして？」
「僕にもなんだかわからないよ」
いや、もしかしたら環境の良さがそうさせるのかもしれない。
「環境？」
「うん。きっとそうだ。ここはうってつけの環境だからね」
「私にはわからないけど」
綾が寝ころびながらぼやく。
そして、うつぶせの体勢から仰向けになろうとして転がる。
「いて」
腰の当たりに衝撃を感じたかと思えば、綾がぶつかっている。
転がった拍子のせいか、綾はワンピースの肩口の紐をずらしている。
その姿はとても無防備で、目のやり場に困るものだった。
「坂本様はいつも違う環境で勉強するのが功を奏しているのですね。図書館で勉強するとやけにはかどるといったことがあったりしますが、きっとそれなのでしょう」

マリアさんも似たようなことを言う。

「ということは春、勉強会大成功じゃない」

「そうだね」

「今度は春の家で勉強してみよっかな。そうしたら私だって、今よりもはかどるかもしれないし」

「そうだね。でも、ここよりもかなり狭いなあ」

「そんなの構わないわよ」

「そっか」

「まあ、とにかく今日は私に感謝してよね」

綾がすっくと起き上がる。
腕を組んで僕の隣に座り直す。

「ありがとう。綾」

「どういたしまして」

嬉しさでいっぱいの綾は、こっちも見ていて気分がいい。

「でもさ、綾」

「何？　春」

「後、もう少しだけ勉強しない？」

本当に自分でもどうしたのだろうか。

そう思いながらも、そんなセリフを口にする。

「えー」

「集中力切れてる？」

「うん」

そこで僕は、美咲さんから貰ったガムのことが思い浮かんだ。

このガムを綾にあげればいい。

そうすれば、きっと綾の集中力が高まるに違いない。

「綾」

僕はポケットからガムを取り出し、綾に渡す。

「ガム噛むと集中できるかもよ。だからがんばろう」

「ガム？」

言葉を覚えたての幼児のようにつぶやく綾。

さらには、渡されたガムをじっと見つめる。

意味深なことをしている綾を見て、マリアさんが口を開く。

「坂本様も粋なことしますね」

「粋なこと？」

「はい」

マリアさんはにやりと笑って言う。

「だってレモン味のガムを渡すなんて、遠回しにキスしますよって宣言しているものじゃないですか。あれ？　違いますか？」

「な、何を言っているんですか。マリアさん」

マリアさんの言葉を意識したせいか、おもわず綾の口元に目が吸い寄せられる。

綾は口をあわあわさせて動揺している。

「は、春」

「違うからさ、綾」

「わ、私だってそんな気はないからね」

「うん。わかってるって」

そしてあの気まずい空気がやってくる。

綾と僕は互いに目を合わせずにうつむく。

「まあ、とりあえずは坂本様」

「は、はい」

この空気を救ったのは、原因のタネをまいたマリアさん。

「ここはお嬢様の顔を立てて休憩に致しましょう。私、二人にアイスティーを入れてきますので」

そう言いつつも、マリアさんは立ち上がる。

僕達を残して、部屋を出ていく。

1－12　オアシス

「す、すいません。坂本様」

「……」

「私、時々こうやってドジをやらかしてしまうんです」

マリアさんが僕の前で折り目正しい土下座をする。

というのも、マリアさんは持ってきたアイスティーをひじで倒してしまい、僕にそれがかかってしまったから。

特に被害が酷かったのはズボン。

品のない言い方をすれば、股間付近がオアシスだ。

後、Ｔシャツも若干透けている。

「マリアさん」

「はい」

沈んだ声が聞こえる。

「とにかく顔を上げてください」

「さ、坂本様」

マリアさんは演技ではなく、本当に申し訳なさそうな顔をしている。

「それで、えっと」

僕は先ほど言われたことを思い出す。

「待っている間にお風呂に入ればいいんですね」

「はい。そのあいだに坂本様の洋服をしっかりと洗濯して、その後、乾燥機で乾かしたいと思っていますので」

「そうですか」

「はい」

「でも、そんなに高速で出来るものなんですか？」

「そうですね」

考えこむマリアさん。

結論が出たのか、こんなことを言う。

「あの、少し長めにお願いします」

「わかりました」

「ありがとうございます」

マリアさんは僕から視線を逸らしつつ告げる。
視線を逸れているのは、今の僕が渡されたタオルをかぶっているだけの状態のせい。

女の子二人の前で服を脱ぐのは羞恥の極みだったけど、そんなことを考慮している場合ではない。
まあ、奇跡的にパンツが無事だったのを不幸中の幸いとしてとらえるべきだ。

「綾」

「何？」

「あのさ」

「うん」

「お風呂借りるから」

「も、もちろんいいわよ」

綾はさきほど話題になったぬいぐるみを抱いて、ベットの方にぼふっとうつぶせに倒れ込んでいる。
耳が赤くなっているのは、恥ずかしいからか。

けど、こっちの方が恥ずかしい。
なにせ、この格好だ。

「マリア」

「はい、お嬢様」

「貴女が連れてってあげてね」

「わかりました。でも、どこの浴場ですか？」

「私の部屋の近くのお風呂で」

どうやら綾の部屋の近くにお風呂があるらしい。
というよりも、お風呂がいくつもあるものなのか。
ちなみに東風荘には一つもない。

「あ」

「どうしました、お嬢様」

「ちょっと待って」

「お嬢様？」

やにわに綾が立ちあがり、部屋を出ていく。
そして、廊下を走っている音が聞こえる。
おそらく浴場に向かっているに違いないだろう。

1－13　しりとり

綾の家のお風呂は浴場と呼べるくらい広かった。
イメージしている一般家庭のお風呂よりもはるかに大きくて、一人でこの浴場を使っているのを困惑してしまうくらいである。

「坂本様」

「はい、なんでしょう」

「湯加減はどうですか？」

ガラス越しからマリアさんが問いかけてくる。

「あ、ちょうどいいです」

「では、問題ないのですね？」

「はい」

と、僕は答える。

「それで坂本様。今現在の状況なんですが、ちょうど洗濯の方が終わったところです。後は乾燥機にかけるだけですね。なのでもう少

しだけ我慢していただけないでしょうか」

「はい、わかりました」

「そのあいだ、私も暇ですのでお背中でも流しますか？」

「いえ、結構です」

僕は思い切りよく否定する。

「心配しなくても裸ではしませんよ。水着ですから」

「そんなこと微塵も考えてもいませんので」

「あら。では、裸の方がいいんですか？」

「違います」

「それならヴィクトリア朝のメイド服ですか。またマニアックですね」

「なんで背中を流させてもらうことが前提なんですか。こっちはそこから否定してるんですよ」

僕は息をぜいぜい切らせながら告げる。

「そうなんですか」

「はい。そうです」

「それは残念ですね」

マリアさんは落ち込んだような声色で言う。
しかし、マリアさんもいくらか調子が戻ってきたみたいだ。
いつまでも落ち込まれていては困るから、これくらいのでいいのかもしれない。

「あ、お嬢様」

「マリア」

突然シルエットが二つになったと思えば、綾まで来ていた。
何の用だろうか。
ガラス越しで二人のやり取りが聞こえる。

「お嬢様も坂本様のお背中を流しにきたのですね」

「な、何言ってるのマリアっ」

綾が慌てているのが手に取るようにわかる。

「違うからね、春」

「うん」

「それでお嬢様は何用ですか？」

「なんとなく来たのよ」

「なんとなく？」

と、僕は聞く。

「そう、なんとなく」

それを聞いて、僕は苦笑いのようなものこみあげてくる。

どうやら、綾は綾で直の口癖が移ってしまったらしい。

「後、春がさ、もう長いことお風呂に入っていて暇だと思ったから」

「うん。たしかにそれもあるけどさ」

僕はさらに言葉を重ねる。

「でも、綾も暇だった？」

「うん。それもある」

珍しく素直な幼馴染。

そして僕は、ふいに懐かしい想いに囚われる。

昔、暇になるとよくやりたがった遊びの一つに、『ん』のつくしりとりというのがあった。

しりとりをするとき、いつも省かれてしまうのが『ん』のつく単語。

それを幼心にかわいそうだと思った綾が、後ろから二番目の文字でしりとりをすることを発見したのだ。

たいしたことではないかもしれないが、幼かった僕達には物凄い発見に思えた。

「綾」

「何？　春」

「久しぶりにさ、あの遊びやらない？」

「あの遊び？」

綾が聞いてくる。

やはり、あの遊びだけでは通じないと思っていた。

けど、昔は通じていたのだから、そこに時の流れを感じてしまう。

「あのさ、『ん』がつくしりとりだよ」

「あー」

綾も思い出したみたいだ。

「やろっか、綾」

「うん。でも、久しぶりだなぁ」

綾も懐かしそうに言う。

そこでマリアさんが口を割って入ってくる。

「えっと、お嬢様と坂本様。いい雰囲気なのは結構ですが、私の存在を忘れていませんか？」

「あ」

「あ」

二人して声を上げる。

なんせおっしゃる通りだったからだ。

1－14　集中力

お風呂から上がって、綾の部屋でほっこりとくつろぐ。
入れ直しのアイスティーを飲み干し、これからの予定を綾と立てる。
予定とはもちろんこれからの勉強会のことだ。

「で、春はどうしたい？」

「どうしたいってさ」

「私はもう一回集中できそうだけど」

「僕はもう集中できなさそうだけど」

綾と僕の意見が食い違う。

「でも勉強会だし、もう少し頑張ろうよ」

綾に諭される。

「そうだよね」

「何、その返事」

「うん。自分でもそう思う」

さっきとは立場が逆転している。

けど、あんなことがあった後だから、集中力が切れても仕方がない。

なにせ、お風呂にまで入ってしまったのだ。

「春」

「ん？」

「さっき貰ったガム返すからさ」

「あ、今度はお嬢様から遠回しの愛情表現ですか」

「マリアはちょっと黙ってて」

「はい」

マリアさんは、ちゃめっけたっぷりに舌を出す。

そしてしゅんとへこむふりをする。

「それで勉強しようよ」

「うーん」

僕は、さっき自分が難しいことを要求していたんだと思い知る。

一度集中力が切れたら、立て直すのがなかなか難しい。

集中力とは勝手気ままなものである。

「これで終わったら、お嬢様はきっと寂しいんだと思います。だから坂本様、もう少し勉強会を続けませんか？」

「マ、マリアっ。余計なことを」

「すいません」

マリアさんがにやりと笑う。
その笑みはやはり小悪魔だ。

けど、マリアさんの一言で、僕はもう少しやって見ようと思った。
なぜだか理由はわからないが。

「綾。あのさ」

「何？」

「僕、もう少しやってみるよ」

「ほんとに？」

「うん、ほんと。だからさ、ガムちょうだい」

「あ、わかった」

綾からガムを渡される。
再度、手元に来たガムの奇妙な変遷を考えながらも、結局は僕のところに収まるのかと感慨深げになってしまう。

「さて」

僕は紙包みを開け、ガムを放り込む。
レモン味特有の酸味が口の中に広がり、やる気が芽生えてきた。

「春、いけそう？」

綾があどけない顔を近づけて聞く。
なので僕は、顔を逸らしながら答える。

「大丈夫」

「うん」

「な気がする」

「気がするってさ」

「気がするだけかもしれないけど、なんとなくいけそうだよ」

「そっか」

「うん」

「じゃあがんばろっか」

綾が腕まくりして言う。

「そうだね」

と、僕は返す。

こうして、僕達はもうひと頑張りすることとなった。

勉強会はまだ続いていく。

1－15　条件

時計の針が午後五時を回り、僕の集中力はすでに限界を迎えていた。
アイスティーを浴びる前まではあんなに集中できていたのに、あれ以来パッタリとダメになってしまっている。
集中力の不思議さに思考を巡らしながらも、僕は隣を覗き見る。
綾はときおり髪をかき上げつつも、熱心にシャーペンを走らせている。
一心不乱に勉強していて、隙がないくらいだ。
僕はそのあどけない横顔に視線が吸い寄せられそうになりはっとする。
何かを一生懸命にこなす姿は美しい。
けど、幼馴染に見とれる要素はない。

「はぁ」

深くため息をつきながらも、手持ちぶさたになった感のある数学の問題集をペラペラとめくる。
そしてマリアさんに小声で告げる。

「マリアさん」

「なんでしょうか？」

マリアさんも小声で応対する。

「もう限界みたいです」

「限界ですか」

「はい」

ノートには適当に書いた落書きが散らばっている。

直の書く絵とは違ったレベルの低い落書きだ。

「綾は凄いですよ」

「坂本様も、私がアイスティーをこぼす前ではたいした集中力でしたけど」

「ということは、マリアさんのせいになりますね」

僕はあっさりと人のせいにする。

「すいません」

にこりと笑うマリアさん。

「おわびに抱きついてきてもいいですよ」

「何を言ってるんですか」

小悪魔な笑みを浮かべて、とんでもないことを言う。
なので、僕はおもわず大声を上げてしまった。

「春？　どうしたの？」

「あ、なんでもないよ。綾」

「そう？」

「うん」

「そっか」

綾はまた勉強に戻っていく。
ほんとにものすごい集中力だ。

「……」

やっぱり暇になった僕は、マリアさんに聞きたかったことを聞いてみる。
もちろん、本当の名前以外のことについてだ。

「あの、マリアさん」

「はい」

「マリアさんは字がきれいですね」

「私の字がきれいですか？」

「そうです。何度か問題の質問をしたときに、ノートに書いてくれましたよね。そこで感心しました」

そう、マリアさんの字はとてもきれいだ。
ペン字でも習得しているのだろうか。

「コツとかはあるんですか？」

「そうですね。コツはありますよ」

「そうなんですか。それでコツとは？」

「それは……あ」

幼子がいたずらを思いついたような顔。
けど、マリアさんにかかれば、それも小悪魔っぽくなる。

「教えて差し上げてもいいですけど、条件があります」

「条件？」

「そうです。それで条件なんですが、お嬢様とスキンシップをしてください」

「はい？」

おもわず変な声が出てしまう。

「マリアさん」

「どうしました？　坂本様？」

怪訝な表情をしている僕を見て、マリアさんが疑問を口にする。
僕もマリアさんの表情を見て、率直な感想を口にする。

「貴女、またおかしなことを企んでいますね」

「いいえ、純粋にそうするべきだと思ったからです」

「綾と僕はスキンシップをする関係でありません。ただの幼馴染ですから」

「そうですか。でも、スキンシップ気持ちいいですよ」

そもそもマリアさんが言うと、あまりいい意味には聞こえない。
いい意味どころか、悪い意味に聞こえてくる。

「で、どうでしょう？」

「いいえ、結構です」

「残念ですね」

「マリアさんが残念がることじゃないでしょう」

結局、僕は一刀両断にして断わった。
けど、マリアさんは親切で、字を上手に書くコツを手取り足取り教えてくれた。
そうして時間は過ぎていき、勉強会はお開きとなった。

1－16　スキンシップ

「春、また明日」

「うん。じゃあね。綾」

無事勉強会が終了して、僕は綾の家を出る。

綾が広い玄関の前で手を振ってくるので、僕も同じように振り返す。

なんだか昔遊んだ時のようで、少しだけ和んだ。

「あ、春」

「何？」

「今日成果はあったよね」

「もちろん十分にあったよ」

僕がそう答えると、綾は満面の笑みを浮かべて言う。

「良かった」

「こっちも良かったよ。マリアさんにアイスティーをかけられて、自分の服を脱ぐことになる以外はね」

「そうだね。それにしてもあれは酷かった」

綾がくすっと笑う。

「綾、笑わないでくれよ。こっちは恥ずかしかったんだから」

「わ、私も恥ずかしかったし」

「そっか」

「うん」

一瞬だけ会話が途切れ、綾がむりやり言葉を繋げる。

「あ、えっと、それで今後も勉強会は続けよっか」

「うん。それがいい」

「今度は春の家。直も一緒に出来るかな？」

「きっと大丈夫さ」

僕は希望的観測を口にする。

「それでさ、綾」

「ん？」

「今度いつにする？」

僕は聞いてみるが、綾の顔はみるみる曇っていく。

「あ、ごめん」

そうだったと思いだす。
綾は家の事情で忙しい。
そもそも今日みたいに丸一日開いている日が珍しいのだ。

「春」

「え？」

「春っ」

綾が僕の名前を呼んで抱きついてくる。
けど、僕は綾の突飛な行動についていけない。
なすがままにされてしまう。

「私、戦うから」

「戦う？」

「自分らしさとか、自由とか」

「自分らしさ？　自由？」

「うん」

たしかに髪切り事件があって以来、綾は変わった。

何がきっかけになったかは知らないけど、お嬢様でいることを控え、自分らしさを全面に出すようになった。

けど、自由の方はどういう意味だろうか。
それは秘密の遊戯と関係してくるのか。
しかし、そんなことを考えている憂慮はなかった。

「綾」

なぜなら、僕達は軽く抱き合っている。
情けないことに、僕には対抗するすべがない。

どうやら、綾も自分が何をしているか気がついたようだ。
みるみるうちに頬が赤くなっていく。

「春」

ばっとすごい勢いで離れる綾。
これはもう脱兎の勢いだった。

「……」

「……」

お互いに顔を伏せ、次の言葉を探す。
やがて、綾が慌てたように口を開く。

「こ、これは感極まって抱きついてしまっただけ。他意はなくただのスキンシップなんだからね」

「ス、スキンシップ？」

「何よ」

「なんでもない」

「そう、ならいいけど」

しかし皮肉にも、僕はマリアさんの言ったことが思い浮かんでしまった。

1－17　風邪

バスに揺られることに二十五分。
その間、僕はついさっき起こった出来事が脳裏に焼きついて離れないでいる。

帰り間際、綾に抱きつかれて、自分らしさや自由などと戦う宣言されたこと。
綾にはどういう意図があったのか。
僕にはわからない。

けど、物事は深刻に考えすぎないようにするのが大切で、そのことと自分との間に適切な関係を築けるかがポイントだ。

とにかくシンプルが一番。
僕が綾の手助けになるのならそれでいい。
そうに違いない。

「うん、やっぱりそうだ」

やがてバスはいつもの小学校前で止まり、僕はそこで降りる。
自分の影を見つめながら、東風荘までの短い道のりを歩く。

「三号室、と」

表札の坂本を確認し、ドアの鍵を開ける。
そして部屋に入ると、直が机に突っ伏していた。
しかも、なんだか様子がおかしい。

「直」

慌てて近くまで行き、直の様子を窺う。
額には、あまり良くない種類の汗をかいている。
直のおでこに手を当ててみると、やっぱり熱があった。

「あ、春」

直が僕に気がつく。
しゃべるのも億劫そうだ。

「直、大丈夫？」

「くしゅ」

小さなくしゃみ。
ティッシュを直の近くに持っていく。

「大丈夫じゃないね」

「ん」

さて、どうしたものか。
まずは直を布団に寝かせるべきか。

「直、布団敷くからちょっと待ってて」

「うん」

僕は押し入れから布団を取り出して、いつも二人で寝る場所に敷く。

とはいっても寝室ではないから、この部屋の生活空間を見事に浸食した。

「春」

布団に体を休めた直が、僕を呼ぶ。

「直、どうしたの？　それと無理にしゃべらなくていいから」

「ううん。いいの」

「良くないよ」

「ううん」

直が喘ぎながらも、言葉を漏らす。

本当に辛そうだ。

「でも、これだけは言いたくて」

「え？」

「ありがと」

「ありがとう、だなんて」

直は僕にとって大事な妹。
この広い空の下、大切な繋がりを感じられる唯一の存在。

「当たり前のことだから」

「私、春がそう言ってくれて嬉しい」

そう言った後、直が咳をする。

「安静にしてないと」

「ん」

それにしても、直が風邪をひくことなどあったのだろうか。
最近ではとんと記憶にない。
特に、この東風荘に来た二年前からは一度もなかったと思う。

「直、これからおかゆを作るね」

けど、直は首を振る。

「台所は男子禁制」

「解禁しなさい」

「努力で私が」

「翻意しなさい」

「春」

「だめだよ」

涙目で見つめてくる直。

けど、だめなものはだめなのでしっかり言い聞かせる。

すると、直はようやく納得してくれた。

1―18　おかゆ

直を料理の件で説得した後、僕は体温計を持ってきて熱を計らせる。
直は最初、ぐずる子どもみたいに嫌がったけど、やがて観念したらしい。
大人しく体温を測り始め、その数値を報告してくれた。

「三十八度二分」

「すごい微熱」

「じゃないからね、直」

こんなときにボケはいらない。
直の言葉を軽く聞き流しつつも、僕は冷蔵庫から冷えピタを持ってくる。
坂本家では、水枕の代わりにこの冷えピタを使う。

「直」

「あ」

どうやら僕が持ってきたものに気がついたらしい。

「これ使って」
冷えピタを直の額にくっつける。
「んー」
「冷たすぎる？」
「ん、冷たい」
「そっか。タオル持ってくるよ」
順序が逆だったな、と僕はひそかに反省する。
そして、タンスからタオルを取ってきて直に渡す。
「はい、タオル」
「ありがと」
「じゃあ、僕はおかゆを作るから」
「わかった」
直の言葉を聞いて、僕は久しぶりに台所に立つ。
料理をしていない期間は二週間。
なので、久しぶりすぎて手順を忘れている。
「とりあえずセリ、と」

冷蔵庫からセリを取り出す。
なぜセリかといえば、坂本家ではおかゆを作る時に使うという不文律の決まりがあるからだ。他にも、鍋にホウレンソウ、ハンバーグに豆腐といったように、必ず使う組み合わせがあったりする。

ともあれ、僕はおかゆ作りを順調にこなしていく。
最後に卵を落とし、セリをまぶして完成。
ガスの火を消して、小鍋から器におかゆを移す。

「直。できたよ」

「ん」

「一回起きて」

僕は直をゆっくりと起こす。
やはり直の体は熱っぽい。
後でタオルか何かで拭かなくてはいけないなと思う。

「春」

「何？」

「もしかしてさ」

「うん」

「食べさせてくれる？」

何やら期待を込めた目で見つめてくる直。

今日ばかりはしょうがないと観念する。

「わかったよ」

僕がそう言うと、直は無表情で喜ぶ。
そして、小さな雛鳥みたいに待っている。

「はい、口開けて」

「ん」

直の口元まで、おかゆを持っていく。

「あつっ」

「あ、ごめん」

「熱いよ、春」

うっかりしていた。
覚ますのを忘れていた出来たてのおかゆは、熱すぎるほどに熱い。
直は少しだけ膨れて言う。

「春、冷まして」

「うん、わかった」

今度は慎重に冷ましていく。

「ふーふー。これでいい？」

「ん」

「はい」

ぱくっとレンゲをくわえる直。

今度は何の問題もなく、直はゆっくりと咀嚼する。

「おいしい」

「そっか。それで直、味わかる？」

「大丈夫」

「食欲は？」

「ある」

「それは良かった。じゃあ全部食べれるね」

「ん。春が冷ましてくれるなら」

1－19　看病

直の食事が終わった後、自分も同じようにおかゆにする。
そして早々と夕食を切り上げて、直の看病をこなす。

「くしゅ」

「はい。チーして」

「チー」

食べている最中はそうでもなかったのだが、直は徐々に風邪の症状が出始めている。
特にくしゃみが止まらない。
くずかごはティッシュでいっぱいだ。

「くしゅ」

「はい。チーして」

「チー」

これを何回か繰り返す。

「そうだ、薬」

ここに至ってというべきか、一番先に思いつかなければならないことを今思いつく。
僕は救急箱を取り出し、市販の風邪薬を探す。
「あった。直、薬」
水を入れたコップと一緒に薬を渡す。
「薬、嫌だな」
「わがまま言わない」
「だって粉薬。錠剤は？」
「なかったよ」
それを聞いて、直は無表情で残念がる。
「とにかく我慢して」
「ん。でも」
「でも？」
「飲ませて」
「え？」
「お願い。お兄ちゃん」

必死すぎて、お兄ちゃんって呼んでいる。

「しょうがないな」

要求通り、僕は直に薬を飲ませる。

自分で飲んだ方がタイミングとか図りやすくていいと思うのだが、それは言わない。

「直。後、汗ふかないと」

「ん」

直の体は汗でぐっしょりになっている。

かといって、銭湯に行ける状態ではない。

なので、僕は汗拭き用のタオルを持ってきて直に渡す。

「はい」

「？」

しかし、直は首をかしげる。

どうして渡されたのかわからないといった感じだ。

「春、やってくれないの？」

「それはさすがに無理だよ」

僕はやんわりと断る。

「でも、背中とか届かない」
「背中？」
「うん」
直が見つめてくる。
結局、僕はその圧力に負けた。
「わかったよ」
「じゃあ、服脱ぐ」
「あ」
僕が止める間もなく、直はぽいぽいと服を脱いでいく。
羞恥心のない直は、僕の前でも平気で着替えをしてくる。
「拭いて」
パンツとブラの格好でうつぶせになる直。
妹とはいっても、さすがに平常心ではいられない。
手早くすませ、直にタオルを渡す。
「後はさ、自分でやって」
「ん」
直が恥ずかしげもなく、自分の体を拭いていく。
僕はその無頓着さに危機感を覚えつつも、いたたまれなくなって

目を逸らす。

「春」

「何？」

「パジャマ着せて」

「え？」

確実に甘えたさんになっている直。
僕は困惑しながらも言う通りにする。
四苦八苦しながらも、パジャマを着せてあげる。

「ありがと」

「うん。でも、今日だけだからね」

「ん。後、手を繋いで」

ここまでくると微笑ましくなってくる。

「繋ぐよ」

「ん」

直が無表情で満足そうな顔をする。
そしてそのまま、直はすぐに眠りについた。

120　分身

翌朝、月曜日。
いつもは直に起こしてもらう僕も、今日はさすがに自分で起きる。やろうと思えば簡単に出来るもので、ずいぶんあっさりと目覚めることに成功する。

隣を見ると、直はまだ眠っている。
息苦しそうに寝返りをうっていて、額には汗をかいている。
まだ、風邪は完治していないのかもしれない。

僕はカーテンを開けることを自重して、洗面所に向かう。顔を洗い、着替えをして、朝ご飯作りを開始する。
そして、お味噌汁を作っている最中に直が起きてきた。

「春」

パジャマのそでで目をこすりながら、僕を名前を呼ぶ。

「直、おはよ」

「うん、おはよ」

「まずは体温を測って」

僕は直に体温計を渡す。
直は大人しく、体温を測り始める。
しばらくして、ピピッと音が鳴る。

「何度？」

「三十七度五分」

「まだあるね」

「ん」

直がかしこまってうなずく。

「今日、学校はどうしよう」

「その熱なら無理かな」

「でも、行きたい」

「だめなものはだめだよ」

僕は即座に答える。

「じゃあ、春は？」

「僕？」

「うん」

「もちろん行くもんか。直の看病と暇つぶしの相手になるさ」

「いいの？」

直が身を乗り出して聞いてくる。

「いいんだ。当たり前だよ」

「学校の勉強は？」

「昨日、勉強の貯金をたくさんしてきたから」

「けど、しすぎてもしすぎることはないよ」

「じゃあ、しなくてもしなさすぎることはないね」

「今の意味不明」

直が無表情で笑みを浮かべながら言う。

「とにかく、僕は直の看病をするって決めたんだ」

これは昨日からずっと考えていたことだ。
病気をしている時、一人でいるのは心細い。
心細いのはさびしくて、気分まで鬱々してくる。

「それとさ、もし酷くなったら、誰も直を病院に連れて行けないじゃないか。そうなったら困るよね」

「ん。でも、これ以上酷くはならないと思う」

「ほんと？」

「うん。回復に向かっている」

「それは良かった」

直がそう言うのだからきっとそうだろう。
けど、今日一日は学校を休むことに決めていた。
安静という言葉がある。

「ところで直」

「ん？」

「朝ご飯は食べれるよね」

「あ」

直がすっとんきょうな声をあげる。

「何？　どうしたの？」

「料理しないと」

「まだだめだよ、直」

直は無言で不満を表す。

「うっかり包丁でも落としたら大変じゃないか」

「でも」

「だめなものはだめ」

「じゃあ、せめて私の代わりにこれ」

「え？」

「私の分身」

「直、そこまではちまきに思い入れないで」

これは美咲さんに責任を取ってもらう必要がある。

直をはちまき好きにした責任を。

1―21　デッサン

学校に連絡して、直と僕は休みを取る。
中学に入ってから学校を休んだのは、家のごたごたがあった一年生の時以来。病気で休むのは小学生の頃までさかのぼる。

朝食を食べた後、直は布団に横になる。
僕は直の様子を見ながらも、近くで勉強を開始。
昨日の勉強会でマリアさんに教えてもらったところを復習して、約一時間が経過した。

「春」

「何？」

「暇かも」

「病人だから寝ていないと」

「絵描いていい？」

「絵？」

「うん」

直がこくりとうなずく。

「具合大丈夫なの？」

「昨日よりはずっといいみたい。だからいい？」

「そっか。じゃあしょうがないな。いいよ」

結局、僕は許可してしまう。

要するに、直の熱意に負けてしまったのだ。

「やったぁ」

直は起き上がり、ハンガーに掛けてある制服の徽章近くのポケットからメモ用紙を取り出す。

そして、ペンも一緒に取り出して準備万端。

「春、それでお願いがあるんだけど」

「うん」

直のお願いときたら、それが何かはもう決まっている。

スケッチに関することに違いない。

「これでいい？」

僕は背筋を伸ばして、勉強する姿勢を保つ。

これはポーズをとっているのだ。

「ん。オッケー」

そして直はデッサンを開始。
全てを見透かしてしまいそうな切れ長の瞳が僕を見つめる。
いつもと変わらない直の視線だ。

「出来た？」

「もう少し」

二、三分置いてまた聞く。

「そろそろ？」

「もうちょっと」

いつもより長い直のデッサン。
なぜかわからないけど、気合が入っているのかもしれない。
さらさらとペンを走らせる音がよく聞こえる。

「よし、出来た」

その直の言葉を聞いて、僕は肩の力を落とす。
時間が長かったせいか、いつも違った感覚がある。

「今日は時間かかったね」

「うん。デッサンは早く書くのがとりえなんだけど、なんか時間をかけたくなった」

「そうなの？」

「そう。なぜだかわからないんだけど」

「そっか。まあ、とりあえず見せてよ」

「ん」

直の書いたメモ帳を渡されて見ると、確かにいつもより時間がかかるのもわかるほどの出来栄えだ。直の特徴でもある、写実的な面も良く出ている。

「やっぱり上手いな」

「ありがと」

若干、得意そうな直。

「でも、ちょっと疲れた」

「まだ治ってないからね」

「ん。それに集中力も使うから」

「たしかに集中力は使いそうだ」

デッサンをかき終えた直は、また布団に横になる。

「そういえば、熱測った？」

「測った」

「いくつ？」

「三十七度三分」

「下がったね」

「微熱？」

「そうだよ」

と、僕は言う。

今度こそ正真正銘の微熱だった。

1－22　メール

スケッチを終えた後、直は昼まで睡眠を取る。どうやら順調に回復しているようで、昼ご飯も何の問題なく食べてくれた。
午後は家事や雑務などをこなしながらも、二人でまったりと過ごす。

話題は迫りつつある東風荘主催のハロウィンパーティのこと。
直も僕もその日が来るのを楽しみにしている。
そうして時刻は三時を回り、一息ついたところで携帯を見る。

「あ」

「どうしたの？　春」

すっかり調子が良くなった直は、布団を畳んで服に着替えている。

「結構メールが来てたからさ」

小倉くん、鈴木くん、綾、そして絵里ちゃん。
小倉くんからは二人が休みだと聞いて思わず脱ぎそうになったとの報告。意味がわからないが、つっこまないようにしておく。

鈴木くんと綾からは普通のメール。
この二人には無難なメールを返す。

「で、絵里ちゃんか」

絵里ちゃんとは、あの日に僕が失礼なことをして以来のメールのやり取りだ。

文面は過剰すぎるほどこっちを気遣ってくれている内容で、ずる休みの僕は申し訳なくなってくる。

結局、直が風邪であることを伝え、心配はいらないと絵里ちゃんにメールを返す。

「あのさ、直」

「ん？」

「直も携帯見てみたら？」

「携帯？」

直が切れ長の瞳で僕を見つめる。

「うん」

「わかった」

直も携帯を開く。

「私にも、綾とかからメールが来ている」

「そっか」

直が携帯でメールを打ち込む。
あまり携帯を使わない直にしては、珍しい光景でもある。

「できた」

直が文面を見せてくる。
書いてある内容は通り一辺倒なことだ。

「見せなくってもいいって」

「ん、そうだね」

直は僕の言葉に納得する。

「じゃあ、送信」

携帯を持った手を振り回しつつ送信のボタンを押す直。
それを見て、笑いがこみあげてくる。

「春。笑った？」

「笑ってないよ」

「ううん。笑った」

「笑ったかもね」

僕はごまかすためにそっぽを向く。
直はしつこく追求してくる。

「春」

「まあ、落ち着いて」

「だって笑った」

「笑ってないって」

どうも納得がいっていない直。
直の機嫌を損ねないようにあることを聞いてみる。

「直。今日の夕食は何が食べたい？」

「夕食？」

「うん」

「私が作る」

「だめ。今日一日は休みなさい」

僕は間髪いれずに返答をする。
そのせいか少しだけ不満を示す直。
どうやら逆効果になってしまったみたいだ。

「じゃあ、勝手にハンバーグにするよ」

もちろんハンバーグには豆腐をつなぎに使うことが確定している。

「いいね？」

念を押す。

「春の好きにして」

直はそう言うが、大好物であるハンバーグの前に喜びを隠せない。無表情ながらもかなり喜んでいる。

「それとも、煮物を中心とした和食にしようかな」

「えっ？」

「嘘だよ」

「もうっ」

おもわずからかってしまった僕に、直がため息を漏らす。

1－23　再び風邪

「あれ、声が、がらがらに、なって聞こえるよ」

腹話術の真似をしてみても、特に何の意味もない。
ただ単に声がおかしいだけだ。

「春、風邪」

「直」

直にジト目を向けてみる。

「ん、ごめん」

「まあ、しょうがないか」

翌朝、僕は直に促されてもなかなか起きれないでいた。
なんかおかしいと感じつつも立ち上がろうとしたけど、まったく立てない。

そしてその時にようやく気がつく。
体がふらふらしていたのだ。

「今度は僕の番なわけだ」

「ん」

「くしゅん」

そしてくしゃみ。

直は僕のところまで来て、ティッシュを持ってくる。

「チーして」

「チー」

「もう一回」

「チー」

これを何回か繰り返す。

けど、あまり効果はない。

くずかごがテイッシュでいっぱいになっただけだ。

「くしゅん。げほげほっ」

今度は咳まで出始めた。

「春」

「ん？」

「体温計」

「どうも」

直が体温計を渡してくる。
熱を測ってみると三十八度もあった。
一昨日の直よりは低いけど、朝の体温としては高すぎるほど高い。

「えっと、すごい微熱？」

「そこでボケを重ねない」

「先に言った直が言うセリフじゃないからさ、それ。後、昨日のはボケだったわけ？」

不満と疑問をぶつけるけど、直はあっさりと受け流す。

「私、学校に連絡する」

「ということは、今日も休みか」

「ん」

「で、直はどうすんの？」

「行くもんか。春の看病と暇つぶしに相手になるさ」

直は昨日の僕の真似をして言う。

「そっか」

「うん」

「まあ、でも心強いよ。ありがとう」

「どういたしまして」

こうして直と僕は二日続けて学校を休むこととなる。

「二日連続だね」

「しょうがないよ」

と言いつつも、切り替えて家事に雑務に勤しむ直。

直は完全に回復したらしく、僕の献身的に看病をしてくれる。
おかげで、僕の風邪も午後には快方に向かう。

「お昼はおかゆ」

「うん」

「で、夜は春の好きなもの」

「わかった」

宣言通り、昼はおかゆ、夜は僕の好きなぶりの煮付けを作ってくれる。
味はいつもの直と変わらなかったけど、風邪をひいていたせいか嬉しさでいっぱいになった。

「はい。体温計」

「どうも」

そして寝る前、最後に熱を測る。

「三十七度二分だ」

「ほんと？」

直が驚きながらも聞いてくる。。

「うん、ほんと」

「熱、だいぶ下がった」

「そうみたい」

直の風邪の傾向からいっても、このまま治りそうだ。

「明日は学校いけるといいね」

「そうだね、直」

直は僕の隣に自分の布団を敷く。

心なしかいつもより近い。

「春。また私にうつせばいい。そうすれば早く治る」

「そんなことしたらずっと風邪のぶりかえしじゃないか」

「冗談」

「そんな冗談よくない」

「ん。たしかに」

直がシーツのすそを足で伸ばすいつもの癖をする。

「おやすみ、春」

「おやすみ、直」

電気を消して、就寝に備える。

2－1　吉田　栞

翌日、僕達は久しぶりに学校へ向かう。
この車の往来の多いイチョウ並木を通り、門をくぐっていく。
教室のドアを開けると小倉くんが真っ先に駆け寄ってくる。

「春、風邪大丈夫なのか？」

「うん」

小倉くんは今にも脱ぎそうな勢いで話しかけてくる。

「春がいないあいだ、大変だったんだぞ」

「え？　どうして？」

心当たりがないので聞いてみる。

「隣のクラスの遠藤、それと一年生の都築とかいうかわいい後輩。二人でてんやわんやの大騒ぎをして、オマエは今渦中の人だぜ」

「どういうこと？」

僕は話しの顛末を聞いてみる。

小倉くんが言うには、どうも月曜日、昼時に二人が僕を訪ねて来たらしい。
こうして鉢合わせとなった二人は、僕の席でこんなやり取りをしたという。

――あの、やっぱり先輩と付き合っているんですか？
――つ、付き合っているわけないじゃない。春とはただの幼馴染なんだからね。

「とは言いつつも、遠藤はまんざらでもない感じだったぜ。まあ、こんなことを言えば、ファンクラブににらまれるかもしれないが」

そして小倉くんはさらに言う。

「だいたいさ、俺は不思議に思っているんだよ。どうして春と遠藤は付き合ってないのかって。遠藤はきっと春のことを恋愛的な意味で好きだろ」

「いや、それはないよ」

僕は否定する。
幼馴染の綾に限ってそんなことはあり得ない。
根拠はないけれど、ずっとそう思っている。

「じゃあ、あの後輩はどうだ？」

「絵里ちゃん？」

「そう、その子だよ」

小倉くんが思い出したように言う。

「絵里ちゃんか」

たしかに絵里ちゃんからの好意は感じなくもない。
けど、それは親しい先輩としての好意で、付き合うかどうかの話はまた別である。

「で、どうなのさ」

「想像できないよ」

「そうかい。でも、それが春だからな」

「え？」

僕は首をかしげる。

「ああ、なんでもないぞ。とりあえずドアの前で立ち話しをしているのもあれだし、中入ろうぜ」

小倉くんが促し、教室の中に入る。
自分の席に座ると、小倉くんが休み中にあった出来事や、趣味の話しなんかをしてくれる。
僕はいつも通り聞き役に回り、相槌を打つ。

やがてチャイムが鳴り、小倉くんも席に戻る。
そして、久しぶりの授業に気合を入れようとしたその時だった。

「あ、あの、坂本くん」

隣の席の吉田さんが、僕に声をかけてくる。
いつも控え目で大和撫子な彼女が声をかけてくるのは珍しい。
だからか、どこかぎこちない感じもある。

「か、風邪治った？」

「あ、うん」

なんだかこっちもぎこちなくなる。
普段、吉田さんと会話をすることが少ないせいだろうか。

「でも、まだ少しのどが痛いかな」

「そ、そっか」

「うん」

「だったらね、坂本くん。のど飴いる？」

吉田さんはわたわたしながらも、鞄からのど飴の袋を取り出す。
動作に落ち着きがある吉田さんにしてはあまりない光景。
なので、僕は驚く。

「のど飴？」

「う、うん」

「ありがとう。貰うよ」

吉田さんからのど飴を手渡される。

「後ね、坂本くん」

「うん、何？」

「ノート」

「ノート？」

「貸すから」

おずおずと渡されるノートの束。

「休んでたところ写して」

「ありがとう」

ノートは誰かに借りようと思っていたから大助かりだ。
けど、一つ疑問に思ったことがあるので聞いてみる。

「あの、どうしてそんなに親切にくれるの？」

「あ」

と言ったきり、固まってしまう吉田さん。
僕はその様子を見ながらしばらく待っていると、ようやく吉田さんが口を開く。

「と、隣の席だから」

瞬間、吉田さんの顔がなぜか赤く染まっていく。

「それ隣人を愛せよってやつ？」

「あ、愛っ！」

「ごめん大げさすぎたね」

「う、うん」

吉田さんががくがくと首を動かしている。

2－2　図書室へ

昼休み。
ノートを全て写し終えた僕は、図書室へと向かう。
理由は図書委員でもある吉田さんに、感謝の意をいち早く伝えるため。
図書室は三年の教室から近く、すぐにでもいける。
「小倉くん。じゃあ、ちょっと図書室に行ってくるよ」
「図書室？　珍しいな」
「まあね。ちょっと用事があるんだ」
「これか」
小指を差し向けてくる小倉くん。
「違うって」
と、僕はやんわり否定する。
「じゃあ、俺、鈴木達のところ行くわ」

「そうしてくれると助かるよ」

「おう」

僕は席を立ち、教室を出る。

図書室へと続く廊下を曲がったところで絵里ちゃんと出くわす。

「あ、先輩」

「絵里ちゃん」

絵里ちゃんは、前会った時とかわらない笑顔を僕に向けてくれる。

先日、僕は絵里ちゃんに酷いことをした。愛想を尽かされても仕方がないことを平気で行ったのにだ。

「こんなところで会うなんてめずらしいですね」

「そうだね」

絵里ちゃんは何冊かの本を抱えている。

きっと図書室にいくのだろう。

「先輩も図書室ですか？」

「うん、そうだよ」

「私もです。私、調べ物をする時、学校の図書室を良く利用するんですよ。って誰でもそうですね。あはは」

なんだか空回り気味の絵里ちゃんが、大きな笑い声をあげる。
おかげで僕も、一緒になって笑えた。

「あ、それよりも先輩、風邪は治りましたか」

「風邪？」

「はい」

「もう少しで完治するかな」

「そうですか。ということはまだ完治していないんですね？」

「そうだけど」

僕はやけに張り切る絵里ちゃんを不思議そうに見てうなずく。

「ならばここはあれですね。先輩、私の風邪の治し方講座を聞きますか？」

「え？」

「聞くっていってください？」

「じゃあ、聞かないよ」

きらきらと輝く絵里ちゃんの無垢な視線。
それを見て、僕はなんだか意地悪したくなってくる。

つい先ほど、申し訳ないと思ったばかりなのにどうしてこう思う

のか。
僕は自分の心がわからない。

「がーん」

絵里ちゃんはサイドにくくった髪を触りながら打ちひしがれる。
それを横目で見て、僕はほくそ笑んだ。

「先輩はあれですね」

「あれ？」

「一回デートしたら、もう私のことなんて用無しみたいな扱いにするんですね。私はモブキャラですか？」

よよよ、と泣き真似をする絵里ちゃん。
そんな時、僕はぽつりとつぶやく。

「デート」

その言葉には美咲さんのせいでいい思い出はなかった。
けど、今は絵里ちゃんとの楽しかった記憶が蘇る。

「絵里ちゃん」

真剣な目で絵里ちゃんを見つめる。

「な、なんですか先輩」

絵里ちゃんが僕の勢いに驚いたのか、一歩後ずさる。

「もう一回だけ秘密のデートをしよう。この前のやり直しの意味合いも込めてさ」

「せ、先輩からそんなこと言ってくれるなんて」

なんだか感極まっている絵里ちゃん。

しかも、小声でなにかぶつぶつ言っている。

「どうしたの？」

「いえ、なんでもないですよ」

「そう、ならいいんだけど」

「気にしないでくださいね、先輩」

「あ、うん」

「それとデートの件については頼りにしていますからね」

ポンと僕の背中を叩く絵里ちゃんがいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6299s/

幼馴染との付き合い方

2011年10月11日08時04分発行